

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第92集

下村遺跡 B 地区

2015

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第92集

しも むら い せき
下村遺跡 B 地区

2015

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター



遺跡全景（西から）

序

本書は、美祿市伊佐町伊佐下村地内での市道渋倉伊佐線の道路工事に先立ち、山口県宇部土木建築事務所から委託を受けて、同地内に所在する下村遺跡B地区において、公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

歴史的財産である遺跡の保護については、基本的には現状保存が望ましいところですが、開発事業等に伴い、やむを得ず消失することになる部分については、事前に発掘調査を実施し、関係機関と調整を図りながら記録保存をすることとしております。

山口県埋蔵文化財センターでは、8年前の平成18年度に下村遺跡A地区及びB地区の発掘調査を行っており、これらを含む道路（市道渋倉伊佐線）の延長線上に計画されている路線内にある下村遺跡B地区の継続調査を今年度実施しました。前回調査では、A地区からは絵画土器や甕・壺をはじめとする弥生時代の貴重な遺物や遺構が大量に発見されました。また、このA地区から約500m離れたB地区においては、古代及び中世の遺物や遺構が発見されています。

今回のB地区の調査では、前回の調査と同様に古代及び中世の遺物や遺構が発見されました。そして、さらに時代がさかのぼり、縄文時代の遺物や遺構も確認され、当時の人々の生活文化や社会の状況等を知る上で、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

この発掘調査をまとめた本書が、文化財愛護への理解を深めるとともに、教育及び文化の振興並びに学術研究の資料として広く活用されることはもとより、本書を通し、ふるさとの歴史や文化を改めて知っていただくことで、郷土に対する愛着をさらにもつ契機となり、活力とうるおいに満ちた郷土の創造と発展に寄与することを心から祈念する次第です。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び報告書の作成に当たり、御指導及び御協力をいただきました関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人山口県ひとつくり財団
理事長 松永貞昭

例 言

- 1 本書は、平成26年度に実施した^{しもむらいせき}下村遺跡B地区（^{みね いき いさしむら}山口県美祢市伊佐町伊佐下村地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、公益財団法人山口県ひとつくり財団が山口県宇部土木建築事務所の委託を受けて実施した。
 《契約名：市道渋倉伊佐線過疎代行（防災・安全交付金）工事に伴う調査業務委託第1工区》
- 3 調査組織は、次のとおりである。
 調査主体 公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センター
 調査担当 主 任 岡 田 裕 之
 文化財専門員 米 澤 昭 信
 調 査 員 大 重 優 花
- 4 本書の第2図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「伊佐」・「於福」を複製使用した。第1図、第3図は、山口県宇部土木建築事務所提供の地図を複製使用（一部修正）した。
- 5 本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北で示している。また、標高は、海拔高度（m）である。
- 6 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 7 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。
 SB：掘立柱建物 SK：土坑 SP：柱穴 SD：溝
- 8 出土遺物実測図中の遺物断面は、白抜きが土師器等、黒塗りが須恵器、薄い網かけが陶磁器、斜線が石器・鉄器を表わす。
- 9 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。
- 10 報告書作成において、緑釉陶器の鑑定については、杉原和恵氏・佐々木達也氏（防府市教育委員会）、陶磁器については、徳留大輔氏（山口県立萩美術館・浦上記念館主任学芸員）・市来真澄氏（同学芸員）、石器・石製品の一部鑑定については、亀谷敦氏（山口県立山口博物館学芸課長）にご教示・ご協力をいただいた。
- 11 調査において、配川武彦氏（元美祢市立秋吉台科学博物館館長）に調査指導をいただいたほか、森田孝一氏・山根謙二氏（美祢市教育委員会）には、ご教示・ご協力をいただいた。
- 12 試料の鑑定・分析に関して、放射性炭素年代測定（AMS測定）、樹種同定、リン酸分析および全炭素・全カルシウム分析、花粉分析および微細遺物の分類・同定、石材の化学組成分析を業者に依頼し、その成果を第V章に掲載した。
- 13 本書の作成・執筆は、岡田・米澤・大重が共同で行い、編集は米澤が行った。

本文目次

I	調査の経緯と概要	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過と概要	1
II	遺跡の位置と環境	3
III	遺構	7
1	調査区の概要	7
2	縄文時代の遺構	15
3	弥生・古墳時代～古代の遺構	19
4	中世の遺構	23
5	時期不明の遺構	39
IV	遺物	44
V	自然科学分析	60
1	炭化材等のAMS法による放射性炭素年代測定	60
2	炭化材の樹種同定	65
3	土壌サンプルのリン酸分析と全炭素・全カルシウム分析	67
4	土壌サンプルの花粉分析および微細遺物の洗い出し・分類・同定（微細物分析）	68
5	滑石製品の化学組成分析（蛍光X線分析）	69
VI	総括	75
1	縄文時代の落とし穴と袋状土坑	75
2	木炭焼成坑について	80
3	集石土坑について	82
4	中世の掘立柱建物と周辺遺構	83

挿図目次

第1図	調査区設定図	第22図	中世遺構実測図⑨
第2図	遺跡の位置と周辺の主な遺跡	第23図	時期不明遺構実測図①
第3図	グリッド設定図	第24図	時期不明遺構実測図②
第4図	調査区土層図①	第25図	弥生～古墳遺物実測図
第5図	調査区土層図②	第26図	古代遺物実測図
第6図	調査区土層図③	第27図	中世遺物実測図①
第7図	遺構配置図①	第28図	集石土坑出土遺物実測図①
第8図	遺構配置図②	第29図	集石土坑出土遺物実測図②
第9図	縄文時代遺構実測図①	第30図	中世遺物実測図②
第10図	縄文時代遺構実測図②	第31図	包含層出土遺物実測図①
第11図	古代遺構実測図	第32図	包含層出土遺物実測図②
第12図	弥生・古墳・古代遺構実測図	第33図	包含層出土遺物実測図③
第13図	遺構密集区遺構配置図	第34図	遺構外出土遺物実測図
第14図	中世遺構実測図①	第35図	暦年較正年代グラフ①・②
第15図	中世遺構実測図②	第36図	滑石製石鍋のSiO ₂ とAl ₂ O ₃ の関係
第16図	中世遺構実測図③	第37図	炭化材・花粉分析プレパラート内の状況
第17図	中世遺構実測図④	第38図	県内の落とし穴の底面積
第18図	中世遺構実測図⑤	第39図	下村遺跡B地区と岩国市郷遺跡の落とし穴配置
第19図	中世遺構実測図⑥	第40図	貯蔵穴と袋状土坑の例（断面形態）
第20図	中世遺構実測図⑦	第41図	木炭焼成坑の例
第21図	中世遺構実測図⑧	第42図	県内の集石をもつ中世墓の例

表目次

第1表	掘立柱建物SB01の構成柱穴一覧	第8表	樹種同定結果
第2表	掘立柱建物SB02の構成柱穴一覧	第9表	土壤理化学分析結果
第3表	柱列の構成柱穴一覧	第10表	主要化学組成
第4表	性格不明の土坑一覧	第11表	山口県内の落とし穴検出遺跡一覧
第5表	遺物観察一覧表	第12表	下村遺跡B地区の落とし穴一覧
第6表	放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)		
第7表	放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、 暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)		

図版目次

巻頭図版	遺跡全景(西から)	図版10	1 SK06掘り込み状況(下層 南東から) 2 SK06石鍋出土状況(南西から) 3 SK06掘り込み状況(最下層 南から) 4 SK06土器出土状況(東から) 5 SK10掘り込み状況(西から) 6 SK10土器出土状況(南から) 7 SK10掘り込み状況(北から) 8 SK10土器出土状況(北から)
図版1	1 調査区遠景(南西から) 2 調査区全景	図版11	1 SK11掘り込み状況(東から) 2 SK11掘り込み及びSK25検出状況(北から) 3 SK12掘り込み状況(東から) 4 SK25完掘状況(南から) 5 SK13掘り込み状況(北から) 6 SK13土器出土状況(西から) 7 SP112土器出土状況(西から) 8 SP161土層断面(南から)
図版2	1 調査区東側完掘状況(東から) 2 調査区東側完掘状況(西から)	図版12	1 SP197土器出土状況(南東から) 2 SP300石出土状況(南から) 3 SP571白磁皿出土状況(西から) 4 SP094土製品出土状況(北から) 5 SP169石出土状況(南東から)
図版3	1 調査区西側完掘状況(東から) 2 調査区東側南壁土層断面(北から)	図版13	遺構出土遺物①(弥生~古墳・古代・中世)
図版4	1 調査区東側西壁土層断面(東から) 2 SK08完掘状況(西から) 3 SK09完掘状況(北から) 4 SK14完掘状況(西から) 5 SK24完掘状況(東から)	図版14	遺構出土遺物②(中世 柱列・溝・集石土坑)
図版5	1 SK20検出及び半裁状況(東から) 2 SK20土層断面(南から) 3 掘立柱建物SB01完掘状況(南から) 4 SK26検出状況(北から) 5 SK26掘り込み状況(北から)	図版15	遺構出土遺物③(中世 集石土坑)
図版6	1 SK26木炭検出状況(東から) 2 SK26完掘状況(東から) 3 SP063土器出土状況(北東から) 4 SP144土器出土状況(南から) 5 SP144土器出土状況(拡大 東から)	図版16	遺構出土遺物④(中世 集石土坑・土坑)
図版7	1 SP563(SB02)石出土状況(西から) 2 SP563(SB02)石出土状況(北から) 3 SP138(SB02)土器出土状況(北から) 4 SP138(SB02)土器出土状況(拡大 東から) 5 SP138(SB02)柱痕検出及び石出土状況(南から)	図版17	遺構出土遺物⑤(中世 土坑・柱穴)
図版8	1 SK05集石出土状況(東から) 2 SK07集石出土状況(北から)	図版18	遺構出土遺物⑥(中世 柱穴)、 包含層出土遺物①(石器、縄文土器)
図版9	1 SK06集石出土状況(北から) 2 SK06集石検出状況(北から) 3 SK06掘り込み状況(南から) 4 SK06土器出土状況(東から) 5 SK06青磁椀出土状況(南西から)	図版19	包含層出土遺物②(弥生・古墳・古代)
		図版20	包含層出土遺物③(古代・中世)
		図版21	包含層出土遺物④(中世)
		図版22	包含層出土遺物⑤(中世・近世・時期不明)、 遺構外出土遺物

I 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

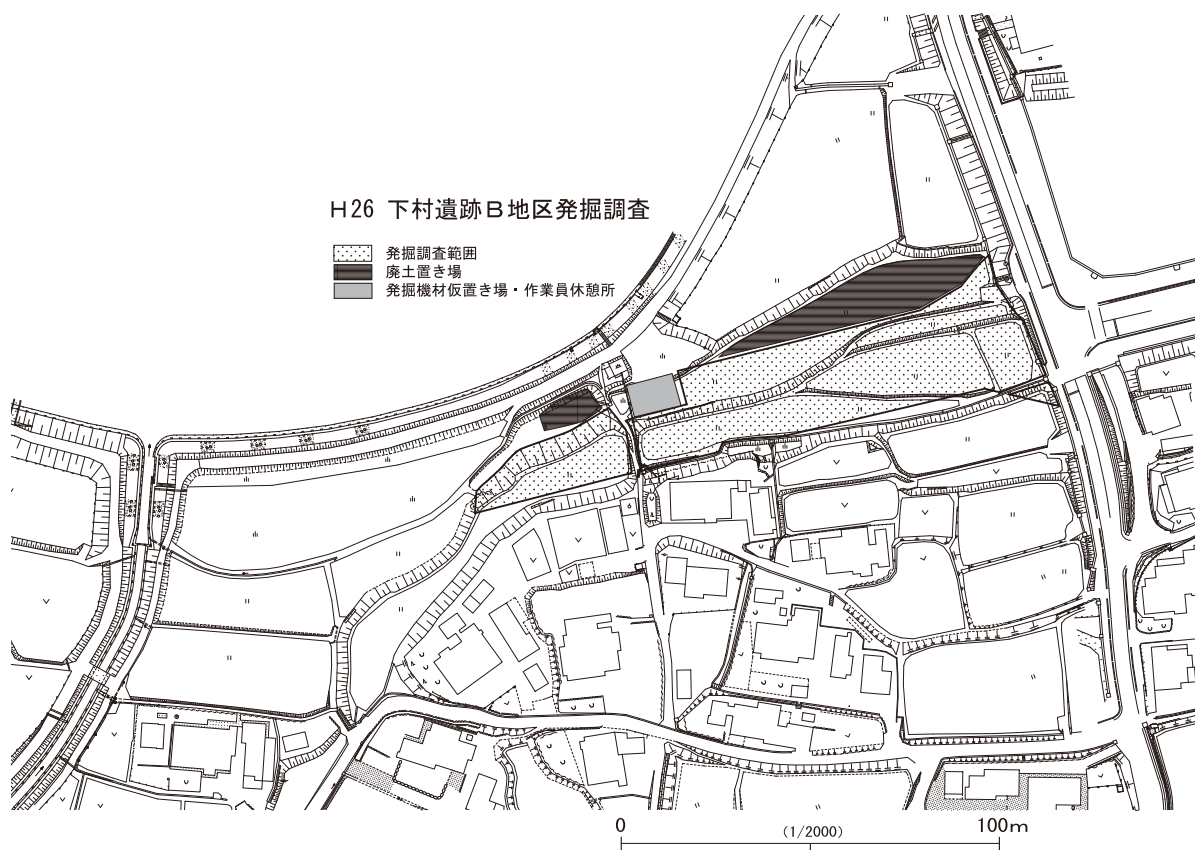
市道渋倉伊佐線過疎代行（防災・安全交付金）事業に伴い、山口県宇部土木建築事務所から、路線予定地内の埋蔵文化財有無についての照会があり、山口県教育委員会が平成25年7月・11月に対象地の試掘調査を行った。

試掘調査の結果、柱穴等の遺構が密集して分布する状況が確認され、県教育委員会は本発掘調査が必要である旨を回答した。この結果を受け、宇部土木建築事務所は発掘調査を委託し、公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センターが受託して実施することとなった。

2 調査の経過と概要

契約に先立ち、平成26年4月8日に山口県宇部土木建築事務所の担当者と現地で打合せを行い、調査区の耕土部分の除去作業については、宇部土木建築事務所が委託した道路本体工事実施業者が行うこととなり、その際に立会を行うことを確認した。その後、4月15日付けで調査の委託契約を締結し、発掘調査届の準備など各種手続きを進めていった。

5月16日、重機による調査区内の耕土除去作業を開始し、同時に発掘調査事務所の設置作業等を併行して行なった。5月29日には、美祢市教育委員会のご協力の下、美祢市歴史民俗資料館において発掘作業員説明会を行った。そして5月30日、耕土部分の除去作業が完了し、6月4日より、本センターの委託業者による、重機での表土除去作業が始まり本格的な発掘調査を開始することとなった。調査区は農業用水揚水のためのパイプと生活道路によって東西に分断されており（第1図）、作業員によ



第1図 調査区設定図



重機による表土除去作業



空中写真撮影



現地説明会

る発掘作業手順の関係から、揚水パイプの西側調査区から表土除去を行った。西側調査区の表土除去完了とともに、6月9日より作業員による作業を開始し、調査区の清掃・遺構検出作業を始めた。6月13日、表土除去完了の後、国土座標設置作業を行い、遺構検出作業の終了とともに、トータルステーションを使用して、遺構配置図の作成を行った。

当初、天候にも恵まれ順調に発掘作業が進行していたが、7月に入り台風や天候不順により、7月は延11日間、8月は延9日間しか作業を行うことができず、大幅に作業の予定が遅延することとなった。9月に入り、天候が安定し作業が進行すると同時に、調査員による遺構の実測作業を開始した。センター職員による遺構実測の支援もうけたが、作業工程の遅れはいかんともしがたく、約1ヶ月の発掘作業期間の延長を余儀なくされた。

発掘現場は、秋吉台カルストの西南端部にあたり、石灰岩の溶食土壌である赤色土壌に覆われていると同時に、調査区内には結晶質石灰岩の露頭（図版3の1）のほか、地元で「ジバス」と呼ばれている石灰岩溶食に伴う陥没が3ヶ所出現した（第8図 図版2の1・2）。そのため、10月30日、元秋吉台科学博物館館長の配川武彦氏を招請し、調査指導をいただいた。

発掘作業がほぼ完了した11月上旬、調査区全体の清掃作業を行い、7日にヘリコプターによる空中写真撮影と航空写真測量を実施した。翌日には現地説明会を行い、調査員が調査区内の遺構と、発掘された遺物の説明を行い、約70名の見学者があった。翌週の11日から遺構の追加掘り込みと実測を行い、11月20日には現地での発掘作業を終了し、山口県埋蔵文化財センターにて、出土遺物の実測作業や検出遺構図面の整理等を開始した。

12月8日、重機による表土埋め戻し作業を開始したが、寒波到来による天候不順のため遅延し、12月19日に完了した。そして、翌年1月9日、宇部土木建築事務所に現地引き渡しを行った。

その後、出土遺物の写真撮影、出土遺物の実測作業や検出遺構図面の整理等を行い、この報告書を刊行するに至った。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

下村遺跡B地区（第2図-1）は、山口県美祢市伊佐町伊佐下村に所在する縄文時代から中世の集落遺跡である。大嶺盆地の南東部、南流する厚狭川が西に流れを変え伊佐川と合流する地点の下流100m付近の左岸に位置し、桜山（標高455.5m）北麓の標高85～90mの舌状に張り出した丘陵斜面上に立地する。

美祢市は、2008（平成20）年に旧美祢郡美東町および秋芳町と合併し、新市制による美祢市となり市域を拡大した。本州最西端部を占める山口県の西部中央、日本海と瀬戸内海のほぼ中間に位置し、市の中央部から東部にかけて、日本最大のカルスト台地秋吉台が広がる。地下資源が豊富で、古代は銅をはじめとする金属、近代では大嶺炭田を中心とした良質の石炭、現在でも石灰石・硅石・大理石などを産出している。美祢市域は、標高100m以上の中起伏山地と丘陵によって占められており、東部は標高700mを超える西鳳凰山山地を境に山口市・萩市と接し、北部は、標高600mを超える花尾山山地が、日本海側と瀬戸内海側の分水嶺となっている。一部、下関市と隣接する木屋川水系地域を除けば、西部の旧美祢市域は、南流し周防灘に注ぐ厚狭川水系、東部の旧美祢郡域は、同じく南流する厚東川水系に属する。厚狭川および厚東川の秋吉台周辺地域は石灰岩台地および丘陵地となっており、標高300m～350mの小起伏面台地が広がり、カルスト地形特有の凹地形であるドリリーネやウバーレが多く見られる。また、嘉万盆地や於福盆地・伊佐盆地・大嶺盆地は、縁辺ポリエの性格をもつ。気候は寒暖の差が大きい内陸性の気候を呈し、県内では寒冷・多雨地域に属する。

次に、現在の美祢市は平成の大合併により市域を拡大しているため、下村遺跡B地区の歴史的位置づけを明確にするため、旧美祢市域の遺跡について概観する。

秋吉台やその周辺地域は、地形的に狩猟採集に適した環境であり湧水も多く、縄文時代の遺跡が多く分布している。しかし、旧美祢市域では、東分長ヶ坪のコジキ穴遺跡（同19）で、人骨片や縄文土器が検出され、宇部興産伊佐セメント工場のある伊佐台遺跡（同32）からも縄文時代の磨製石斧が発見されているが、これ以外の遺構・遺物の発見は少ない。

弥生時代の遺跡としては、隣接する下村遺跡A地区（同2）があり、平成18年（2006年）に行われた発掘調査において、竪穴建物6棟、貯蔵穴約50基、土坑約150基、墓3基が検出された。下村遺跡A地区は、弥生時代中期初頭に限定される遺跡であり、当時の集落構造を復元する上で貴重な資料となった。検出された墓の1基から大量の管玉が出土したほか、貯蔵穴の1基から、弥生絵画土器としては日本最古級の鹿の絵が描かれた絵画土器も出土している。弥生時代前期から中期にかけての遺跡として、大嶺町の東分中村遺跡（同9）・於福町の砂地岡遺跡（同35）、中期後半の遺跡として上ノ山遺跡（同36）がある。大嶺町の上領遺跡（同13）は、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡で、弥生時代前期後半の隅丸方形の土坑が検出された。土器では、日本海側に分布する湯免式壺に形態が類似するものが出土し、この時代の山陰地域との交流を示すものとして注目される。このほか、旧美祢市域で弥生土器が出土した遺跡としては、大嶺町下領遺跡（同11・12）、曾根遺跡（同15）、向原遺跡（同16）、彦山遺跡（同18）、伊佐町野崎遺跡（同27）などがあり、大嶺盆地や伊佐盆地が、この地域において最も稲作に適し、農業生産の盛んな場所であったことが推察される。



- 1 下村遺跡B地区 2 下村遺跡A地区 3 東渋谷遺跡 4 西渋谷遺跡 5 渋谷山瓦窯遺跡 6 東分中村古墳
 7 吉則古墳 8 東分中村経塚 9 東分中村遺跡 10 宗高遺跡 11 下領遺跡B地区 12 下領遺跡A地区 13 上領遺跡
 14 上領山遺跡 15 曾根遺跡 16 向原遺跡 17 横道古墳 18 彦山遺跡 19 コジキ穴遺跡 20 小林遺跡 21 小林古墳
 22 高下観音堂経塚 23 牛明遺跡 24 万倉地経塚 25 万倉地遺跡 26 内川遺跡 27 野崎遺跡 28 丸山遺跡
 29 内川古墳 30 広下遺跡 31 広下古墳 32 伊佐台遺跡 33 木ノ実城跡 34 宮ノ前遺跡 35 砂地岡遺跡
 36 上ノ山遺跡 37 於福(大和)銅山跡 38 伊佐城跡(万倉地城または鶴海山城) 39 南原寺経塚 40 南原寺遺跡

第2図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

今回の調査では、古墳時代の遺構は確認されていないが、周辺地域には、伊佐の内川古墳（同29）・広下古墳（同31）、大嶺町の吉則古墳（同7）・横道古墳（同17）・彦山遺跡（同18）、於福町の宮ノ前遺跡（同34）などの古墳群、伊佐町の内川遺跡（同26）・広下遺跡（同30）、大嶺町の上領遺跡（同13）・向原遺跡（同16）、於福町の上ノ山遺跡（同36）などの古墳時代の集落遺跡がある。これらの古墳のほとんどは古墳時代後期の横穴式石室で、前期・中期の主体であった箱式石棺の発掘例は、この地域では内川古墳（同29）のみである。このうち、横道古墳（同17）は、伊佐台の甲の上南西中腹と、山麓台地の2か所に構築されている。3号墳の横穴式石室は、周辺に産する灰白色の石灰岩を用いており、埋葬された人骨は幼児から熟年までの9体で、追葬された家族墓とみられている。

大化の改新（645年）の後、公地公民の制度が整備され、穴門（長門）国に美祢郡が置かれた。美祢郡には7つの郷があり、於福・大嶺・伊佐の各盆地は、それぞれ意福・美祢・位佐の各郷にあたりと考えられる。当時、美祢郡は銅をはじめとする金属生産の役割を担っていたが、その中心は秋吉台及びその周辺で、旧美祢市域では、於福町の砂地岡遺跡（同35）で鉦濠の出土が確認されているのみである。現在、大嶺盆地の国行は、国道316号線と国道435号線が交差し、山陰・山陽を結ぶ十字路となっているが、この時代も陰陽連絡小路として重要な役割を果たしており、大嶺盆地には鹿野駅家が所在していたことが推定されている。美祢郡の郡衙も大嶺盆地に置かれていたとみられ、上領遺跡（同13）では、「大」とヘラ書きされた須恵器や、円面硯が出土しており、有力な候補地と考えられるが、現在までの発掘調査で、その所在地を確定する明確な遺構・遺物は確認されていない。

平安時代末から、寄進地系荘園の展開により土地支配の体制が変化し、大嶺盆地では、1076（承保3）年までに大峯庄が成立し、周辺の伊佐・於福盆地とともに石清水八幡宮領となっている。美祢の市街地の南方、桜山の南麓八合目付近にある南原寺は991（正暦2）年に花山天皇が中興したと伝えられる古刹で、寺の周辺から桜山山頂にかけて坊の跡や祭祀遺構が存在し、一括して南原寺遺跡（同40）と呼ばれている。山頂付近からは南原寺経塚（同39）が検出され、平安時代中期に比定される滑石製経筒が出土している。旧美祢市域では前述の経塚のほか、東分中村経塚（同8）も発掘調査されており、そのほか数基の経塚が確認されている。南原寺は麓の長谷を1335（建武2）年までに新たに開発しており、中世における耕作地の拡大のありかたを示す典型的な例といえる。

以上、旧美祢市域の自然環境や遺跡について概観したが、今後の発掘調査でさらに美祢地域の歴史が浮き彫りになることが期待される。

参考・引用文献

美祢市史編集委員会編『美祢市史』1982年

山口県ひとづくり財団 山口県埋蔵文化財センター編『下村遺跡』2007年

山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター編『上領遺跡』2004年

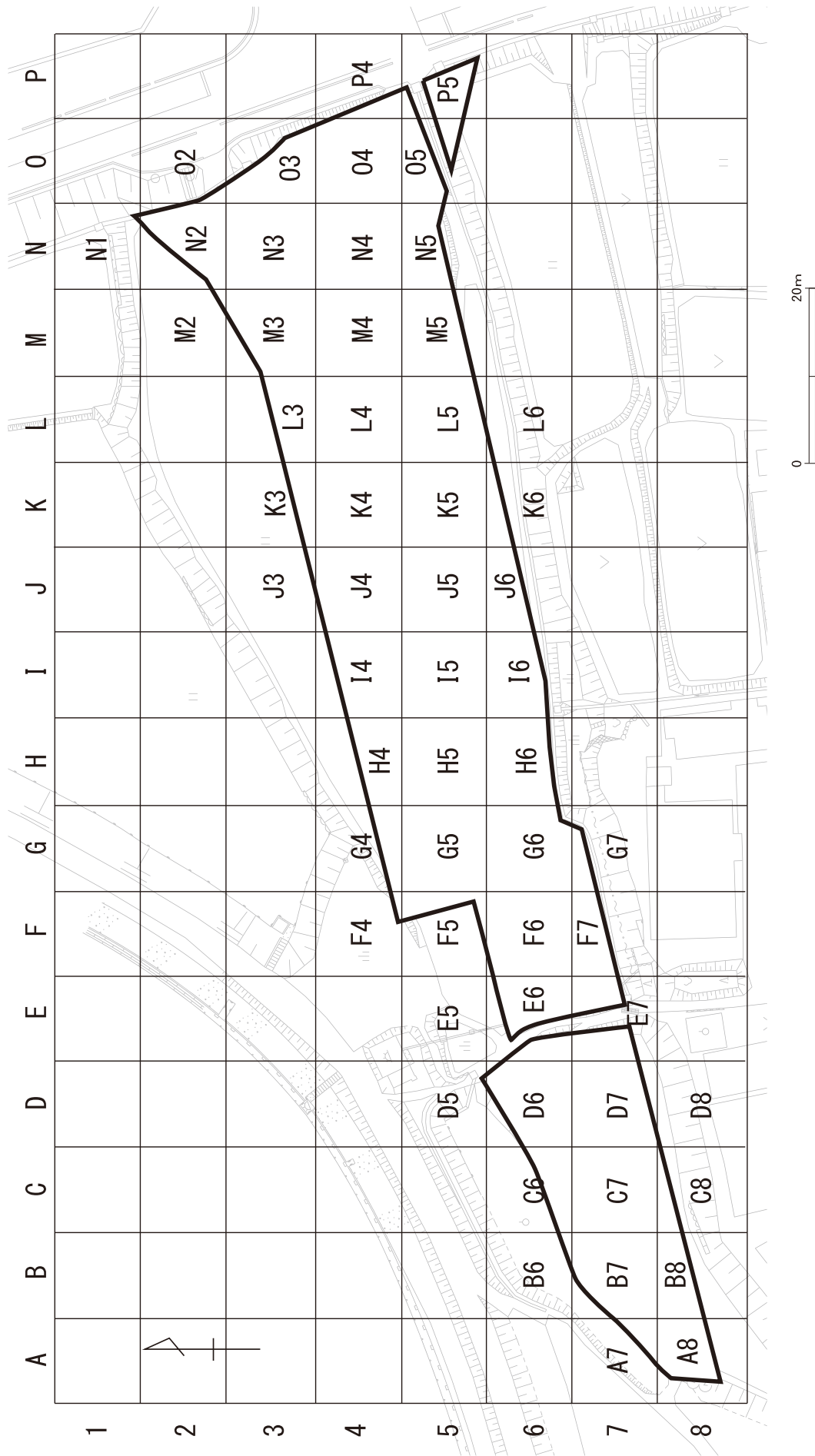
山口県教育財団 山口県教育委員会編『上ノ山遺跡』1994年

山口県教育財団 山口県教育委員会編『砂地岡遺跡』1993年

美祢市教育委員会編『東分中村経塚』1999年

美祢市教育委員会編『南原寺遺跡 第一次発掘調査概要』1983年

奈良本辰也・三坂圭治監修『山口県の地名』日本歴史地名大系第36巻 平凡社 1980年



第3図 グリッド設定図

Ⅲ 遺 構

1 調査区の概要

(1) 基本層序

調査区の現状は、東側・西側ともに耕作地として利用されていた。調査区における基本層序を確認するため、まず調査区東側の東壁（A-A'）、南壁（B-B'）、西壁（C-C'）で土層の堆積状況を確認した。

以下、各地点の土層の状況について述べる。

A-A'（第4図） 1層は表土で、最近までの耕作土である。2層は造成土で、3層は旧耕作土または床土であり、旧耕作時は南北方向に上下2段の耕作面であったものを、1層における耕作時に、2層によって下段を埋め立てて耕作面を拡張したと考える。4～6層は遺物包含層であり、含まれるマンガンの多寡によって3層に分けたが、堆積状況などから4層と5・6層にまとめられると考える。含まれる遺物は、古代・中世を主体とする。

B-B'（第5図、図版3） 1層は表土で、最近までの耕作土である。2層と4～8層が客土を含む造成土である。3層と9層はグライ化しており、それより下層の11層と12b～12d層の上面でマンガンの沈着がみられることから、旧耕作土または床土と考える。3層と9層は東西方向に上下の段をつくるが、いずれも同時期の耕作面と考える。8層は3層と9層における耕作時の造成土であり、畦畔に相当する可能性がある。1層における耕作時に、2層と4～7層によって東西の段差を埋めたと考える。10層は3層の盤土であり、11層は旧表土の可能性はある。12a～12d層はいずれも火山碎屑物風化土による同一の基盤層と考えるが、土層の色調がグラデーションとなっており便宜上分層した。これは、12b・12c層のように、酸化鉄または酸化マンガンを多く含む土壌全体が黒っぽくなるなどの要因によって生じたと考える。

C-C'（第5図、図版4） 1層は表土で、最近までの耕作土である。2層は1層における耕作に伴う盤土である。3a・3b層は自然堆積層であるが、少なくとも3a層は地形的な傾斜にともなう流土と考える。観察地点の北側では大きく削平を受けるが、さらに北側のG4・H4グリッドでは自然地形を残しており、3a・3b層のつづきと推定する堆積を確認した。そこからは少量ながら遺物が出土している。4層と5層はいずれも火山碎屑物風化土からなる基盤層である。この土層観察地点を含む東側調査区の西半分では、東壁や南壁においてみられた旧耕作土層を確認していない。

以上より、本調査区の基本層序を整理すると次のようになる。

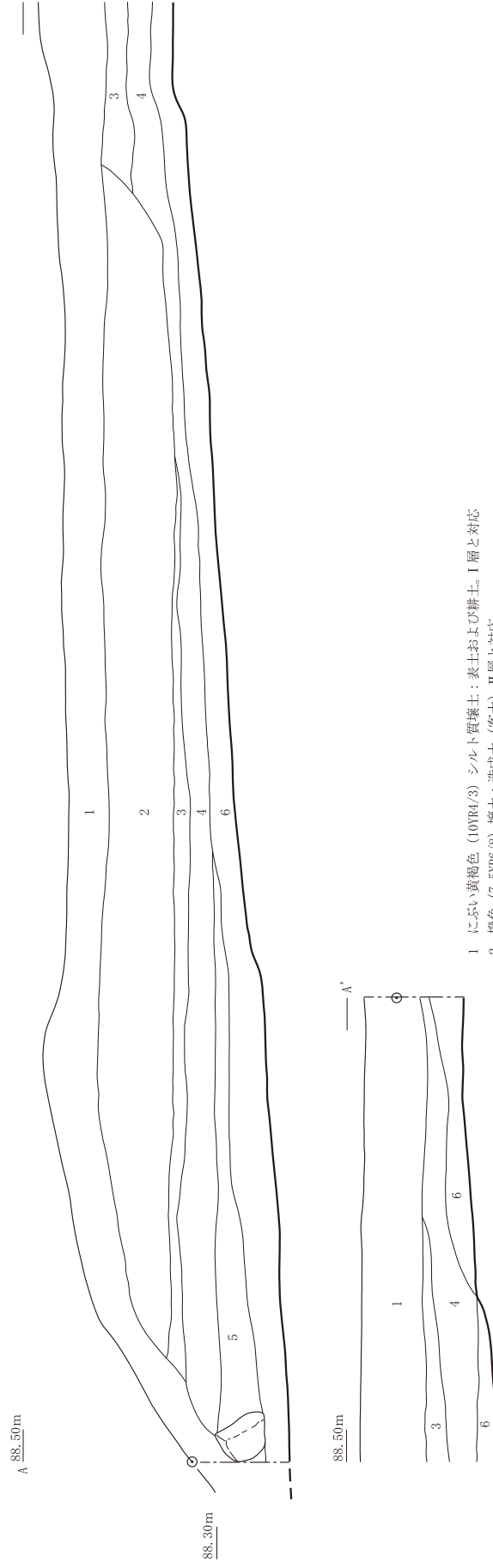
I 層：褐色～灰褐色系シルト質壤土。表土および耕作土。厚さ10～40cm。現代。

II 層：褐色～橙色系土。造成土（客土を含む）。厚さ50～80cm。現代。

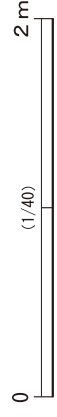
旧耕作時における各耕作面間の段差を埋めて、現在の耕作面に整備した時のものと考えられる。西壁付近では自然地形を平坦面に整えている。

III 層：にぶい黄褐色系軽埴土。旧水田耕作土で、グライ化する。厚さ約10cm。近世～近代。

下村遺跡B地区東側調査区東壁土層断面図 (A-A')

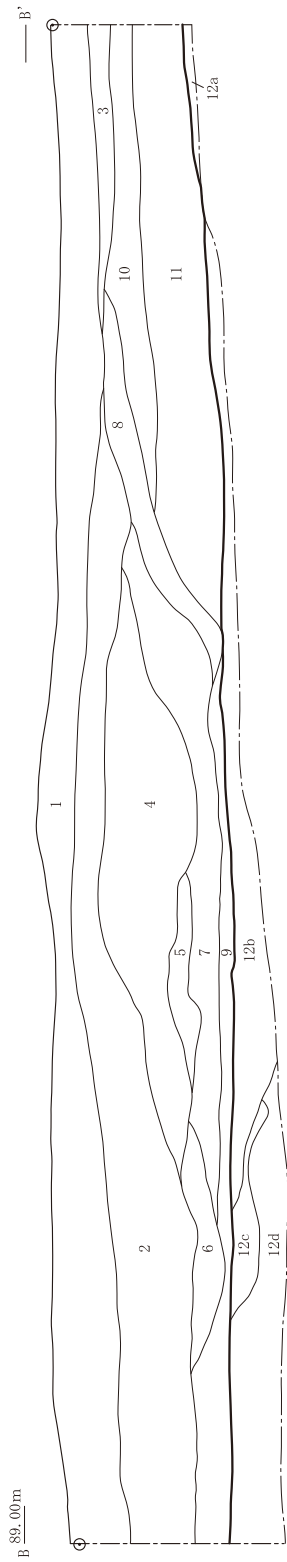


- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質壤土；表土および耕土。I層と対応
- 2 橙色 (7.5YR6/8) 壤土；造成土 (客土)。II層と対応
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 厩埴土；旧耕土か。III層と対応
- 4 褐色 (7.5YR4/3) シルト質埴土；遺物包含層 (上層)。礫を多く含む。IV A層と対応
- 5 褐色 (7.5YR4/4) シルト質埴土；遺物包含層 (下層)。礫を多く含む。マンガンを含み、IV B層と対応
- 6 褐色 (7.5YR4/4) シルト質埴土 (5層よりやや明るい)；遺物包含層 (下層)。礫を少し含む。5層に接してマンガンが層状に沈着する。IV B層と対応



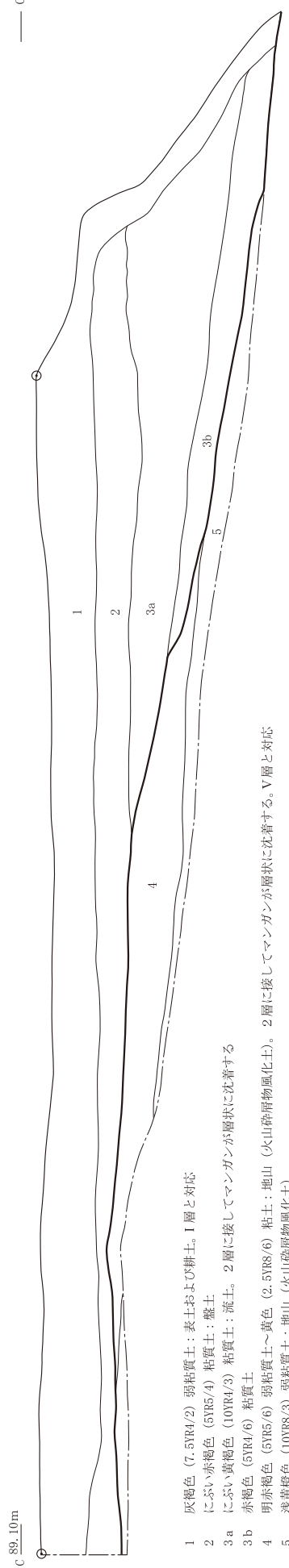
第4図 調査区土層図①

下村遺跡B地区東側調査区南壁土層断面図 (B-B')

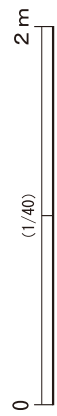


- | | | | |
|---|--|-----|--|
| 1 | 褐色 (10YR4/4) シルト質壤土；表土および耕土。I層と対応 | 7 | 褐色 (10YR4/4) 軽殖土；造成土。II層と対応 |
| 2 | にぶい褐色 (7.5YR5/4) 軽殖土；造成土。II層と対応 | 8 | 橙色 (7.5YR6/6) シルト質壤土；造成土 (客土)。II層と対応 |
| 3 | 灰黄褐色 (10YR4/2) 軽殖土；旧耕土または床土。グラライ化する。III層と対応 | 9 | にぶい黄褐色 (10YR5/3) 軽殖土；旧耕土または床土。グラライ化する。III層と対応 |
| 4 | 褐色 (7.5YR4/4) 軽殖土；造成土。II層と対応 | 10 | にぶい褐色 (7.5YR5/4) 重殖土；盤土 |
| 5 | 明黄褐色 (10YR6/6) シルト質壤土；造成土 (客土)。5層に接してマンガンが層状に沈着する。II層と対応 | 11 | 褐色 (7.5YR4/3) 重殖土；旧表土が |
| 6 | 浅黄褐色 (10YR8/4) シルト質壤土；造成土 (客土)。マンガン塊を少し含む。II層と対応 | 12a | 浅黄褐色 (7.5YR8/4) 重殖土；地山 (火山砕屑物風化土)。V層と対応 |
| | | 12b | 黒褐色 (7.5YR2/2) 重殖土；地山 (火山砕屑物風化土)。全体にマンガン塊を蜜に含む。V層と対応 |
| | | 12c | 褐色 (7.5YR4/3) 重殖土；地山 (火山砕屑物風化土)。マンガン塊を蜜に含む。V層と対応 |
| | | 12d | 橙色 (7.5YR6/6) 重殖土；地山 (火山砕屑物風化土)。7層に接してマンガンが層状に沈着する。V層と対応 |

下村遺跡B地区東側調査区西壁土層断面図 (C-C')



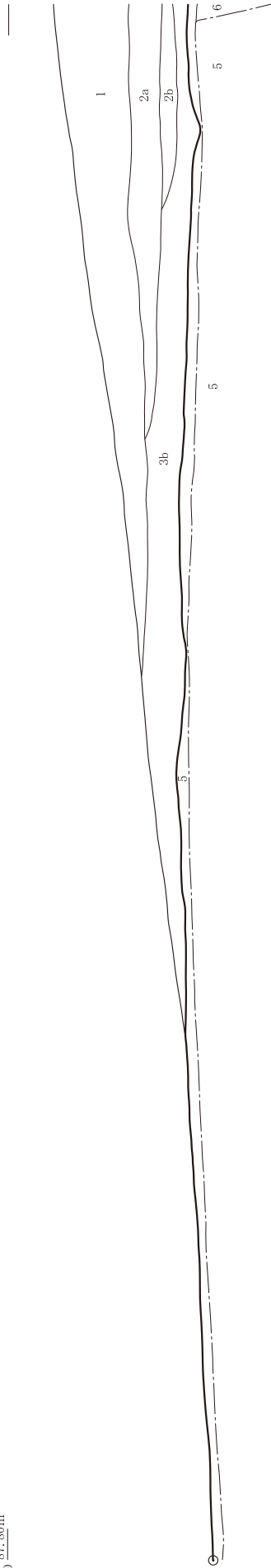
- | | |
|----|--|
| 1 | 灰褐色 (7.5YR4/2) 弱粘質土；表土および耕土。I層と対応 |
| 2 | にぶい赤褐色 (5YR5/4) 粘質土；盤土 |
| 3a | にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土；流土。2層に接してマンガンが層状に沈着する |
| 3b | 赤褐色 (5YR4/6) 粘質土 |
| 4 | 明赤褐色 (5YR5/6) 弱粘質土～黄色 (2.5YR8/6) 粘土；地山 (火山砕屑物風化土)。2層に接してマンガンが層状に沈着する。V層と対応 |
| 5 | 浅黄褐色 (10YR8/3) 弱粘質土；地山 (火山砕屑物風化土) |



第5図 調査区土層図②

下村遺跡B地区東側調査区べルト1土層断面図（西から D-D'）

D 87.80m



- 1 褐色 (7.5YR4/4) シルト質埴壌土；遺物包含層（上層）。径0.5～1.0cmの炭化物を含む。IV A層と対応
- 2 a 褐色 (7.5YR4/3) シルト質埴壌土；遺物包含層（中層）。径0.5～1.0cmの炭化物を含む。IV B層と対応
- 2 b 褐色 (7.5YR4/3) シルト質埴壌土；遺物包含層（中層）。マンガンが沈着する。IV B層と対応
- 3 a 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト質埴壌土；遺物包含層（下層）。マンガンが沈着する。IV B層と対応
- 3 b 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト質埴壌土；遺物包含層（下層）。SK26の直上付近で炭化物を多く含む→SK26の覆土の可能性あり。IV B層と対応
- 4 a 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト質埴壌土；遺構（土坑）埋土。径4～5cmの地山ブロックを少し含む
- 4 b 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト質埴壌土；遺構（柱穴）埋土。径2～3cmの地山ブロックを少し含む
- 5 橙色 (7.5YR7/6) 重埴土；地山の再堆積土。径2～3mmの炭化物を少し含む
- 6 浅黄橙色 (7.5YR8/6) 重埴土；地山（火山砕屑物風化土）。一部グライ化する。V層と対応か

87.80m

下村遺跡B地区東側調査区べルト2土層断面図（東から E-E'）

E 87.30m



- 1 褐色 (7.5YR4/4) シルト質埴壌土；遺物包含層
- 2 にぶい褐色 (7.5YR5/4) シルト質埴土；遺物包含層。3・4層と比べてやや明るい色調。3・4層と同一層か
- 3 褐色 (7.5YR4/3) シルト質埴土；遺物包含層。マンガンを含む。南帯りで地山ブロックを少し含む。2・4層と同一層か
- 4 褐色 (7.5YR4/3) シルト質埴土；遺物包含層。地山ブロックを少し含む。2・3層と同一層か。
- 5 暗褐色 (7.5YR3/3) 重埴土；遺物包含層
- 6 にぶい褐色 (7.5YR5/4) ～灰褐色 (7.5YR5/2) 重埴土；5層と地山の混着土
- 7 にぶい褐色 (7.5YR5/3) 重埴土；地山（火山砕屑物風化土）。グライ化する。V層と対応か
- 8 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 軽埴土；陥没に伴う東側からの地山崩落土か

0 (1/40) 2m

下村遺跡B地区東側調査区べルト3土層断面図（北から F-F'）

F 86.60m



第6図 調査区土層図③

IV A層：褐色系シルト質埴土またはシルト質壤土。遺物包含層（上層）。マンガンが沈着する。厚さ10～50cm。奈良～平安時代の須恵器・土師器を主体とするが、中世の土師器や青磁・白磁も含む。

IV B層と土質・色調ともほとんど差はないが、堆積状況等から2層に分ける。IV A層・IV B層ともに東側調査区の東壁付近のM3～O3、M4～O4グリッドを中心に厚く堆積する。

IV B層：褐色系シルト質埴土またはシルト質壤土。遺物包含層（中・下層）。マンガンが沈着する。厚さ10～50cm。出土遺物や土質・色調はIV A層とほとんど差はない。

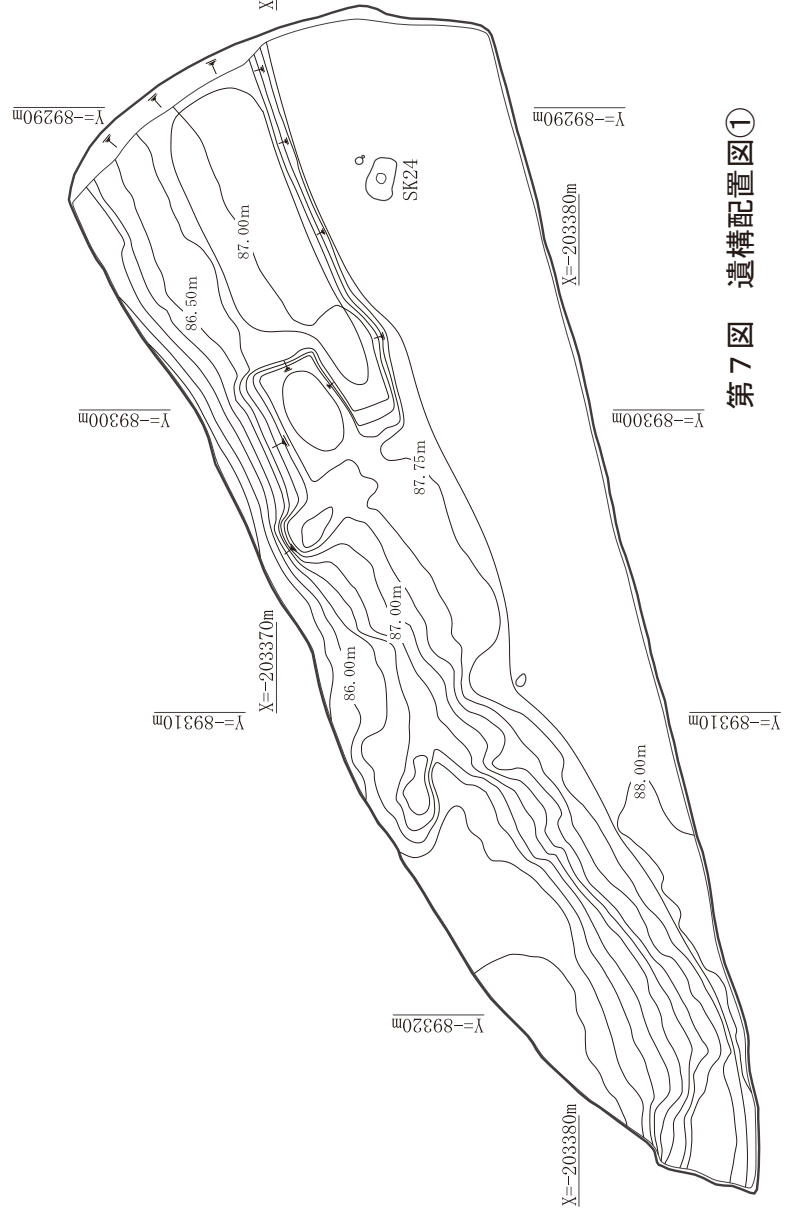
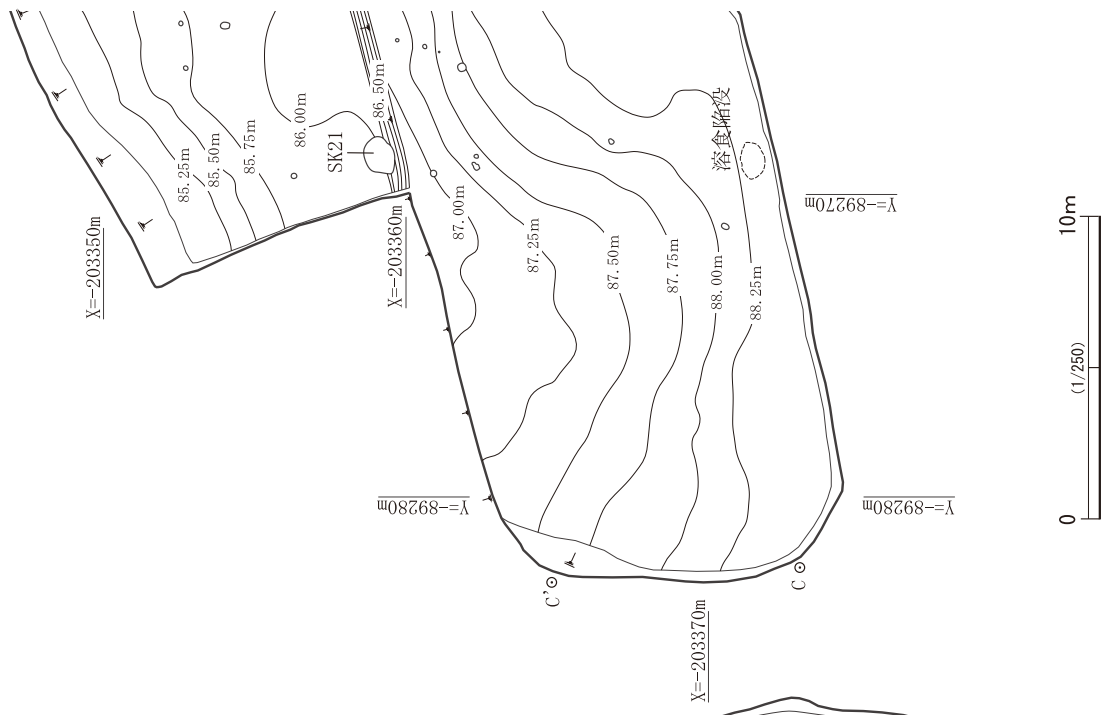
V 層：浅黄橙色系重埴土。基盤層（火山碎屑物風化土）。マンガン沈着等の影響を受けて、地点により様相が異なる。V層上面が遺構検出面である。

次に、表土および耕作土除去後、M3～O3、M4～O4グリッドの範囲で遺物包含層が厚く堆積していたことから、その堆積状況を確認するため、N3・N4グリッドにベルト1（D-D'）をほぼ南北の方向で設定した。さらに、この遺物包含層は、溶食陥没の影響により、N4グリッドを中心とする直径約5mの円形状の範囲で厚く堆積すると推定されたことから、その堆積状況を確認するため、ベルト1に接してすぐ西側に土層観察用のトレンチを入れたほか、さらに西側に平行するベルト2（E-E'）と、ベルト2の東側に接して直交するベルト3（F-F'）を設定した。

以下、各ベルトの土層の状況について述べる。

D-D'（第6図） 1～3b層は遺物包含層である。土質や色調によって、大きく上層（1層）、中層（2層）、下層（3層）に分ける。さらに便宜的に2層は2a層とマンガンの沈着する2b層に、3層はマンガンの沈着する3a層と3b層にそれぞれ分けたが同質の土壌である。各層とも古代～中世を主体とする遺物が出土している。1層と2a層では少量の炭化物を含んでおり、3b層でも木炭焼成坑と考えるSK26の直上付近で多量の炭化物を含んでいた。3b層の炭化物を包含する部分は、SK26の覆土に相当する可能性があるが、土層観察からは遺物包含層と区別できなかった。4a層と4b層はそれぞれ土坑と柱穴の埋土の一部で、5層上面から掘削されており、基盤層ブロックを含んでいる。6層は火山灰碎屑物風化土からなる基盤層で、5層は基盤層の再堆積土であり、5層上面が遺構検出面と対応すると考える。ベルト1の土層観察からは、溶食陥没の影響を判断できなかった。

E-E'（第6図） 1～6層はいずれも遺物包含層である。土質や土色から大きく1層・2～4層・5層・6層に分けられる。2～4層は、2層の色調がやや明るいいため3層に分層しているが、土質からみて同一層の可能性が高い。7層は火山灰碎屑物風化土からなる基盤層で、大部分が浸水によりグライ化する。この7層は南側斜面より平坦面にかけて連続しており、その上層に5層と6層が堆積すること、6層が5層と基盤層の混淆層であること、3層の南側斜面寄りでは基盤層ブロック（基盤層崩落土）を多く含むことなどから、ある時期に石灰岩地形による溶食陥没の影響を受けて、基盤層（7層）



第7図 遺構配置図①



第8図 遺構配置図②

とその上層の遺物包含層（1～6層）が同時に落ち込んだものと判断する。この陥没の時期については、古代の建物であるSB01の南東寄り柱穴2基がともに落ち込むこと、古代と考える木炭焼成坑SK26の一部がわずかに崩落すること、遺物包含層が古代の遺物を主体とし、中世の遺物もわずかに含むことから、少なくとも古代～中世以降の時期と考える。

F－F'（第6図） 5層と6層はベルト2の5層・6層と対応する遺物包含層である。8層は溶食陥没の影響を受けた、おそらく東側からの基盤層崩落土と考える。8層中および8層下に集石がみられるが、陥没に伴い8層とともに崩落したと考える。遺物が含まれないこと、周辺で平面的かつ層位的に遺構の痕跡を確認できないことから、人為的な集石の可能性は低いと判断する。

（2）遺構の状況（第7・8図）

今回の調査では、縄文時代の落とし穴5基、袋状土坑1基、古代（奈良～平安時代）の掘立柱建物1棟、木炭焼成坑1基、土坑2基、中世（鎌倉～室町時代）の掘立柱建物1棟、柱列4列、溝2条、集石土坑3基、土坑4基、時期不明の土坑9基、溝4条を確認した。そのほか、柱穴を多数確認しており、建物や柱列を構成する柱穴を含めると、総数で580基を確認した。

遺構は、ほとんどが東側調査区に集中しており、調査区内でも標高が高い南壁寄りの中央から西側にかけて縄文時代の遺構が分布する。また、東壁付近の緩傾斜面から平坦面にかけて古代の遺構が、調査区中央から東側にかけての広い平坦面には主に中世の遺構が分布するなど、調査区内の位置および地形によって概ね遺構の時期が異なっている。

さらに、先述のように、調査区東壁付近のM3～O3、M4～O4グリッドの範囲に遺物包含層が堆積しており、石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦質土器、石鍋、青磁・白磁など、各時代の遺物が多種・多数出土している。

以下、各時代順で主要な遺構について報告するが、柱穴については、柱痕跡や根石が確認できるなど、特記すべきもののみ図を掲載し、説明することとする。

2 縄文時代の遺構

（1）落とし穴

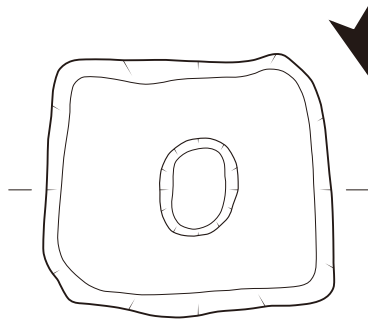
SK08（第9図、図版4） L5グリッドにあり、標高87.7m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出したが、後世の削平により底面付近が残存するのみであり、平面形態と底面中央の小穴から落とし穴と判断した。約3m西側には落とし穴SK09がある。

平面形は長方形を呈し、規模は長軸が0.76m、短軸が0.68mで、検出面から底面までの深さが0.22mを測る。主軸方向はN－70°－Wである。底面の小穴は平面形が円形を呈する。調査時に拡張しすぎたため、平面規模は正確ではないが、現状での最大径が0.26m、深さが0.24mを測る。埋土は1層が土坑埋土、2層が小穴埋土で、それぞれにぶい黄橙色とにぶい褐色のシルトからなる。

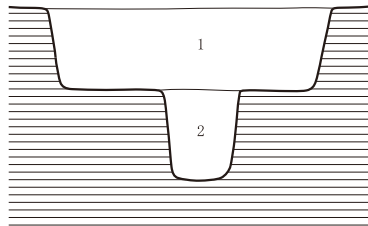
遺物は出土していないが、遺構の形状から遺構の時期は縄文時代の後期以降と考える。

SK09（第9図、図版4） K5グリッドにあり、標高87.8m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出したが、後世の削平により底面付近と南壁の一部が残存するのみであり、平面形態と底面中央の

SK08

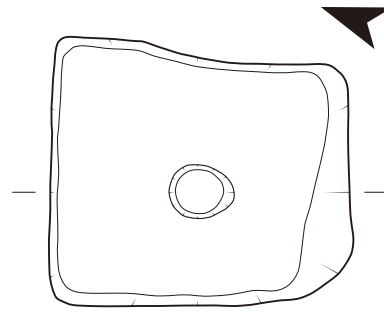


87.80m

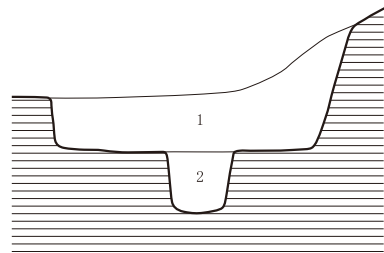


- 1 にぶい黄橙色 (10YR6/4) シルト
- 2 にぶい褐色 (7.5YR5/4) シルト

SK09

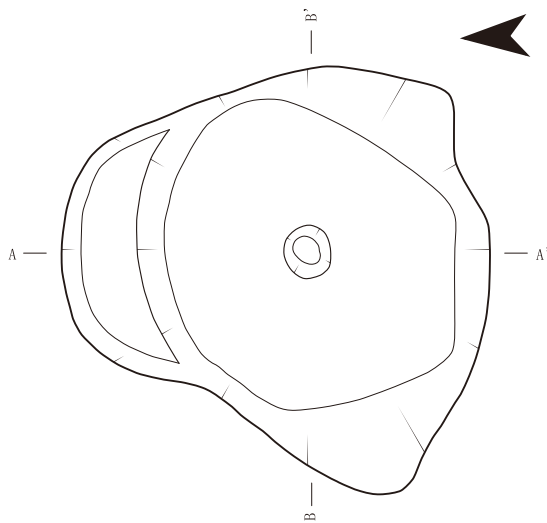


88.10m

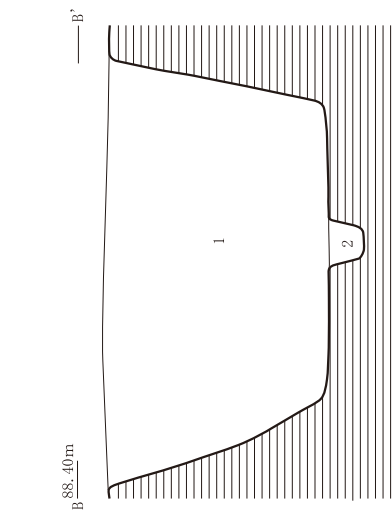
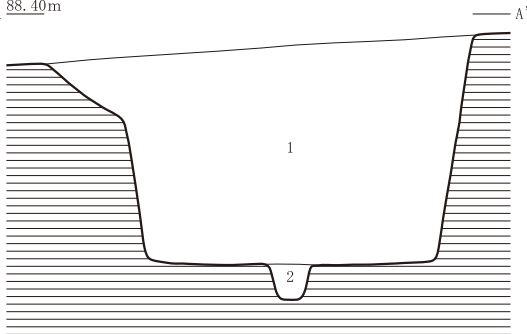


- 1 褐色 (7.5YR4/6) シルト
- 2 にぶい褐色 (7.5YR5/4) シルト

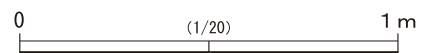
SK14



A 88.40m

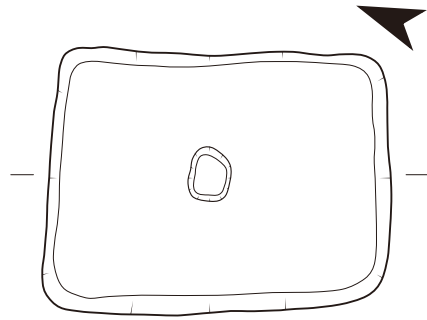


- 1 褐色 (7.5YR4/4) シルト。橙色 (7.5YR6/6) 基盤層ブロックを含む (東側中位で径 20 ~ 30cm 程度のブロックを多く含む)
- 2 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘質土

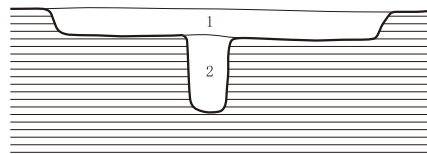


第9図 縄文時代遺構実測図①

SK16

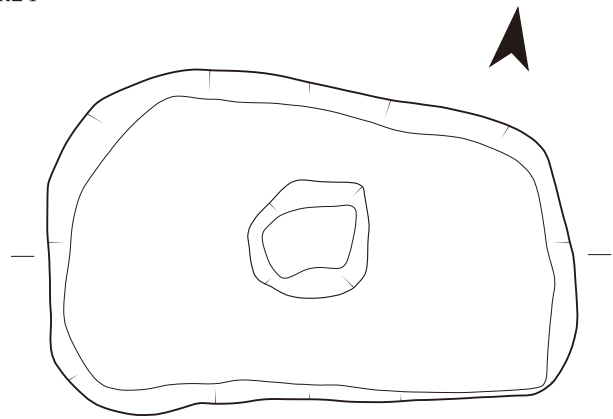


88.40m

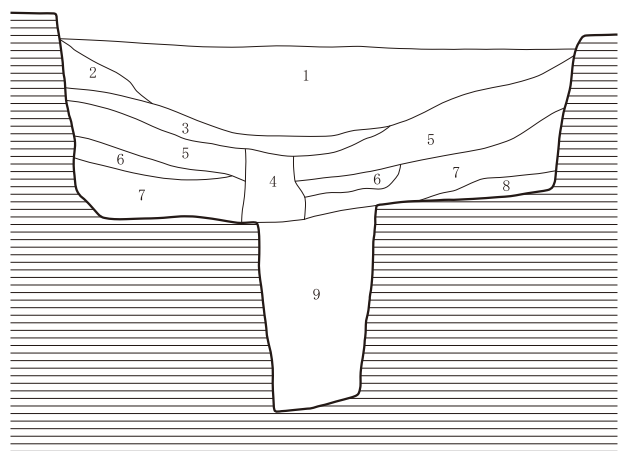


- 1 褐色 (7.5YR4/4) シルト
- 2 明褐色 (7.5YR5/6) シルト

SK24

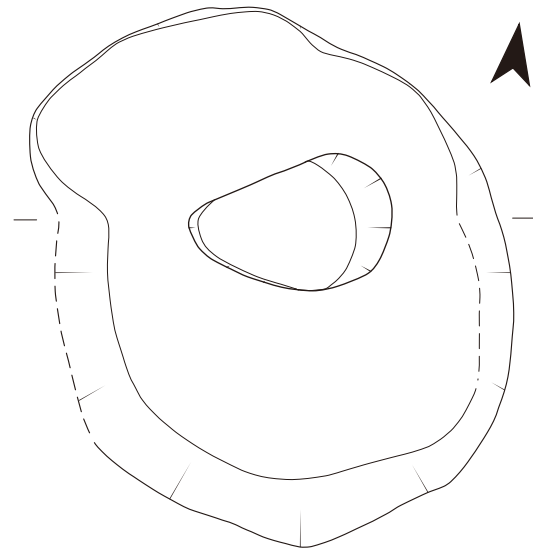


88.00m

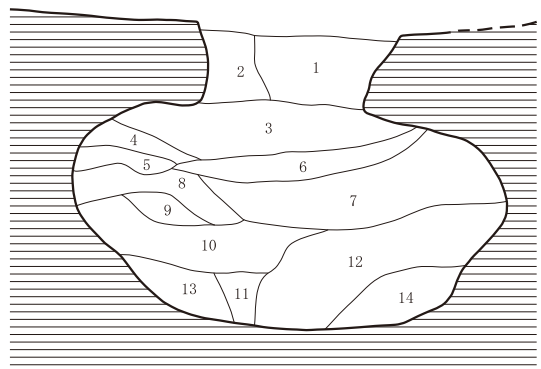


- 1 明褐色 (7.5YR5/8) シルト～粘質土。径 2 cm 以下のにぶい黄褐色 (7.5YR7/4) 基盤層ブロックと炭化物を少し含む
- 2 明褐色 (7.5YR5/6) シルト～粘質土
- 3 黄褐色 (10YR5/6) シルト～粘質土
- 4 明褐色 (7.5YR5/6) シルト～粘質土。木杭の腐植痕か
- 5 明褐色 (7.5YR5/6) シルト～粘質土 (4層よりやや明るい)
- 6 橙色 (7.5YR6/6) シルト
- 7 橙色 (7.5YR6/6) シルト～粘質土 (6層よりやや明るい)。径 5 cm 以下のにぶい橙色 (7.5YR7/4) 地山ブロックを多く含む
- 8 橙色 (7.5YR6/8) 粘質土。7層と基盤層の混濁土
- 9 橙色 (7.5YR6/6) 粘質土。底面小穴の埋土

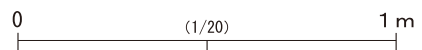
SK20



87.90m



- 1 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト。黄褐色 (10YR8/6) 基盤層ブロックが混じる。壁崩落土
- 2 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト
- 3 褐色 (7.5YR4/3) シルト。径 5 cm 以下の基盤層ブロックを多く含む
- 4 明褐色 (7.5YR5/6) シルト。基盤層との混濁土
- 5 褐色 (7.5YR4/4) シルト。径 5 mm 以下の基盤層ブロックを多く含む
- 6 褐色 (7.5YR4/4) シルト
- 7 褐色 (7.5YR4/3) シルト。径 1 cm 以下の基盤層ブロックを多く含む
- 8 褐色 (7.5YR4/4) シルト。径 1 cm 以下の基盤層ブロックを多く含む (壁際で密に含む)
- 9 褐色 (7.5YR4/4) シルト (8層より暗め)。径 1 cm 以下の基盤層ブロックを多く含む
- 10 暗褐色 (7.5YR3/3) シルト。径 1 cm 以下の基盤層ブロックを多く含む
- 11 にぶい褐色 (7.5YR5/4) シルト。基盤層との混濁土
- 12 橙色 (7.5YR6/6) 粘質土。褐色 (7.5YR4/3) シルトブロックが混じる。地山由来土
- 13 橙色 (7.5YR6/6) 粘質土。褐色 (7.5YR4/3) シルトブロックが混じる。地山由来土
- 14 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土。地山由来土



第10図 縄文時代遺構実測図②

小穴から落とし穴と判断した。約3m東側に落とし穴SK08が、約4.5m南西側に落とし穴SK14がある。

平面形は長方形を呈し、規模は長軸が0.79m、短軸が0.66mで、南壁の最も高いレベルから底面までの深さが0.32mを測る。主軸方向はN-15°-Wである。底面の小穴は平面形が円形を呈し、規模は最大径が0.18m、深さが0.17mを測る。埋土は1層が土坑埋土、2層が小穴埋土で、それぞれ褐色とにぶい褐色シルトからなる。

遺物は出土していないが、遺構の形状から遺構の時期は縄文時代の後期以降と考える。

SK14 (第9図、図版4) K5・K6グリッドにあり、標高88.3m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出した。遺構の形状や底面中央の小穴から落とし穴と判断した。約4.5m北東側には落とし穴SK09がある。

平面形は検出面で不整形、底面で不整楕円形を呈する。検出面での規模は長軸が1.14m、短軸が1.05mで、底面までの深さは0.62mを測り、底面の規模は長径が0.84m、短径が0.77mを測る。底面における主軸方向はN-61°-Eである。底面の小穴は平面形が円形を呈し、規模は直径が0.14m、深さが0.09mを測る。埋土は1層が土坑埋土、2層が小穴埋土である。1層は褐色シルトで、基盤層ブロックを含んでおり、とくに東側の中位付近で径20~30cm程度の大きめのブロックを含んでいる。2層はにぶい褐色の粘質土である。

遺物は出土していないが、遺構の形状や埋土の状況から、遺構の時期は縄文時代と考える。

SK16 (第10図) 東側調査区のJ6グリッドにあり、標高88.3m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出したが、後世の削平により底面付近が残存するのみで、平面形態と底面中央の小穴から落とし穴と判断した。

平面形は長方形を呈し、規模は長軸が0.91m、短軸が0.68mで、検出面から底面までの深さが0.07mを測る。主軸方向はN-21°-Wである。底面の小穴は平面形が円形を呈し、規模は最大径が0.14m、深さが0.20mを測る。埋土は1層が土坑埋土、2層が小穴埋土で、それぞれ褐色と明褐色シルトからなる。

遺物は出土していないが、遺構の形状から遺構の時期は縄文時代の後期以降と考える。

SK24 (第10図、図版4) 西側調査区のD7グリッドにあり、標高88.0m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸が1.39m、短軸が0.84m、遺構検出面から底面までの深さは最深部で0.54mを測る。主軸方向はN-82°-Eである。底面では、平面形がほぼ円形を呈する小穴を検出しており、落とし穴と考える。小穴の規模は直径が0.32m、深さが0.50mを測る。埋土は9層からなり、粘性の強い明褐色シルトを主体とする。1~3層と5~8層はレンズ状に堆積することから自然堆積と考える。9層は小穴埋土で橙色粘質土からなり、4層が木杭の腐植痕跡と推定する。

遺物はわずかに炭化物を含むほかに出土していないが、遺構の形状や埋土の状況から、遺構の時期は縄文時代と考える。

(2) 袋状土坑

SK20 (第10図、図版5) H5グリッドにあり、標高87.9m付近の緩斜面上に位置する。基盤層上面で

検出した。開口部より最大径付近の方が広く、断面形態は袋状またはフラスコ状を呈する。

平面形は開口部では不整楕円形を呈し、規模は長径が0.54m、短径が0.35mを測る。主軸方向はN-80°-Eである。最大径および底面付近の平面形は不整円形を呈しており、規模は最大径の位置で長径が1.40m、短径が1.18mで、開口部から底面までの深さは0.80mを測る。埋土は14層からなり、1・2層が灰褐色シルトで、3～11層は褐色シルトを主体とする。12～14層は基盤層由来の橙色または明褐色粘質土であり、壁崩落土と考える。

遺構の時期および性格は、遺構の形状や埋土の状況から、縄文時代の貯蔵穴と考える。しかし、12層より採取した土壌の花粉分析および微細生物の洗い出しと分類・同定を実施した結果、花粉化石や種実遺体は全く検出されなかった。

3 弥生・古墳時代～古代の遺構

(1) 掘立柱建物

SB01 (第11・26図、第1表、図版5・13) N3・N4グリッドにあり、標高86.8～87.0mのほぼ平坦面に位置する。基盤層上面で検出した。SP080～SP089の10基の柱穴で構成される桁行3間×梁行2間の掘立柱建物である。溶食陥没の影響により、建物南側の柱穴SP087とSP088は陥没部分に落ち込んだ状態で検出した。南東隅柱穴のSP088から約1m南東側には土坑SK23がある。

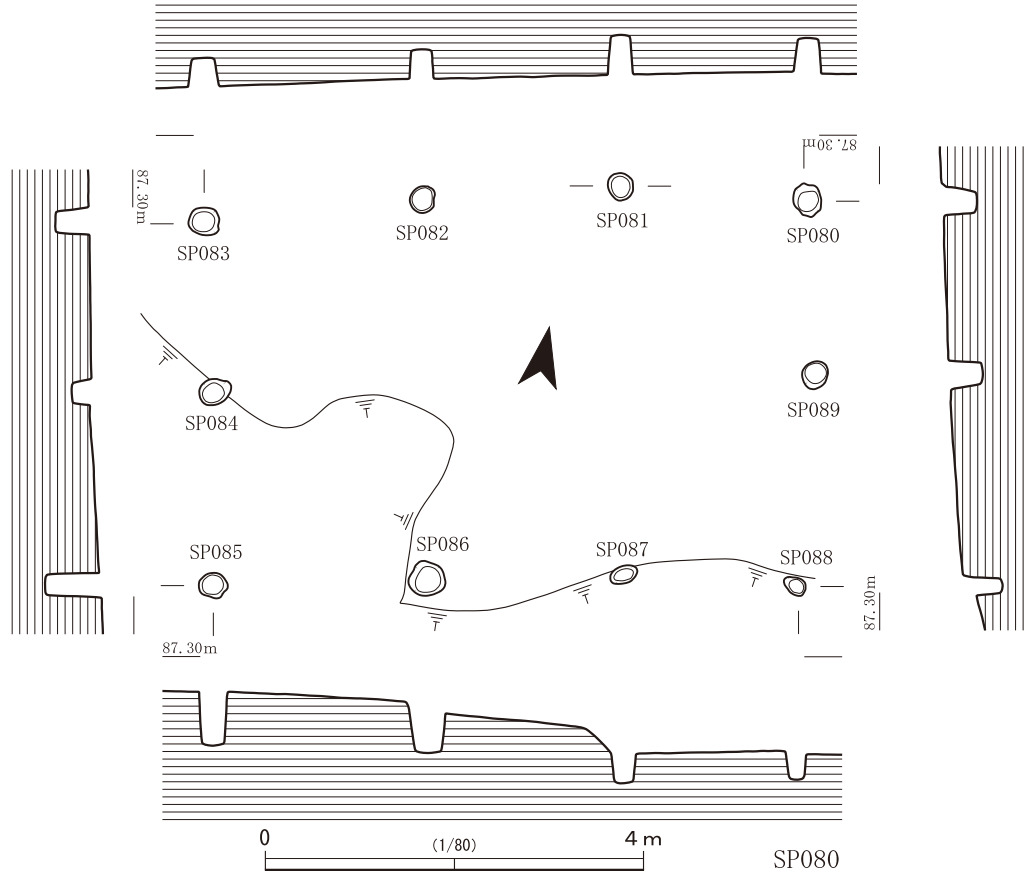
規模は、桁行が6.28m、梁行が3.92mで、床面積は24.6㎡を測る。主軸方向はN-79°-Eである。柱穴の直径は0.26～0.38m、深さが0.30～0.59mで、柱間寸法は北東隅のSP080から反時計回りの順に、1.96m、2.10m、2.26m、1.90m、2.00m、2.28m、2.10m、1.90m、2.20m、1.72mであり、平均は桁行で2.10m、梁行で1.96mとなる。柱穴の埋土は、暗褐色または黒褐色シルトを主体とし、柱痕は確認できなかった。

遺物は、SP089より須恵器の杯身片(2)、SP080より土師器の皿(3)が出土した。出土遺物や周辺遺構との関係から、遺構の時期は8世紀末～9世紀前半と考える。

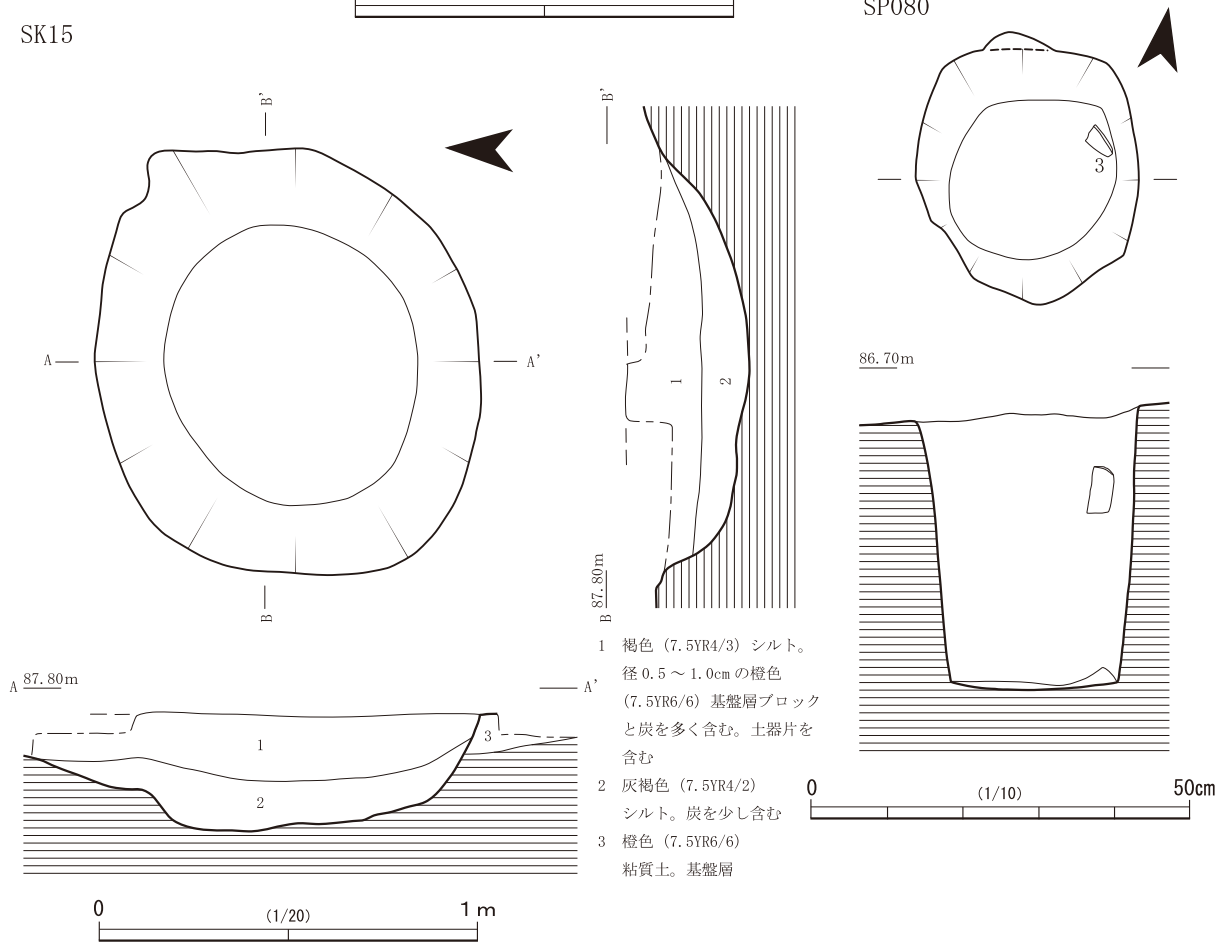
第1表 掘立柱建物SB01の構成柱穴一覧

遺構番号	平面形	規模〔cm〕				埋土	出土遺物	備考
		直径	長径	短径	深さ			
SP080	円形	36	—	—	38	黒褐色(7.5YR3/2)シルト	土師器皿(3)	
SP081	円形	28	—	—	41	黒褐色(7.5YR3/2)シルト		
SP082	円形	28	—	—	31	暗褐色(7.5YR3/3)シルト		
SP083	円形	32	—	—	35	暗褐色(7.5YR3/3)シルト		
SP084	円形	34	—	—	30	暗褐色(7.5YR3/3)シルト		
SP085	円形	30	—	—	59	暗褐色(7.5YR3/3)シルト		
SP086	円形	38	—	—	54	暗褐色(7.5YR3/3)シルト		
SP087	楕円形	—	30	18	33	暗褐色(7.5YR3/3)シルト		溶食陥没の影響あり
SP088	楕円形	—	26	18	30	暗褐色(7.5YR3/3)シルト		溶食陥没の影響あり
SP089	円形	30	—	—	41	黒褐色(7.5YR3/2)シルト	須恵器杯(2)	

SB01



SK15



第11図 古代遺構実測図

(2) 木炭焼成坑

SK26 (第12図、図版5・6) N4グリッドにあり、標高86.9～87.2mの緩斜面に位置する。基盤層上面で検出したが、その上層に当たる基本層序IV B層には炭が多く含まれており、IV B層中に遺構面があった可能性がある。溶食陥没の影響により、遺構の北西隅から西側にかけての壁面は崩落しており、床面の北半分では落ち込みがみられる。

平面形は方形を呈し、規模は長さが東西方向で2.10m、南北方向で1.93mを測り、検出面から底面までの深さは最深部で0.16mを測る。主軸方向はN-8°-Wである。埋土は4層からなり、1～3層は褐色系シルト、4層は黒色粘質土である。各層とも炭と焼土を多く含んでおり、とくに3・4層では炭が密に混じる。1・2層は炭を多く含むが疎らであり、覆土に相当する可能性がある。

床面の数ヶ所では木炭が塊状で出土したほか、南壁西側および床面に点々と被熱痕を確認した。床面の南西隅と東壁付近では不整円形の小穴を検出しており、それぞれ最大径が14cmと12cm、深さが20cmと10cmを測る。これらの小穴の性格は不明である。

遺物は埋土中から須恵器と土師器が出土しているが、小片のため図化しなかった。出土した木炭の放射性炭素年代測定(AMS法)の結果、暦年較正年代(2 σ)は試料8が1033～1160calAD(95.4%)、試料10が1037～1189calAD(95.4%)の範囲を示し、試料9が988～1150calADの間に3つの範囲を示した。出土遺物は8世紀末～9世紀初頭の年代を示すが、埋土上面付近で出土しており、包含層中の遺物が混在した可能性もあるため、分析結果から遺構の時期は11世紀前半～12世紀後半と考える。

また、木炭の樹種同定を実施した結果、いずれも広葉樹で、試料1はカキノキ属、試料3はコナラ属コナラ亜属コナラ節であり、試料2はコナラ節やクリの可能性のある広葉樹と判明した。いずれも重硬で強度が高く、火力よりも持続性を目的とする木炭の焼成に適した木材であることがわかった。

遺構の性格は、樹種同定の結果に加えて、床面および埋土から多くの木炭と焼土が出土すること、壁面と床面の一部に被熱痕を残すのみで、とりわけ床面で疎らであり被熱層や炭素吸着が薄いと判断できることから木炭焼成坑と考える。

(3) 土坑

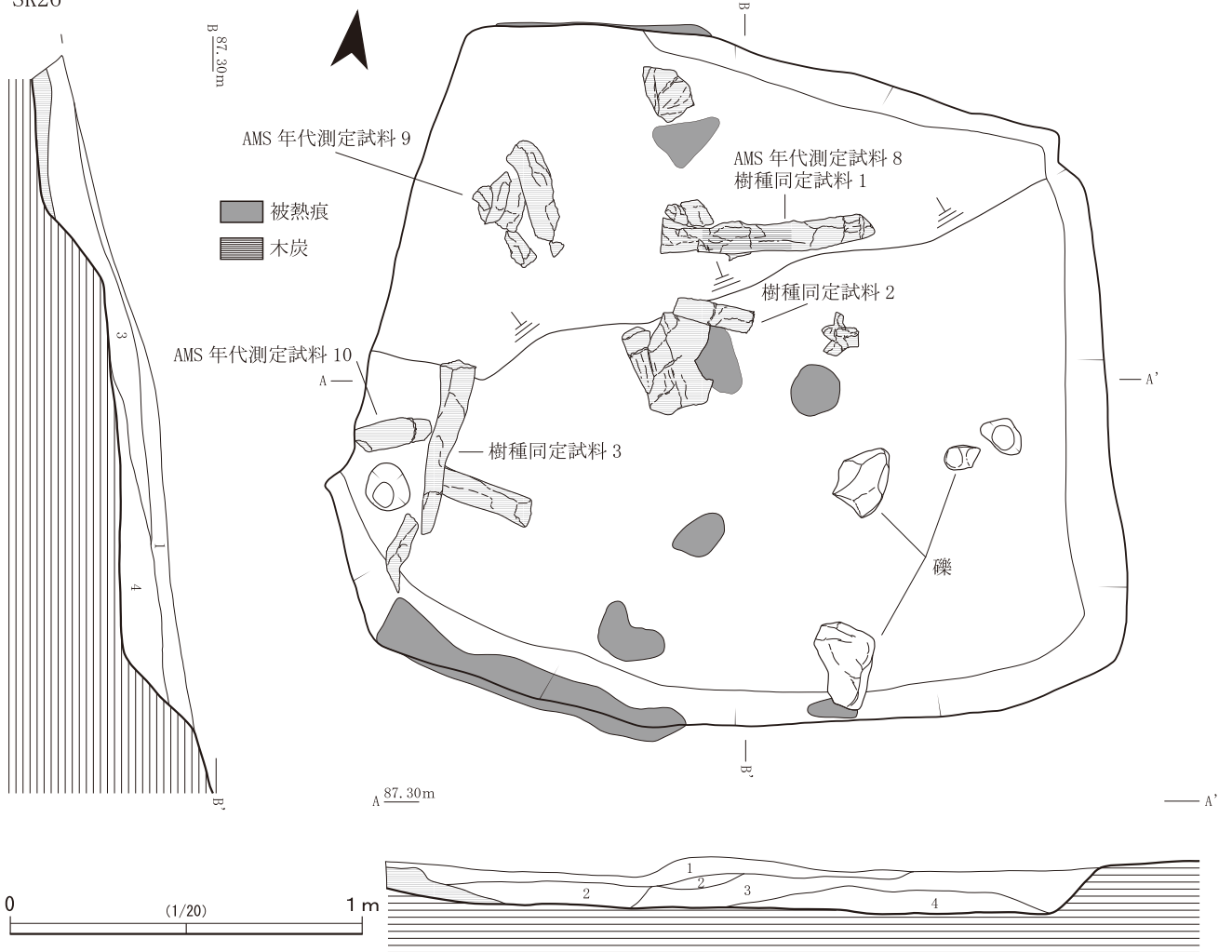
SK15 (第11図) L4グリッドにあり、標高87.7m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、規模は平面の長径が1.12m、短径が1.02m、底面の長径が0.74m、短径が0.67mを測る。断面形は逆カマボコ形を呈し、残存する深さは0.32mを測る。埋土は2層で、褐色～灰褐色シルトを主体とする。基盤層ブロックと炭化物を含んでおり、とくに1層が多い。

遺物は、1層から須恵器台付壺の脚台片(11)のほか、土師器小片が出土した。出土遺物や周辺遺構との関係から、遺構の時期は8世紀代と考える。遺構の性格は不明である。

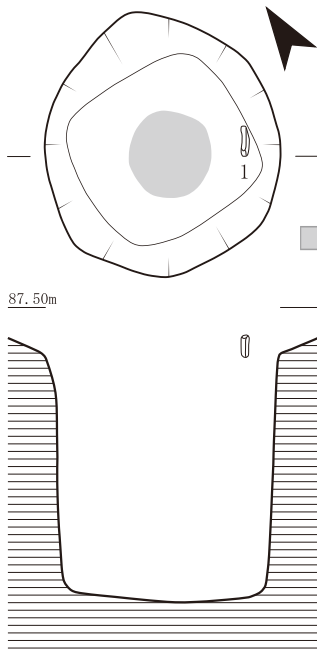
(4) 柱穴

SP231 (第12・25図、図版13) K4グリッドにあり、標高87.5m付近に位置する。平面形はやや楕円形を呈し、長径が35cm、短径が31cm、深さが33cmを測る。埋土は褐色シルトの単層で、基盤層ブロックを多量に、炭を少量含む。断面観察では柱痕跡を確認できなかった。

SK26

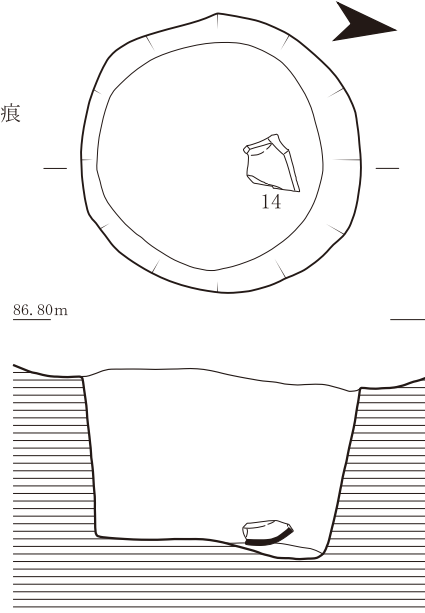


SP231

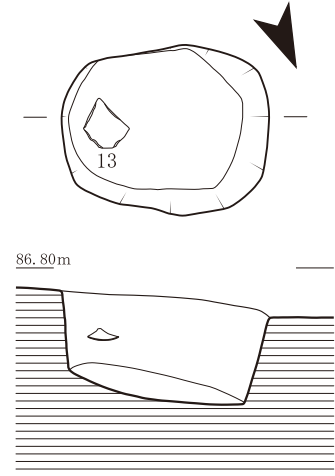


- 1 褐色 (7.5YR4/3) シルト。炭・焼土を多く含む。覆土か
- 2 にぶい褐色 (7.5YR5/4) シルト。径2cm以下の灰白色 (2.5Y8/1) および黄色 (2.5Y8/8) ブロックと、炭・焼土を多く含む。覆土か
- 3 褐色 (7.5YR4/4) シルト。径1cm以下の黄色 (2.5Y8/6) ブロックと焼土を多く含む。炭を密に含む
- 4 黒色 (7.5YR2/1) 粘質土。炭を密に含む。焼土を少量含む

SP144



SP063



第12図 弥生・古墳・古代遺構実測図

0 50cm (1/10)

遺物は段下げ埋土から土師器の甕片（1）が出土した。出土遺物の年代は弥生時代末～古墳時代初頭に比定できるが、出土状況等からみて遺構の時期を示さない可能性がある。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP063（第12・26図、図版6・13） N3グリッドにあり、標高86.8m付近に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径が28cm、短径が23cm、深さが14cmを測る。埋土は褐色シルトの単層である。遺物は埋土中から漆の付着した土師器の甕片（13）が出土した。出土遺物や周辺遺構との関係から、遺構の時期は8～9世紀と考える。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP144（第12・26図、図版6・13） L3グリッドにあり、標高86.7m付近に位置する。後世の削平により底面付近のみが残存していた。平面形は円形を呈し、直径が37cm、残存する深さが23cmを測る。埋土は褐色シルトの単層である。遺物は、須恵器の壺（14）と土師器の小片が出土した。出土遺物から、遺構の時期は8世紀代と考える。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

4 中世の遺構

（1）掘立柱建物

SB02（第13・14・15・27図、第2表、図版7・13） K4・L4グリッドにあり、標高86.9～87.5mの緩斜面に位置する。基盤層上面で検出した。北東隅から反時計回りにSP138・563・569・579・580・233・217・172・122・140の10基の柱穴で構成される、桁行3間×梁行2間の掘立柱建物である。建物の北側は後世の削平により段となっており、北側桁行の柱穴は一部削平を受けている。

規模は、桁行が8.40m、梁行が4.00mで、床面積は33.6㎡を測る。主軸方向はN-78°-Eである。柱穴の直径は0.25～0.58m、深さが0.30～0.66mで、柱間寸法は北東隅のSP138から反時計回りの順に、2.78m、3.28m、2.34m、2.20m、1.80m、2.58m、2.74m、3.08m、1.90m、2.10mであり、平均は桁行で2.80m、梁行で2.00mとなる。

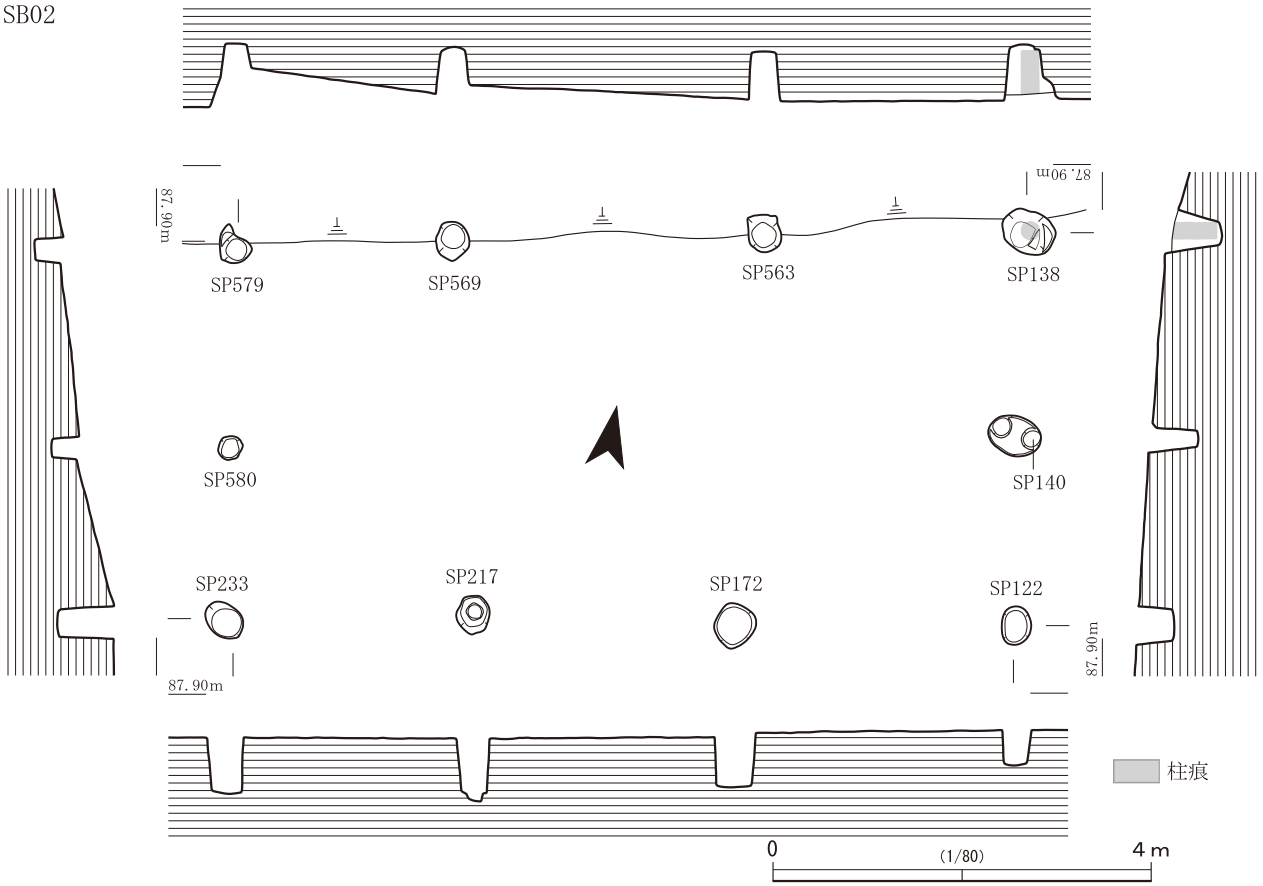
柱穴埋土は、褐色または暗褐色シルトを主体とし、ほとんどの柱穴で炭を含む。SP138で柱痕を確認したほか、SP138・563・569の各柱穴内では、それぞれ複数の礫が出土した。根石の可能性が高いが、底面よりかなり浮いた状態で乱雑に出土することから、柱の抜き取り時に動くなどして建物が機能した当時の状況を留めないか、周辺で用いられた礫が埋められた可能性もある。

遺物は、SP138から土師器の杯（17）と瓦質（19）および土師質土器の鍋（20～23）、SP140から土師器の杯（16）、SP233から土師器の杯（18）が出土した。出土遺物の年代から、遺構の時期は15世紀代と考える。なお、SP138とSP140で出土した炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した結果、暦年較正年代（2 σ ）はSP138で1296～1400calAD（95.4%）の範囲、SP140では1312～1424calADの間に2つの範囲を示していた。この値は出土遺物の年代ともほとんど齟齬がないと考える。

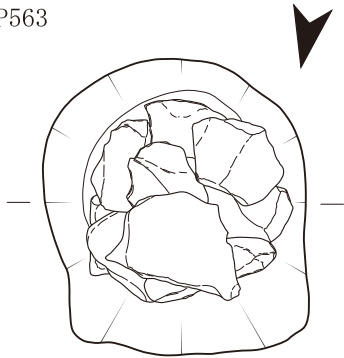
（2）柱列

柱列1（第13・27図、第3表、図版14） L4グリッドにあり、標高86.9～87.5mの緩斜面に位置する。基盤層上面で検出した。北からSP132・544・127・300の4基の柱穴で構成される柱列である。最も

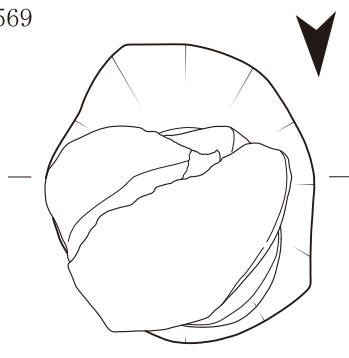
SB02



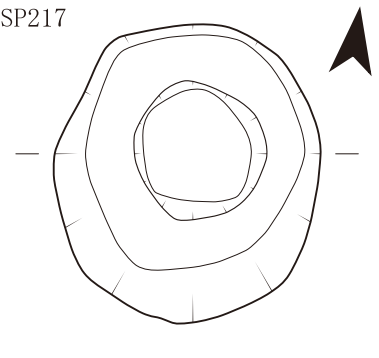
SP563



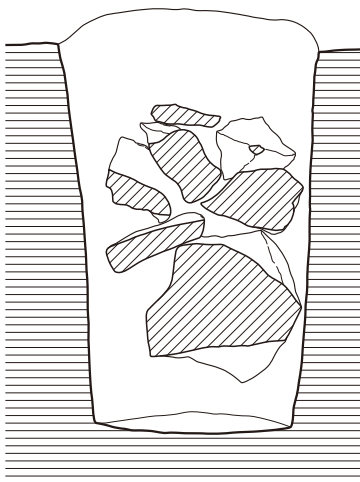
SP569



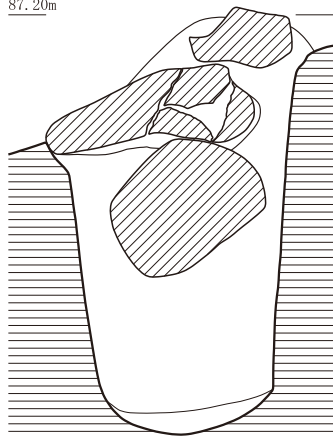
SP217



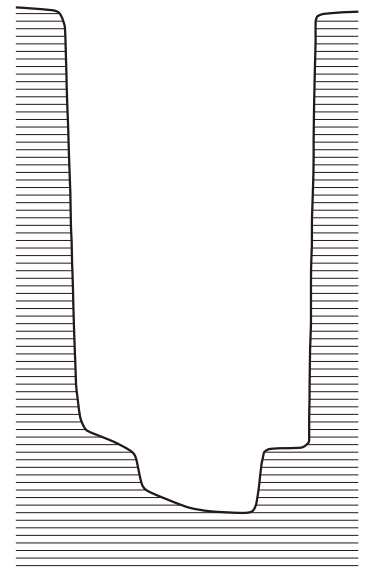
87.30m



87.20m



87.50m



0 (1/10) 50cm

第14図 中世遺構実測図①

第2表 掘立柱建物SB02の構成柱穴一覧

遺構番号	平面形	規模〔cm〕				埋土	柱痕跡	出土遺物	備考
		直径	長径	短径	深さ				
SP138	楕円形	—	58	46	57	1層: 灰褐色(7.5YR4/2) 粘質土。炭を多量に含む。礫が混じる 2層: 褐色(7.5YR4/4) 粘質土。1層がブロック状に混じる。炭を少し含む	○	土師器杯(17)・瓦質鍋(19)・土師質鍋(20~23)	根石あり
SP563	円形	35	—	—	52	褐色(7.5YR4/3) 粘質土。炭を含む			根石あり
SP569	円形	36	—	—	45	暗褐色(7.5YR4/4) シルト。炭・焼土を含む			根石あり
SP579	不整形円形	34	—	—	32	暗褐色(7.5YR3/3) シルト。炭・焼土を含む			
SP580	円形	25	—	—	30	にぶい褐色(7.5YR5/4) シルト。基盤層ブロックを多く含む。炭を含む			
SP233	楕円形	—	44	32	60	褐色(7.5YR4/3) シルト。褐色(7.5YR4/6) シルトブロックと炭を含む		土師器杯(18)	
SP217	円形	35	—	—	66	褐色(7.5YR4/3) シルト		土師器小片	
SP172	円形	44	—	—	56	暗褐色(7.5YR4/4) シルト。明褐色(7.5YR5/6) シルトブロックと炭を含む		土師器・須恵器小片	
SP122	楕円形	—	41	31	38	褐色(7.5YR4/3) シルト。炭を少し含む		土師器小片	
SP140	円形	24	—	—	50	暗褐色(7.5YR3/3) シルト		土師器杯(16)	

北側のSP132は、後世の削平により底面付近の一部のみが残存していた。SP300は根石が出土しており、詳細は後述する。

柱列の全長は5.82mで、主軸方向はN-10°-Wである。柱穴の最大径は0.25~0.34mで、SP132を除く深さは0.27~0.52mを測る。柱間寸法は北から1.84m、1.88m、2.10mである。柱穴埋土は褐色系の粘質土を主体とし、炭を多く含んでいた。

遺物は、SP127から青磁椀(24)と土師器片や鉄滓が、SP544から柱状高台杯または皿(25)と不明土製品(26)が、SP132から土師器片が出土した。青磁椀の年代は13世紀中頃に比定できるが、伝世の可能性もある。一方で、掘立柱建物SB02の東側梁行と約1mの間隔でほぼ平行しており、SB02に伴う廂あるいは塀や柵の可能性のあることから、遺構の時期はSB02に併行する15世紀代と考える。**柱列2(第13・15図、第3表)** L4グリッドにあり、標高87.4~87.7mの緩斜面に位置する。基盤層上面で検出した。北からSP160・150・151の3基の柱穴で構成される柱列である。

柱列の全長は3.20mで、主軸方向はN-2°-Eである。柱穴の最大径は0.30~0.40mで、深さが0.33~0.42mを測る。柱間寸法は北から1.56m、1.64mである。柱穴埋土は褐色系のシルトまたは粘質土を主体とする。そのうち、SP150は褐色粘質土を主体とする4層の埋土からなり、1層では北方向に傾いた状態の柱痕跡を確認し、炭を多量に含んでいた。

遺物は、各柱穴から土師器片、SP160から青磁片が出土したが、小片のため図化しなかった。出土遺物から、遺構の時期は中世と考える。掘立柱建物SB02内の中央付近で検出したが、主軸方向が一致せず、関連しないと考える。周辺とともに建物を構成する柱穴および柱列は確認できなかった。

柱列3(第13・15・16図、第3表) K4グリッドにあり、標高87.3~87.5mの緩傾斜面に位置する。基盤層上面で検出した。北からSP220・234・237・244の4基の柱穴で構成される柱列である。SP234は近接する柱列4のSP235に壊されていた。

第3表 柱列の構成柱穴一覧

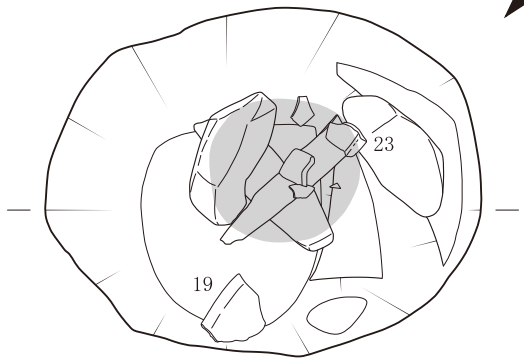
柱列	遺構番号	平面形	規模〔cm〕				埋土	柱痕跡	出土遺物	備考
			直径	長径	短径	深さ				
柱列1	SP132	円形	31	—	—	26	褐色(7.5YR4/3)粘質土。褐灰色(7.5YR5/1)ブロックと炭を含む		土師器小片	
	SP544	楕円形か	—	34	—	52	褐色(7.5YR4/4)粘質土。基盤層ブロックと炭を多く含む		柱状高台杯か皿(25)・不明土製品(26)	SK05を壊す
	SP127	円形か	30	—	—	27	灰褐色(7.5YR4/2)粘質土		青磁椀(24)・土師器小片・鉄滓?	
	SP300	円形	25	—	—	37	1層:褐色(7.5YR4/3)粘質土。炭を多量に含む 2層:褐色(7.5YR4/3)粘質土。炭を少量含む	○		根石あり
柱列2	SP160	楕円形		40	29	41	暗褐色(7.5YR3/3)シルト。炭・焼土を含む		青磁・土師器小片	
	SP150	円形	32	—	—	42	1層:黒褐色(7.5YR3/2)粘質土。炭を多量に含む 2層:褐色(10YR4/4)粘質土。炭をわずかに含む 3層:褐色(10YR4/4)粘質土。炭を少量含む 4層:明褐色(7.5YR5/6)粘質土	○	土師皿小片	
	SP151	楕円形		30	26	33	褐色(7.5YR4/3)粘質土		土師皿小片	
柱列3	SP220	円形	30	—	—	31	褐色(7.5YR4/4)シルト		土師器小片	
	SP234	円形	21	—	—	40	にぶい褐色(7.5YR5/4)シルト			
	SP237	円形	28	—	—	37	褐色(7.5YR4/3)シルト。炭を含む		土師器小片	
	SP244	円形	24	—	—	37	1層:褐色(7.5YR4/3)シルト。炭を少量含む 2層:褐色(7.5YR4/4)シルト。明褐色(7.5YR5/6)基盤層ブロックを多量に含む。炭を少量含む	○	土師器小片	
柱列4	SP221	不整形円形	27	—	—	41	1層:褐色(7.5YR4/3)シルト。 2層:褐色(7.5YR4/3)粘質土	○	不明鉄製品(27)	SP222を壊す
	SP235	円形	35	—	—	42	1層:褐色(7.5YR4/3)粘質土。炭を少量、明褐色(7.5YR5/6)基盤層ブロックを多量に含む 2層:褐色(7.5YR4/4)シルト。炭と明褐色(7.5YR5/6)基盤層ブロックを多量に含む	○		
	SP238	楕円形	—	40	22	27	褐色(7.5YR4/3)シルト。炭を含む		土師器小片	

柱列の全長は4.32mで、主軸方向はN-7°-Wである。柱穴の最大径は0.21~0.30mで、深さは0.31~0.40mを測る。柱間寸法は北から1.57m、1.26m、1.46mである。柱穴埋土は褐色系のシルトを主体とする。SP244は褐色シルトを主体とし炭を含む2層の埋土からなり、1層は柱痕跡である。

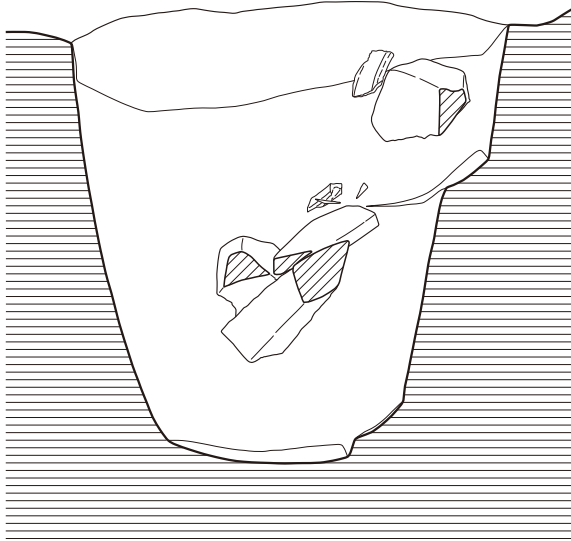
遺物は、いずれの柱穴からも土師器片が出土したが、小片のため図化しなかった。なお、SP237出土の炭化材について、放射性炭素年代測定(AMS法)を実施した結果、暦年較正年代(2 δ)は1243~1290calAD(93.0%)の範囲を示した。よって、遺構の時期は13世紀中頃~後半と考える。周辺とともに建物等を構成する柱穴および柱列は確認できなかった。

柱列4(第13・15・16・27図、第3表、図版14) K4グリッドにあり、標高87.3~87.5mの緩斜面に位置する。基盤層上面で検出した。北からSP221・235・238の3基の柱穴で構成される柱列である。SP235は近接する柱列3の構成柱穴SP234を壊していた。

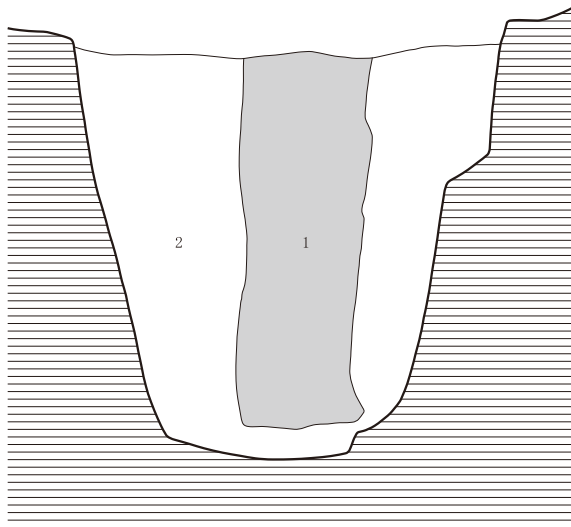
SP138



87.30m

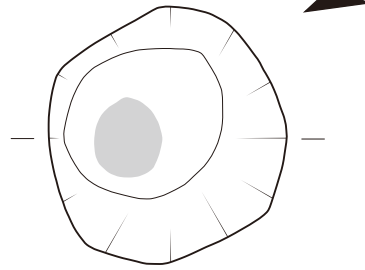


87.30m

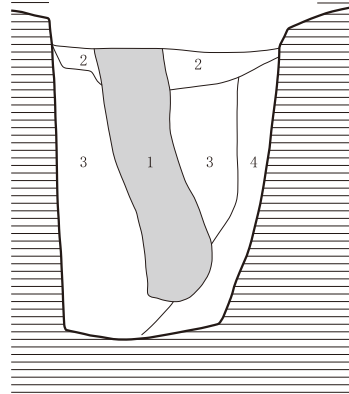


- 1 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土。炭を多量に含む。土器を含む。柱痕
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質土。1層土がブロック状に混じる。炭・土器を少量含む

SP150

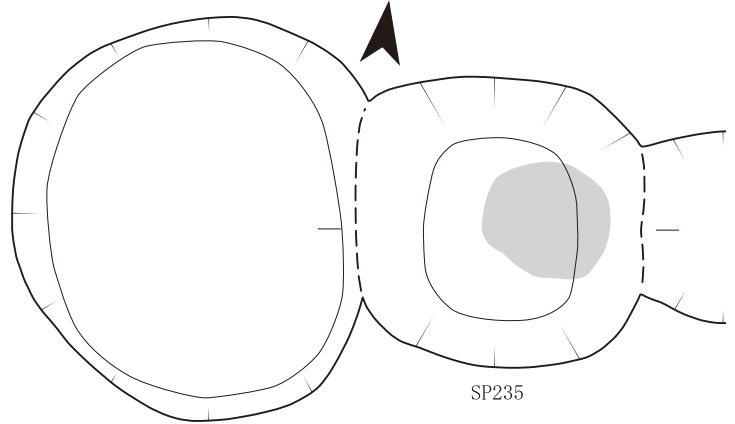


87.40m



- 1 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土。炭を多量に含む。柱痕
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質土。炭をわずかに含む
- 3 褐色 (10YR4/4) 粘質土。炭を少量含む
- 4 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土

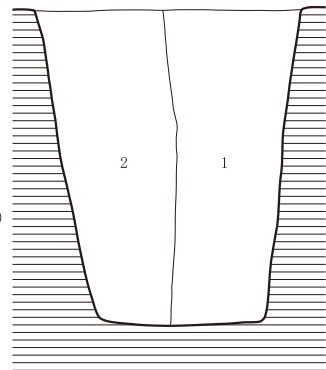
SP234 SP235



SP234

SP235

87.40m



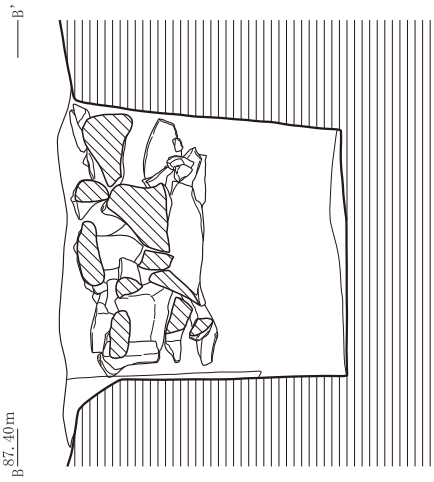
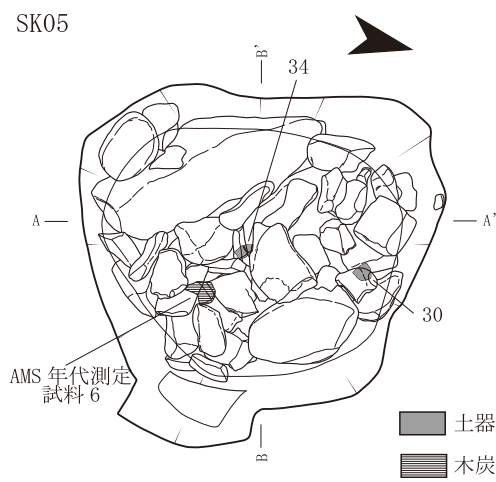
- 1 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土。径 0.5 ~ 1.0cm の明褐色 (7.5YR5/6) 基盤層ブロックを多く含む。炭を少量含む。柱痕を含む
- 2 褐色 (7.5YR4/4) シルト。径 2 ~ 3cm の明褐色 (7.5YR5/6) 基盤層ブロックと炭を多く含む。

0 (1/10) 50cm

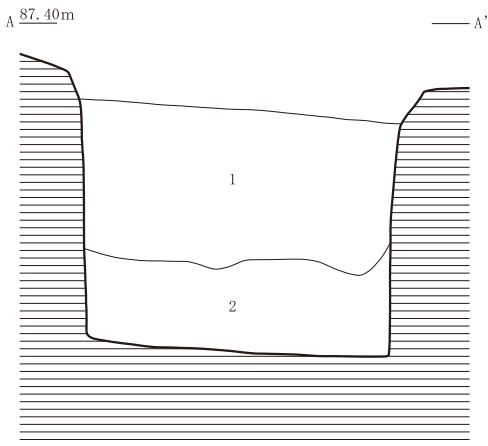
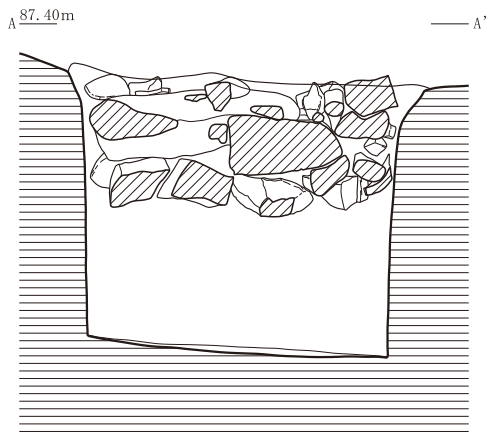
柱痕

第15図 中世遺構実測図②

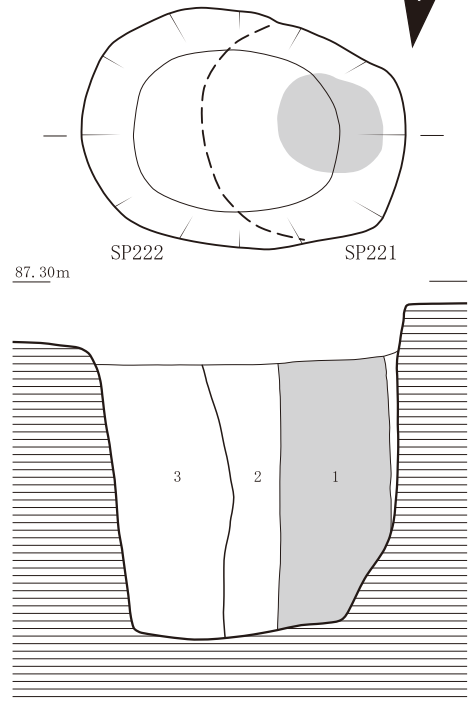
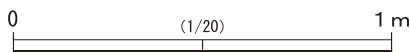
SK05



SP221 SP222



- 1 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土。明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土がブロック状に混じる。炭を多く含む
- 2 にぶい橙色 (7.5YR6/4) 粘質土



- 1 褐色 (7.5YR4/3) シルト。
SP221の柱痕
- 2 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土。
基盤層との混淆土。
SP221埋土
- 3 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土。
基盤層との混淆土。
SP222埋土

SP244 SP245

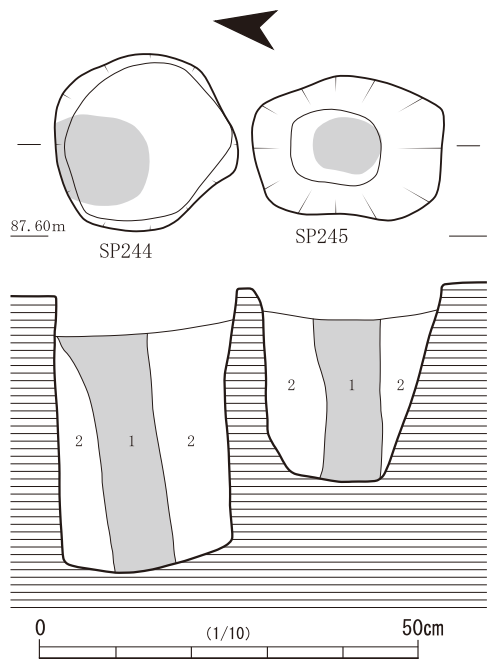
SP244

- 1 褐色 (7.5YR4/3) シルト。
炭を少量含む。柱痕
- 2 褐色 (7.5YR4/4) シルト。
径0.5~1.0cmの明褐色 (7.5YR5/6) 基盤層ブロックを多く含む。
炭を少量含む

SP245

- 1 褐色 (7.5YR4/3) シルト。
炭を含む。柱痕
- 2 褐色 (7.5YR4/3) シルト。
明褐色 (7.5YR5/6) 基盤層ブロックを多く含む

柱痕



第16図 中世遺構実測図③

柱列の全長は3.14mで、主軸方向はN-11°-Eである。柱穴の最大径は0.27~0.40mで、深さは0.27~0.42mを測る。柱間寸法は北から1.58m、1.56mである。柱穴埋土は褐色シルトまたは粘質土を主体とする。SP221とSP235はいずれも2層からなり、褐色の粘質土およびシルトを主体とし、1層は柱痕跡である。SP235は炭を含むほか基盤層ブロックを多く含む。

遺物は、SP221より鑿の可能性がある鉄製品(27)が、SP238より土師器片が出土した。SP238から出土した炭化材について放射性炭素年代測定(AMS法)を実施した結果、暦年較正年代(2σ)は1243~1286calAD(91.5%)の範囲を示した。よって、遺構の時期は13世紀中頃~後半と考える。周辺でともに建物を構成する柱穴および柱列は確認できなかった。

(3) 溝

SD04・SD05(第13・27図、図版14) L4グリッドにあり、標高87.4~87.7m付近の傾斜面に位置する。基盤層上面で検出した。SD04とSD05は重複し、一連の遺構の可能性があるので併せて報告する。

平面形は全体で逆L字状を呈しており、SD04の方がSD05を壊してわずかに深く掘り込まれる。規模は東端における南北の長さが2.50mで、東西の長さは2.41m、幅は0.28~1.14mで、SD04の方が狭い。検出面から最深部までの深さはSD04で0.15m、SD05で0.05mを測る。埋土は灰褐色(7.5YR4/2)シルトの単層であり、流水痕跡は確認できなかった。

遺物は、SD04から土師器小片が、SD05の埋土上面から土師器杯(28)のほか、須恵器片、瓦質土器片が出土した。出土遺物や周辺遺構との関係から遺構の時期は中世と考える。掘立柱建物SB02および柱穴1の南東部で建物に沿うようにあり、SB02の雨落溝として機能した可能性もある。

(4) 集石土坑

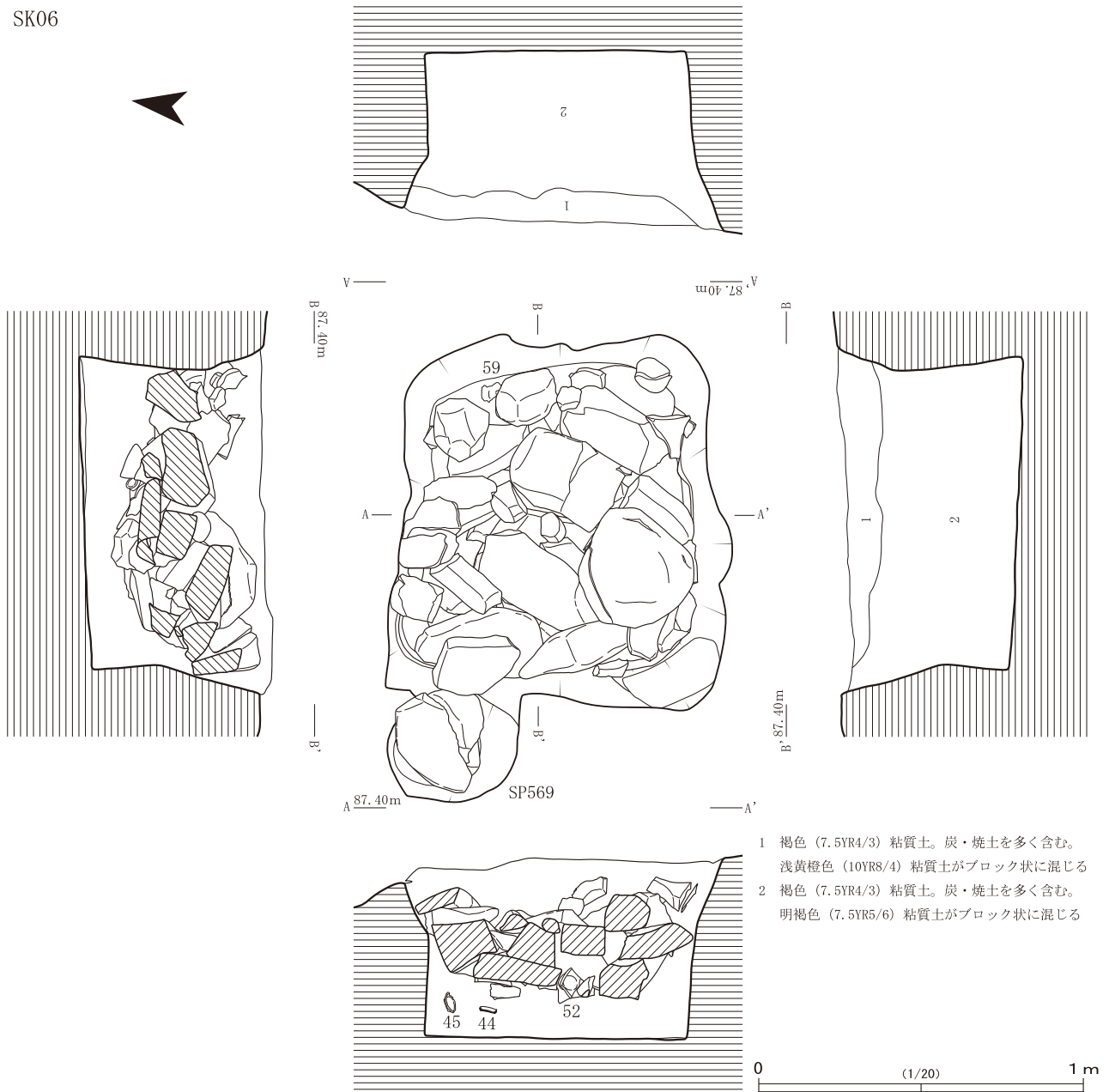
SK05(第16・28図、図版8・14) L4グリッドにあり、標高87.3m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出した。遺構のすぐ北側は後世の削平により段となっており、遺構の東壁は柱列1を構成する柱穴SP544によって壊されていた。約2.5m西側に集石土坑SK06がある。

土坑の平面形は不整形を呈しており、規模は長軸が0.94m、短軸が0.82mで、検出面からの深さは最深部で0.72mを測る。土坑内には、最大のもので長さが0.62m、幅が0.28m、厚さが0.17mの礫を含む大小の礫が、深さ0.35mの位置まで詰められていた。これらの礫群は、円礫や被熱したものが多く含まれるが、石材は多様で、無秩序に廃棄されたと推定する。

埋土は2層からなり、1層は灰褐色粘質土で、明褐色粘質土がブロック状に混じるほか、炭を多量に含んでいた。礫はすべて1層中にあることから、1層は礫が詰められると同時に堆積したと考える。2層はにぶい橙色粘質土であり、基盤層の可能性がある。そうすると、1層下面が遺構底面に当たり、この面までの深さは0.50mを測る。

遺物は、1層中の礫に混じって、あるいは礫の下位から、土師器の杯(29~32)、土師質土器の鍋(33)、瓦質土器の足鍋(35)、青磁椀(34)が出土した。出土した青磁椀の年代から13世紀中頃を土坑の機能した時期とし、集石および遺構の廃棄の時期を14世紀後半~15世紀前半と考える。

なお、埋土から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定(AMS法)を実施した結果、暦年



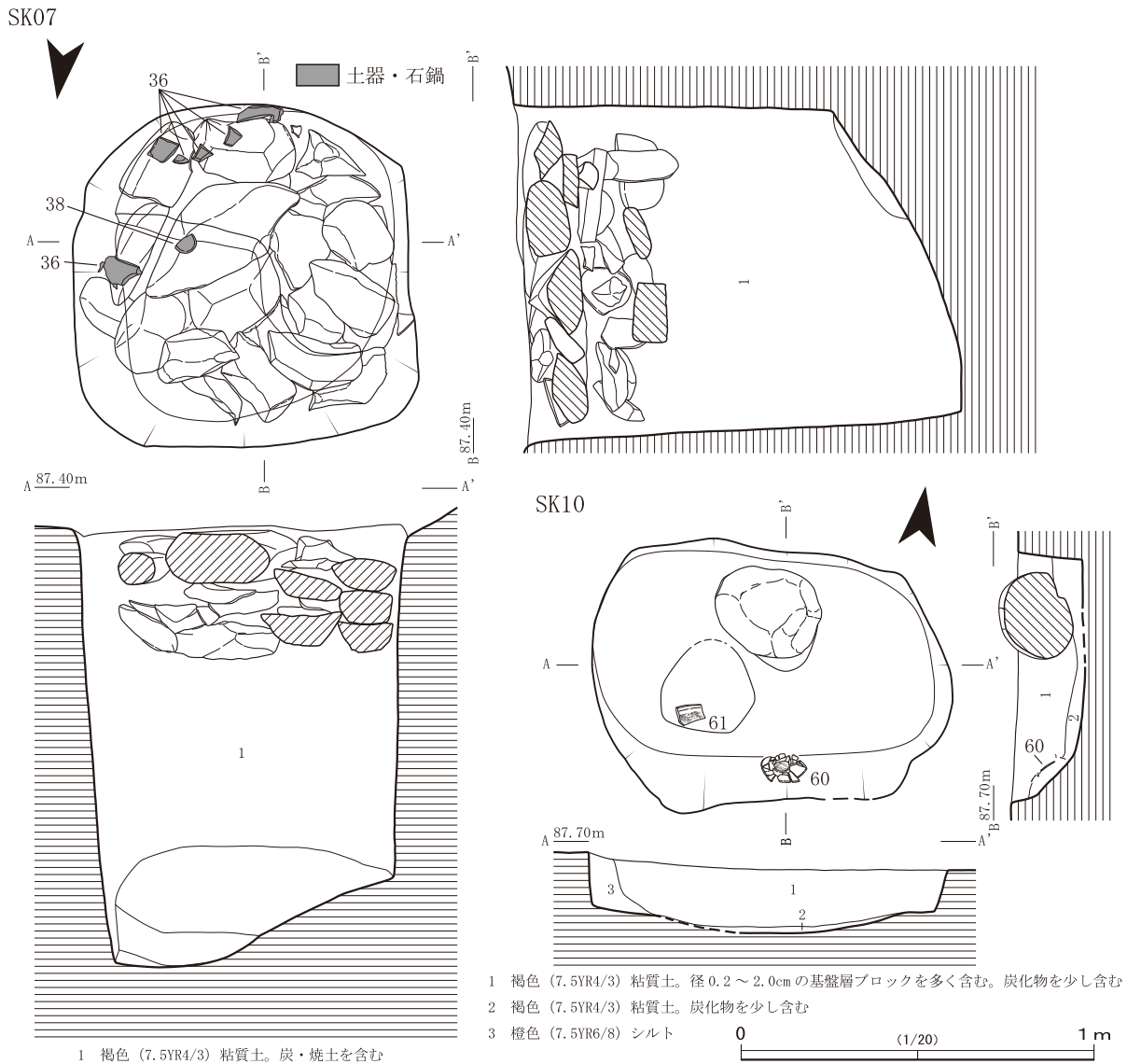
第17図 中世遺構実測図④

較正年代 (2 δ) は1119~1218calAD (65.5%) の範囲を示した。この値は土坑の機能した時期よりやや古い値を示すが穏当な年代と考える。

また、埋土1層における礫下位の土壌について、リン酸分析および全炭素・全カルシウム分析を実施した結果、いずれも少量であり、遺体を埋葬したことを示す有意な根拠とならなかった。よって、土坑の形状等から墓の可能性は否定できないが、遺構の性格を決定できなかった。

SK06 (第17・29図、図版9・10・15・16) L4グリッドにあり、標高87.3m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出した。遺構のすぐ北側は後世の削平により段となっており、遺構の北西隅は掘立柱建物SB02を構成する柱穴SP569によって壊されていた。すぐ南西側には集石土坑SK07がある。

土坑の平面形は方形を呈しており、規模は長軸が1.07m、短軸が0.98mで、検出面からの深さは最

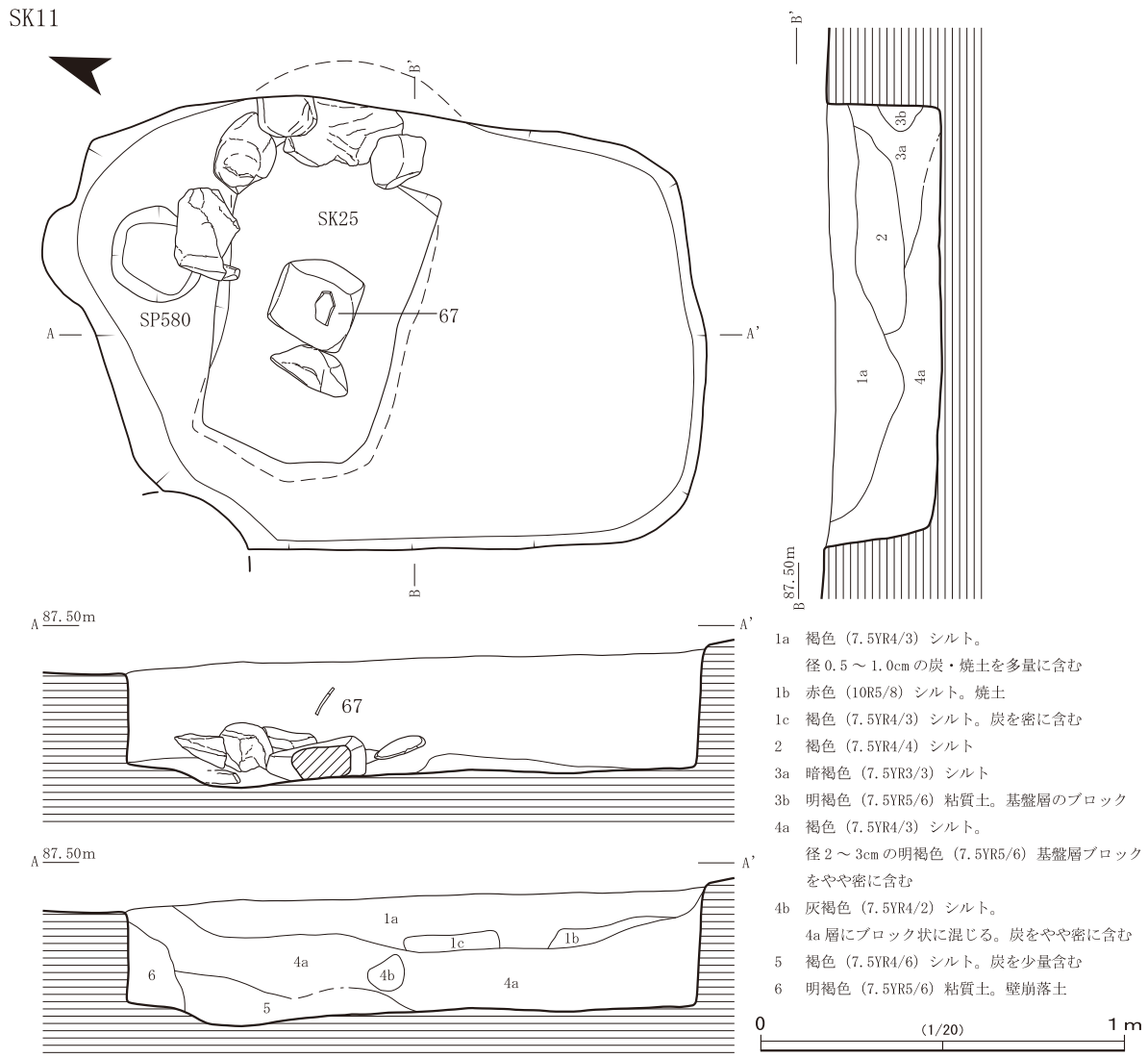


第18図 中世遺構実測図⑤

深部で0.56mを測る。主軸方向はN-10°-Wである。土坑内には、大きいもので長さが0.37m、幅が0.36m、厚さが0.11mの礫を含む大小の礫が、深さ0.46mの位置まで詰められていた。これらは円礫や角礫など多様な石材が含まれており、墓石や石塔などに使用されたと考える石製品(58)も出土した。SK05と同様、無秩序に廃棄されたと推定する。埋土は2層からなり、いずれも褐色粘質土を主体とし、浅黄橙色または明褐色の粘質土がブロック状に混じるほか、炭と焼土を多く含んでいた。1層は主に礫上面の埋土で、2層を中心に礫が含まれていた。

遺物は、礫に混じって、土師器の皿(43・47)・杯(49~51)・柱状高台杯(48)、土師質土器の鍋(54~57)、青磁碗(52)、不明土製品(59)が出土した。また、礫除去後の埋土からは土師器皿(46)や滑石製石鍋(53)が出土したほか、底面付近に置かれた状態で土師器皿(44・45)が出土した。底面付近から出土した土師器皿の年代から、土坑の機能した時期は14世紀前半~中頃と考える。そして、礫に混じる遺物の下限年代から、集石および遺構の廃棄の時期は15世紀代と考える。

なお、埋土から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定(AMS法)を実施した結果、暦年較正年代(2 δ)は1257~1300calAD(93.1%)の範囲を示した。この値は、土坑が機能した時期よ



第19図 中世遺構実測図⑥

り古い年代を示すが、概ね穏当な年代と考える。

また、埋土2層の土壌について、リン酸分析および全炭素・全カルシウム分析を実施した結果、いずれも少量であり、遺体を埋葬したことを示す有意な根拠とならなかった。よって、土坑の形状等から墓の可能性は否定できないが、遺構の性格を決定できなかった。

SK07 (第18・28図、図版8・14) K4・L4グリッドにあり、標高87.3m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出した。すぐ北東側には集石土坑SK06がある。

土坑の平面形は方形を呈しており、規模は長軸が0.97m、短軸が0.96mで、検出面からの深さは最深部で1.23mを測る。主軸方向はN-10°-Wである。土坑内には、最大のもので長さが0.52m、幅が0.25m、厚さが0.15mの礫をはじめとする大小の礫が、深さ0.45mの位置まで詰められていた。これらは、円礫や角礫など多様な石材を含んでおり、無秩序に廃棄されたと推定する。

埋土は褐色粘質土の単層で、礫群周辺では炭や焼土を含んでいるが、検出面からの深さが約0.50m以下では炭や焼土を含まず、厳密に区別できなかったものの基盤層の可能性はある。

遺物は、礫に混じって、土師器皿 (38)、瓦質土器鉢 (37)、青磁椀 (39)、滑石製石鍋 (36) のほか、

玄武岩製の剥片(40)や剥片鏃(41)が出土した。出土遺物は、石器のほか、12世紀末～13世紀初頭の青磁椀、14世紀の石鍋などを含んでおり、年代にばらつきがあるが、集石および遺構の廃棄の時期は14世紀代と考える。遺構の性格は、SK05やSK06と同様、墓の可能性はあるが、決定できなかった。

(5) 土坑

SK10 (第18・30図、図版10・16・17) K5グリッドにあり、標高87.7m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出した。約4m北西側には土坑SK13がある。

平面形は隅丸長方形で、規模は長径が1.02m、短径が0.70mで、深さは最深部で0.18mを測る。主軸方向はN-82°-Eである。埋土は3層からなり、1・2層は褐色粘質土で炭化物を少し含む。

遺物は、1層上面付近から瓦質土器の鍋片(61)が、1層下面から土師器杯(60)が出土した。鍋片は遺構の埋没時に流れ込んだとみられるのに対して、杯は潰れて原形を保たないものの、口縁部を下に向けて置かれた状態で出土しており、原位置を保つと考える。

出土遺物から、遺構の時期は14世紀後半～15世紀前半と考える。遺構の性格は不明である。

SK11 (第19・30図、図版11・16・17) K4グリッドにあり、標高87.5m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出した。約2m西側には土坑SK13があり、底面では土坑SK25と集石のほか、掘立柱建物SB02の構成柱穴SP580を検出した。

平面形は隅丸長方形だが、北端部分は不整形を呈する。規模は長軸の長さが1.70m、短軸の長さが1.20mで、深さは最深部で0.35mを測る。主軸方向はN-20°-Wである。底面北寄りでは、複数の円礫や角礫が環状に配されていた。埋土は大きく6層からなり、1～5層は褐色系のシルトを主体とし、6層は壁崩落土である。1層は炭と焼土を含む層がブロック状に混じり、3・4層は基盤層ブロックが混じることから細分した。

遺物は埋土中から、土師器の杯(62～66)や播鉢(67)が出土した。出土遺物から、遺構の時期は14世紀後半～15世紀前半と考える。SK25との先後関係や遺構の性格は不明である。

SK12 (第20図、図版11) K4グリッドにあり、標高87.3m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出した。遺構の北端は後世の削平により壊されていた。遺構内の北側では東に柱穴SP578、西に掘立柱建物SB02の構成柱穴SP579が重複していた。

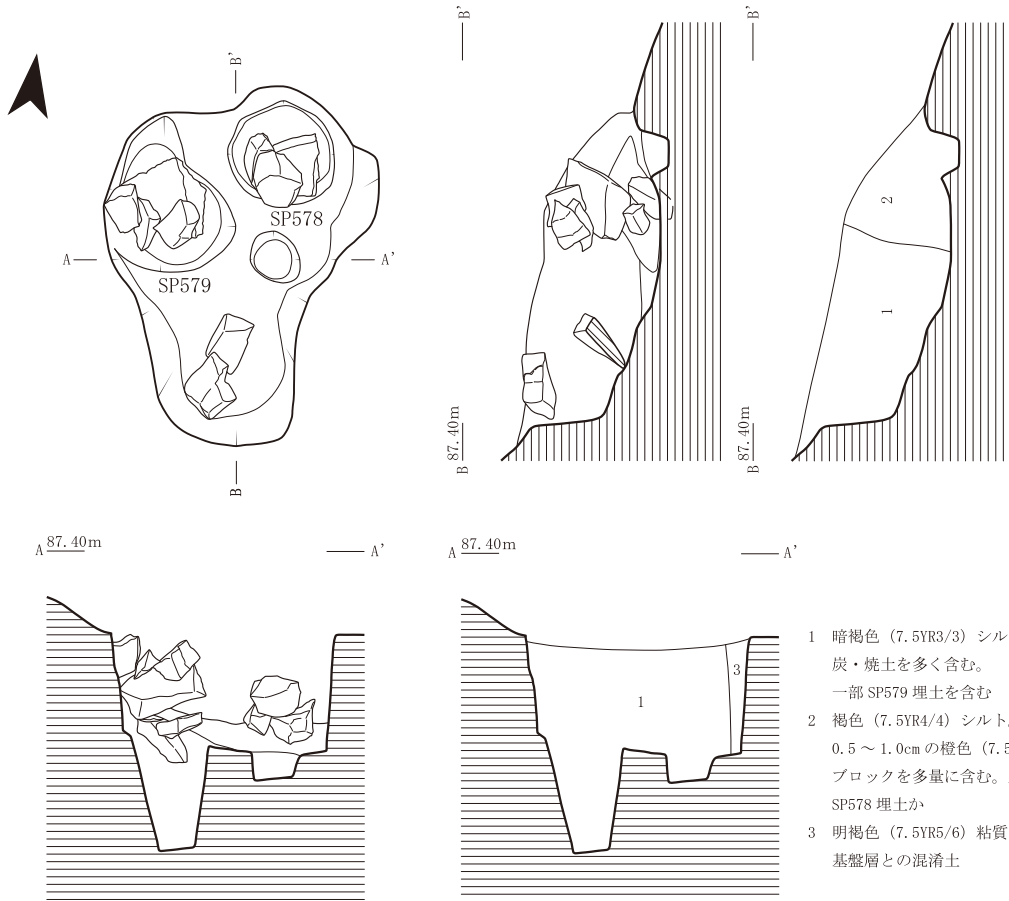
平面形は不整形で、規模は最大長が0.94m、最大幅が0.73mで、深さは最深部で0.42mを測る。埋土は3層からなり、1・2層は褐色シルトを主体とし、炭を含んでおり、3層は壁崩落土である。1層にはSP579の埋土が含まれ、2層はSP578の埋土の可能性はあるが、区別できなかった。

遺物は出土しなかったが、SB02の構成柱穴SP579など周辺遺構との関係や埋土の状況から、遺構の時期は中世と考える。遺構の性格は不明である。

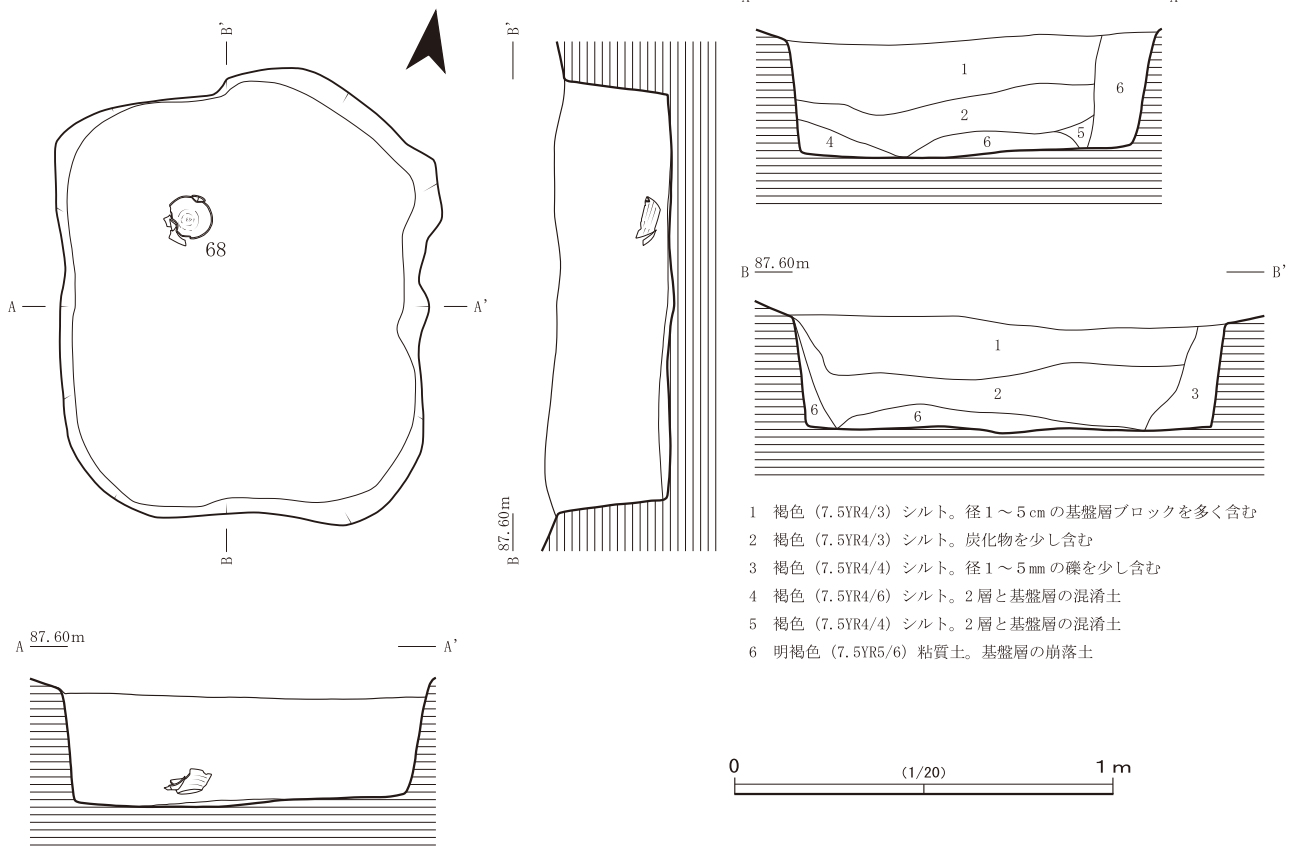
SK13 (第20・30図、図版11・17) K4グリッドにあり、標高87.5m付近の平坦面に位置する。基盤層上面で検出した。約2m東側には土坑SK11がある。

平面形は隅丸長方形で、規模は長軸の長さが1.15m、短軸の長さが0.98mで、深さは最深部で0.33mを測る。主軸方向はN-10°-Wである。埋土は6層からなり、1～5層は褐色シルトを主体とする。1・2層は水平状に堆積する自然堆積と考える。4・5層は2層と基盤層との混淆層で、6層は基盤

SK12



SK13



第20図 中世遺構実測図⑦

層の崩落土である。

遺物は、床面よりわずかに浮いた位置に、正置した状態で土師器の杯（68）が出土した。出土遺物から、遺構の時期は14世紀前半～中頃と考える。遺構の性格は不明である。

（6）柱穴

SP094（第22・30図、図版12・18） M4グリッドにあり、標高87.1m付近に位置する。平面形は不整形を呈し、平面規模は最大長で35cm、深さが45cmを測る。埋土は褐色シルトの単層で、炭や焼土を含んでいた。遺物は土師器小片のほか、不明土製品（82）が出土した。出土した土器から、遺構の時期は中世と考える。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP112（第21・30図、図版11・17） L4グリッドにあり、標高87.5m付近に位置する。平面形は円形を呈し、規模は直径が23cm、深さが15cmを測る。埋土は褐色シルトの単層である。遺物は、埋土中から、土師質土器の鍋（75）が出土した。出土遺物から、遺構の時期は14世紀末～15世紀前半と考える。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP161（第21図、図版11） L4グリッドにあり、標高87.5m付近に位置する。平面形は円形を呈し、規模は直径が46cm、深さが56cmを測る。埋土は2層からなる褐色および明褐色の粘質土で、1層は柱痕跡を残し、2層は炭を含んでいた。遺物は土師器が出土したが、小片のため図化しなかった。遺構の時期は、出土遺物や埋土の状況などから、中世と考える。掘立柱建物SB02を構成する南側桁行の柱穴SPI72のすぐ南側に位置するが関連は不明である。

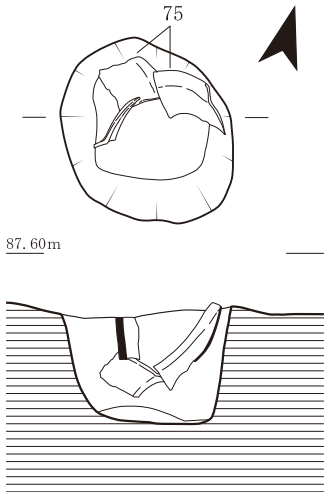
SP197（第21・30図、図版12・17） K4グリッドにあり、標高87.4m付近に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径が37cm、短径が32cmで、深さが32cmを測る。埋土は褐色シルトの単層で、炭を含んでいた。遺物は、埋土上面付近から、土師質の羽釜（73・74）が出土した。遺構の時期は、埋土や周辺遺構の状況を踏まえ、遺物の年代を採り14世紀中頃と考える。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP230（第21図） K4グリッドにあり、標高87.5m付近に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径が31cm、短径が24cm、深さが21cmを測る。埋土は2層で、褐色系のシルトまたは粘質土からなる。遺物は土師器片が出土したが、小片のため図化しなかった。遺構の時期は、出土遺物から中世と考える。掘立柱建物SB02の構成柱穴SP233のすぐ側に位置するが関連は不明である。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP239（第21図） K4グリッドにあり、標高87.5m付近に位置する。平面形は不整形円形を呈し、規模は直径が19cm、深さが20cmを測る。埋土は3層からなり、褐色シルトを主体とする。1層は柱痕跡である。遺物は土師器片が出土したが、小片のため図化しなかった。遺構の時期は、出土遺物から中世と考える。柱列3の構成柱穴SP244のすぐ東側に位置するが関連は不明である。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

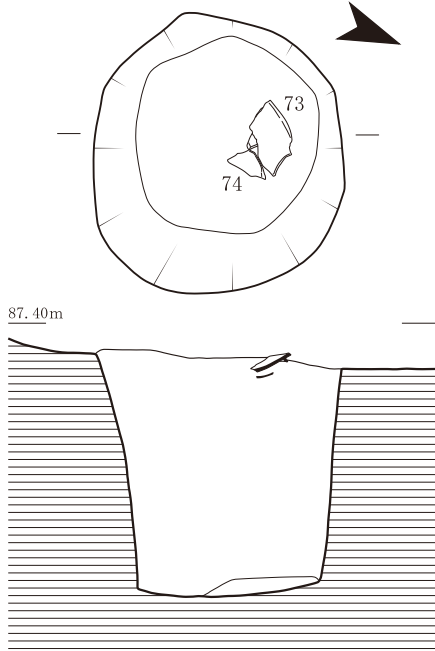
SP242（第21・30図、図版18） K4グリッドにあり、標高87.5m付近に位置する。平面形は不整形楕円形を呈し、規模は長径が34cm、短径が31cm、深さが39cmを測る。埋土は3層で、褐色系のシルトまたは粘質土からなる。1層は柱痕跡であり、1・2層には炭を含む。埋土上面付近から炭化材と土師器

SP112



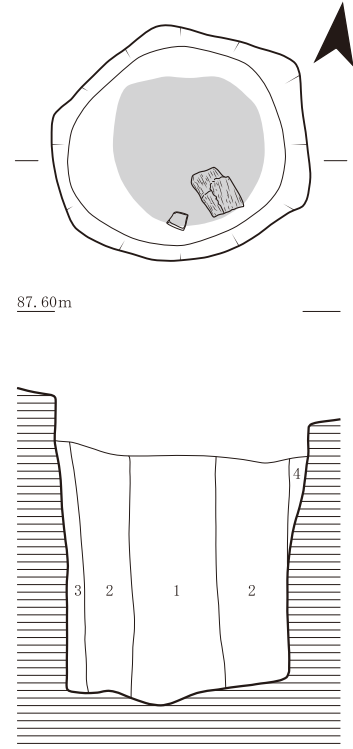
87.60m

SP197



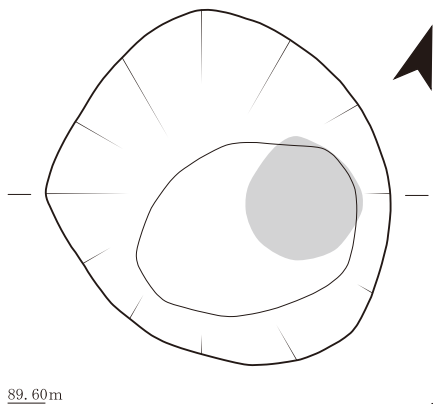
87.40m

SP242



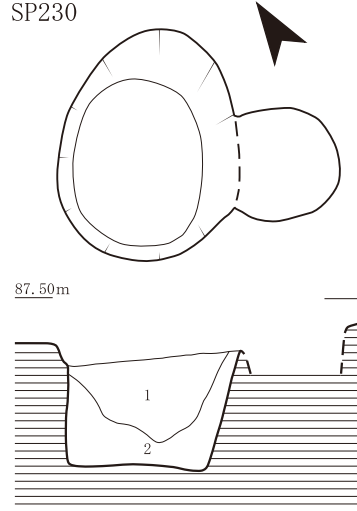
87.60m

SP161



89.60m

SP230



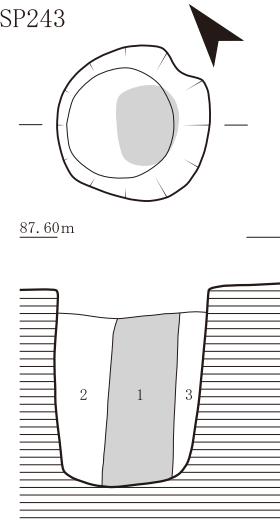
87.50m

- 1 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト。炭を多量に含む
- 2 褐色 (7.5YR4/3) シルト。炭を少量含む
- 3 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土。基盤層との混濁土
- 4 橙色 (7.5YR6/6) 粘質土。基盤層

SP230

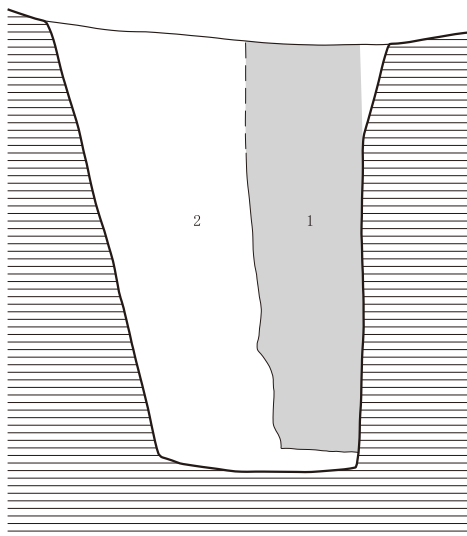
- 1 褐色 (7.5YR4/3) シルト
- 2 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘質土と
橙色 (7.5YR6/6) 粘質土との混濁土

SP243



87.60m

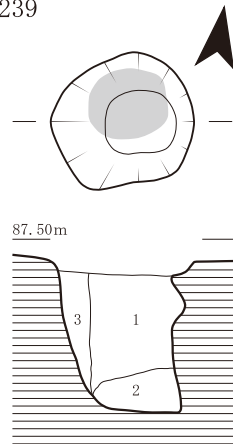
- 1 褐色 (7.5YR4/4) シルト。炭を多量に含む。柱痕
- 2 褐色 (7.5YR4/3) シルト。焼土ブロックを含む
- 3 橙色 (7.5YR6/6) 粘質土。基盤層との混濁土



- 1 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土。柱痕
- 2 明褐色 (7.5YR5/8) 粘質土。炭を少量含む

■ 柱痕

SP239

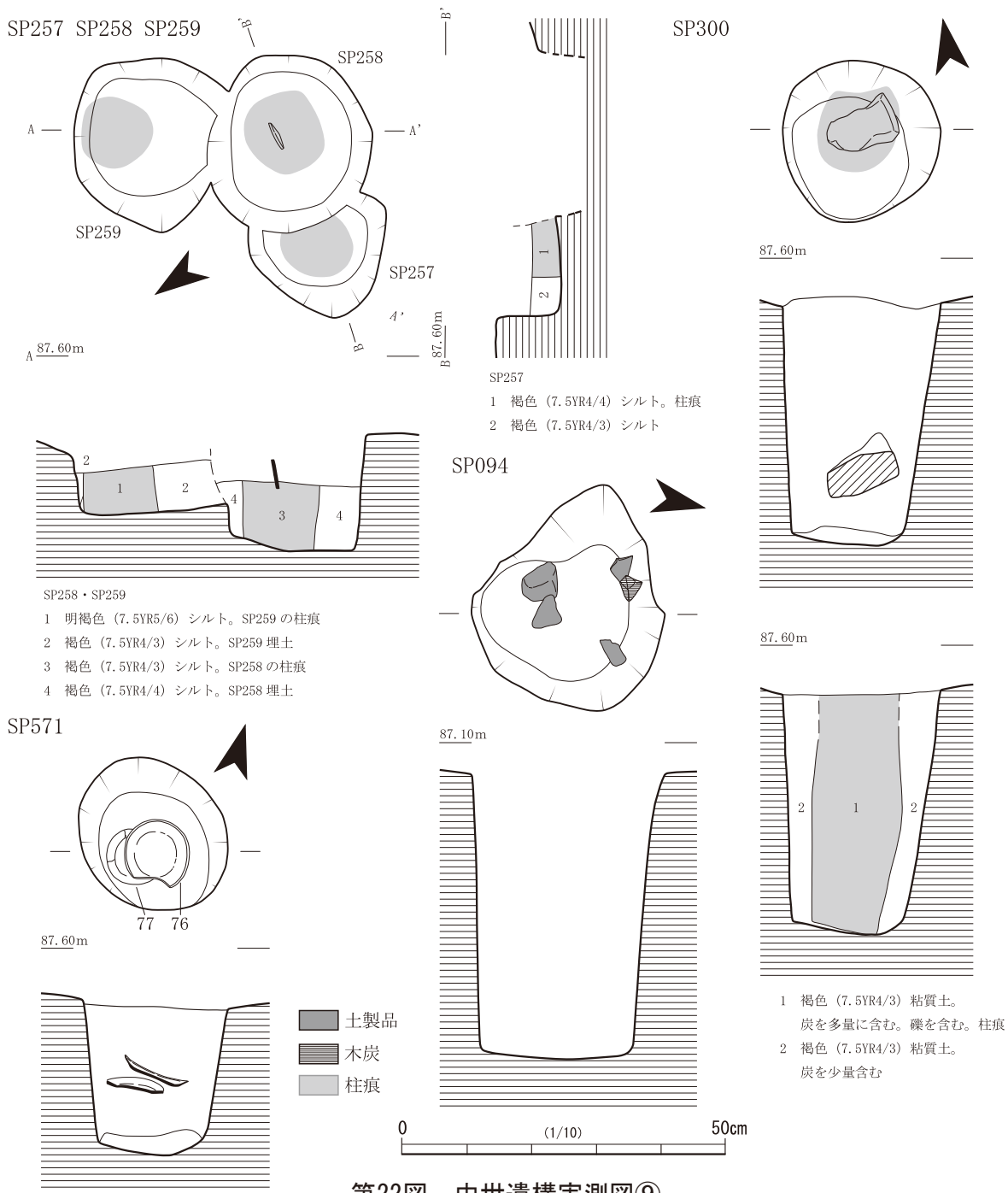


87.50m

- 1 褐色 (7.5YR4/4) シルト。
炭を少量含む。柱痕を含む
- 2 褐色 (7.5YR4/4) シルト。
褐色 (7.5YR4/6) 基盤層ブロックを含む
- 3 褐色 (7.5YR4/4) シルトと褐色
(7.5YR4/6) 粘質土との混濁土

0 (1/10) 50cm

第21図 中世遺構実測図⑧



第22図 中世遺構実測図⑨

の皿 (80) が出土した。出土遺物から、遺構の時期は14世紀前半～中頃と考える。柱列3に接するが関連は不明である。周辺とともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP243 (第21・30図、図版18) K4グリッドにあり、標高87.5m付近に位置する。平面形は円形を呈し、規模は直径が20cm、深さが26cmを測る。埋土は3層からなり、1・2層が褐色シルト、3層が橙色粘質土である。1層は柱痕跡で炭を含む。遺物は土師器の杯 (79) が出土した。遺構の時期は、出土遺物から中世と考える。柱列3を構成する柱穴SP244のすぐ北西側に位置するが関連は不明である。周辺とともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP257・SP258・SP259 (第22図) K4グリッドにあり、標高87.5m付近に位置する。SP257～SP259

が重複した状態で検出した。SP257は平面形が不整円形を呈し、直径が20cm、深さが10cmを測る。同様に、SP258は楕円形で、長径が28cm、短径が25cm、深さが15cmであり、SP259は円形で、直径が25cm、深さが10cmである。埋土は褐色系のシルトを主体とし、SP257とSP258の1層、SP159の3層は柱痕跡である。遺物はSP258の埋土上面付近で土師器片が出土した。重複関係から各柱穴の築造順序はSP257/SP259→SP258と推定する。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP300 (第22図、図版12) L4グリッドにあり、標高87.5m付近に位置する。柱列1の構成柱穴である。平面形は円形を呈し、規模は直径が25cm、深さが37cmを測る。埋土は2層からなり、いずれも褐色粘質土で炭を含んでおり、1層は柱痕跡を残していた。底面から7cm上で、長さが11cm、幅が7cm、厚さが7cmの角礫が出土した。根石として使用されたと考える。遺物は土師器が出土したが、小片のため図化しなかった。遺構の時期は、出土遺物や埋土の状況などから中世と考える。

SP571 (第22・30図、図版12・18) L4グリッドにあり、標高87.5m付近に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径が25cm、短径が22cmで、深さが23cmを測る。埋土は褐色シルトの単層で炭と焼土を含んでいた。遺物は、底面から約10cm上の位置で、完形の白磁皿(76)と土師器皿(77)が重ねられた状態で出土した。出土遺物から、遺構の時期は14世紀前半～中頃と考える。掘立柱建物SB02を構成する柱穴SP122のすぐ北西側に位置するが、関連は不明である。遺物は地鎮などの祭祀の際に埋置された可能性がある。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

5 時期不明の遺構

(1) 土坑

SK19 (第23図、第4表) H5・I5グリッドにあり、標高87.3～88.0mの斜面上に位置する。基盤層上面で検出した。約1m南西側には袋状土坑SK20がある。

平面形は不整楕円形で、規模は長径が1.48m、短径が0.77mで、深さは最深部で0.38mを測る。主軸方向はN-75°-Wである。埋土は褐色シルトの単層である。

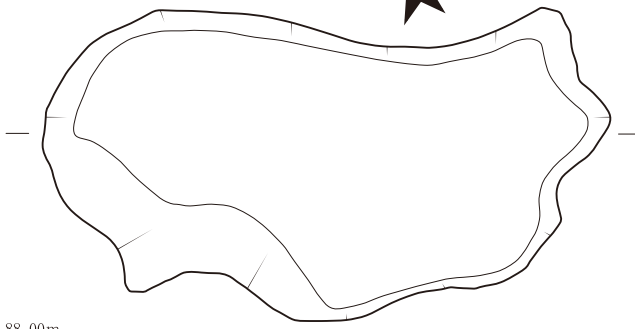
遺物が出土しておらず、時期や性格は不明であるが、埋土の状況や周辺遺構との関係から縄文時代の遺構の可能性はある。

SK25 (第23図、第4表、図版11) K4グリッドにあり、標高87.0m付近に位置する。土坑SK11の底面で検出した。土坑SK11の埋土を掘り込んだ可能性もあるが、埋土観察から両者が重複する状況は確認できなかった。土坑SK11の底面で出土した集石はSK25に伴う可能性が高い。

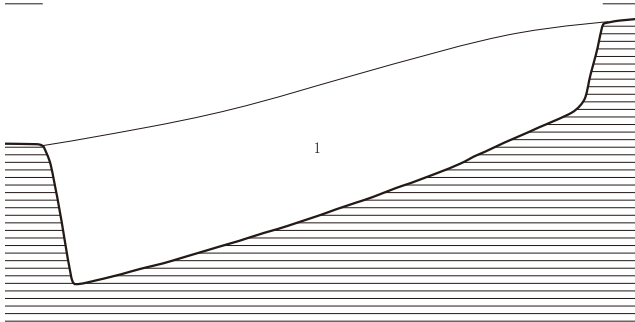
土坑の平面形は長方形で、規模は長軸の長さが0.84m、短軸の長さが0.50mで、検出面からの深さは最深部で0.31mを測る。主軸方向はN-87°-Wである。東側では土坑方向に開口する小横穴を検出した。この小横穴は底面形が半円形状で、幅が0.65m、奥行きが0.37mを測り、アーチ状に立ち上がる断面の残存高は0.13mを測る。小横穴の底面レベルは土坑の検出面と同一である。

土坑の埋土上面では、環状に廻る焼土塊を検出した。焼土塊の範囲は直径で0.25mであり、焼土塊内の埋土は、炭や焼土をほとんど含まない。焼土塊の西側に向かって焼土および炭が流れるような状態で検出された。埋土は2層からなり、1層はにぶい褐色の粘質土で炭と焼土を密に含むが、2層は明褐色粘質土で炭を少量含むのみであった。小横穴の底面付近は1層と同様の埋土であった。これら

SK19

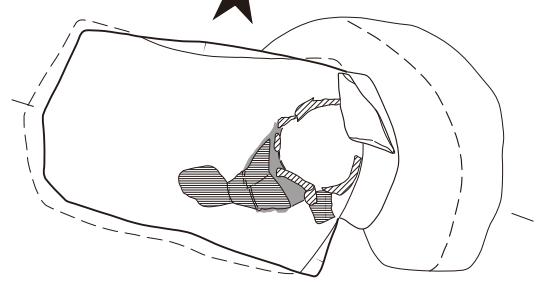


88.00m

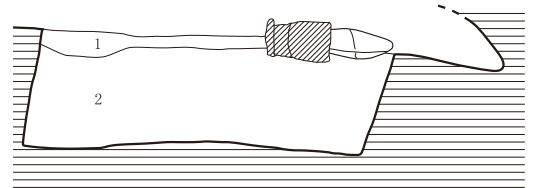


1 褐色 (7.5YR4/4) シルト

SK25



87.20m

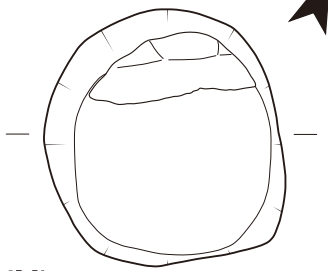


- 焼土
- 焼土塊
- 木炭

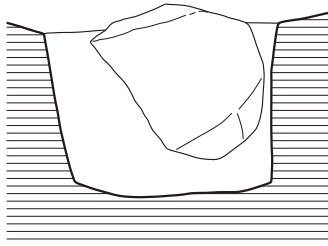
- 1 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘質土。炭・焼土を密に含む
- 2 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土。炭を少量含む

0 (1/20) 1 m

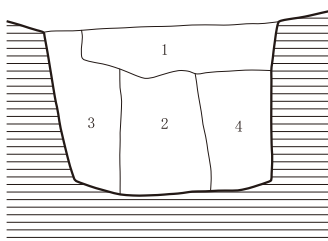
SP149



87.50m

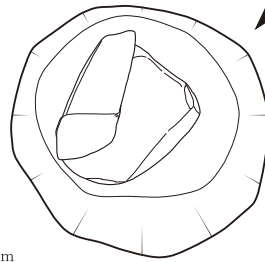


87.50m

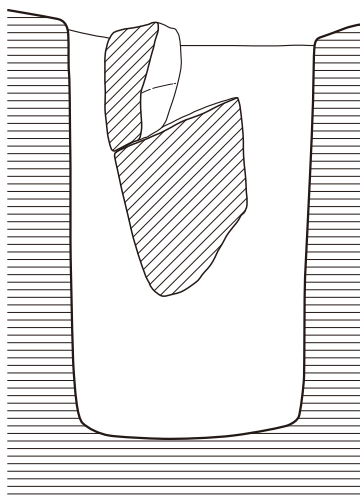


- 1 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土。炭を少量含む
- 2 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土。炭を少量含む。柱痕
- 3 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土
- 4 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土。3層ブロックが少量混じる

SP169

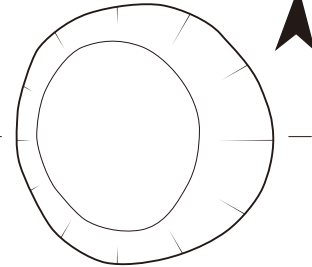


87.40m

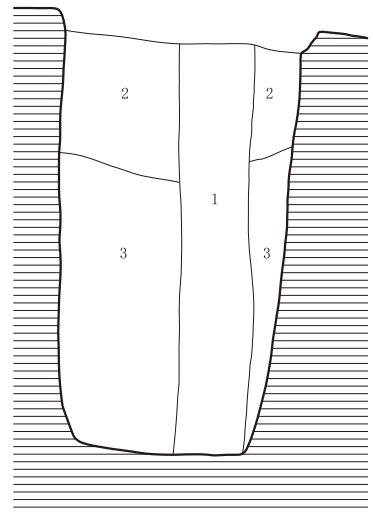


0 (1/10) 50cm

SP171



87.70m



- 1 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土。柱痕
- 2 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土。径1~5cmの橙色 (7.5YR7/6) 基盤層ブロックをやや密に含む
- 3 にぶい橙色 (7.5YR4/4) 粘質土。炭を含む

第23図 時期不明遺構実測図①

第4表 性格不明の土坑一覧

No	グリッド 番号	遺構 番号	平面形	主軸方向	平面規模[m]			埋土	出土遺物	時期	備考
					長軸 (径)	短軸 (径)	深さ				
1	O4	SK01	楕円形	N-14°-W	0.73	0.47	0.17	暗赤褐色(5YR3/2)シルト		不明	
2	N4・ N5	SK02	楕円形	N-79°-E	0.66	0.50	0.16	褐色(7.5YR4/3)シルト		不明	
3	N5	SK03	楕円形	N-2°-E	0.68	0.56	0.41	灰褐色(7.5YR4/2)シルト		不明	
4	M4	SK04	不整形	—	1.10	0.98	0.10	褐色(7.5YR4/3)シルト		不明	
5	K5	SK10	隅丸長方形	N-82°-E	1.02	0.70	0.18	第18図参照	土師器杯(60)、 瓦質土器鍋(61)	14世紀前半 ～中頃	
6	K4	SK11	隅丸長方形	N-20°-W	1.70	1.20	0.35	第19図参照	土師器杯(62～ 66)・搦鉢(67)	13～14世紀	SK25・SP580 と重複
7	K4	SK12	不整形	—	0.94	0.73	0.42	第20図参照		中世	SP578・579と 重複
8	K4	SK13	隅丸長方形	N-10°-W	1.15	0.98	0.33	第20図参照	土師器杯(68)	14世紀前半 ～中頃	
9	L4	SK15	円形	—	1.12	1.02	0.32	第11図参照	須恵器、土師 器	8世紀後半～ 9世紀初頭	
10	I5	SK17	楕円形	N-32°-W	1.48	0.92	0.25	褐色(7.5YR4/4)シルト		縄文時代か	
11	I6	SK18	楕円形	N-7°-W	0.98	0.84	0.24	褐色(7.5YR4/4)シルト		縄文時代か	
12	H5・I5	SK19	不整形楕円形	N-75°-W	1.48	0.77	0.38	第23図参照		縄文時代か	
13	I3	SK21	不整形	N-61°-E	1.34	1.00	0.25	にぶい褐色(7.5YR 5/4)シルト。基盤層 ブロックを多く含む		不明	
14	N4	SK23	楕円形	N-46°-E	1.94	1.65	0.56	褐色(7.5YR4/3)シルト。基盤層ブロッ クと礫を多く含む	須恵器杯蓋 (10)・杯身(5 ～8)・甕(4)	8世紀後半～ 9世紀初頭	
15	K4	SK25	長方形	N-87°-W	0.84	0.5	0.31	第23図参照		13～14世紀 か	集石・焼土塊・ 小横穴を伴う。 SK11と重複

※ SK22は欠番。

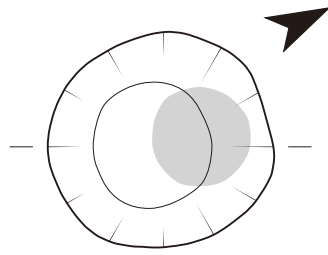
から、土坑および焼土塊とそれを囲むようにある礫、そして東側の小横穴が一連の遺構と考える。

遺物は土師器片が出土したが、SK11に伴う可能性がある。なお、埋土中より出土した炭化物について、放射性炭素年代測定(AMS法)を実施した結果、暦年較正年代(2σ)は1030～1165calAD(95.4%)の範囲を示した。炭素含有率が低く、測定値の信頼性も低いことから、時期は不明とするが、SK11に先行する時期と考える。遺構の性格は不明である。

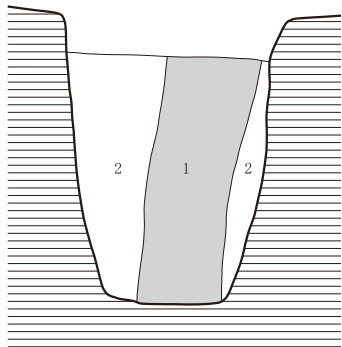
(2) 柱穴

SP149 (第23図) L4グリッドにあり、標高87.4m付近に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径が34cm、短径が31cmで、深さが22cmを測る。埋土は4層で、褐色系の粘質土を主体とし、1・2層は炭を少量含む。北東壁に立て掛けられた状態で、平たい礫が出土した。礫は長さが21cm、幅が22cm、厚さが8cmで、本来は柱穴底面に置かれた礎石であったと考える。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化せず、時期も不明である。すぐ西側に柱列2の構成柱穴SP150があるが、規模や位置から

SP185

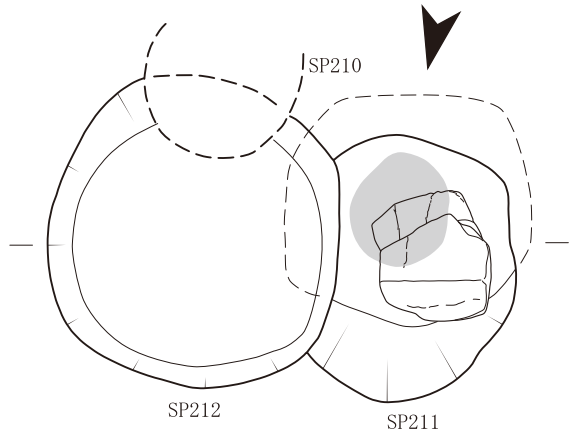


87.70m

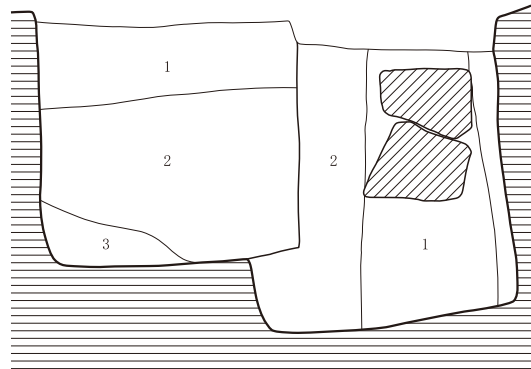


- 1 褐色 (7.5YR4/3) シルト。柱痕
- 2 褐色 (7.5YR4/4) シルト。炭を少量含む

SP211 SP212



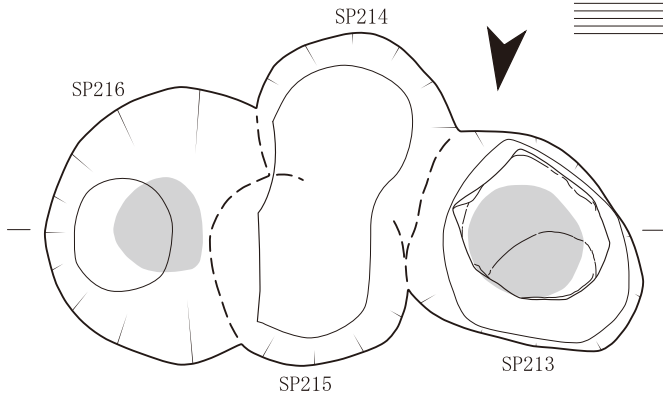
87.50m



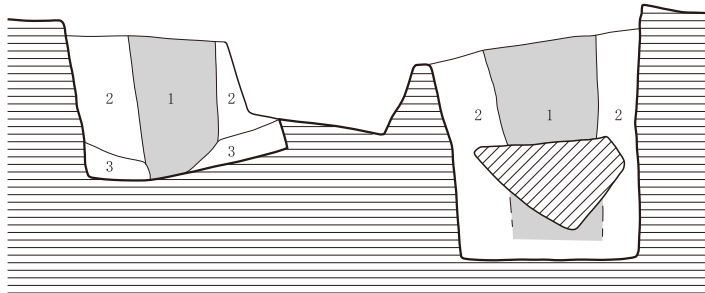
- SP211
- 1 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土。炭を多量に含む。柱痕を含む
 - 2 褐色 (7.5YR4/3) シルト。炭を少量含む

- SP212
- 1 褐色 (7.5YR4/3) シルト
 - 2 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土。径5cm程度の橙色 (7.5YR6/6) 基盤層ブロックをやや密に含む
 - 3 橙色 (7.5YR6/6) 粘質土。基盤層

SP213 SP214 SP215 SP216



87.50m



- SP213
- 1 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土。炭を含む。柱痕
 - 2 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土

- SP216
- 1 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土。柱痕
 - 2 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土。径5mm以下の粘質土ブロックを多量に含む
 - 3 橙色 (7.5YR6/6) 粘質土。基盤層

柱痕

0 (1/10) 50cm

第24図 時期不明遺構実測図②

みて関連しないと考える。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP169 (第23図、図版12) L4グリッドにあり、標高87.3m付近に位置する。平面形は円形を呈し、規模は直径が34cm、深さが54cmを測る。埋土は褐色シルトの単層である。底面より20cm上の位置で礫2個が重なって出土した。上の礫は長さが17cm、幅が7cm、厚さが8cmで、下の礫は長さが18cm、幅が16cm、厚さが22cmを測り、根石と考える。遺物は出土せず時期不明である。掘立柱建物SB02内の西寄りに位置するが、関連は不明である。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP171 (第23図) L4グリッドにあり、標高87.6m付近に位置する。平面形は円形を呈し、規模は直径が34cm、深さが57cmを測る。埋土は3層で、褐色およびぶい橙色の粘質土からなり、3層に炭を含む。1層は柱痕跡である。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化せず、時期も不明である。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP185 (第24図) L5グリッドにあり、標高87.6m付近に位置する。平面形は円形を呈し、規模は直径が30cm、深さが38cmを測る。埋土は2層で、褐色シルトおよび粘質土からなり、1層は柱痕跡を残し、2層は炭を含む。遺物は土器片が出土したが、小片のため図化せず、時期も不明である。周辺で関連する建物や、ともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

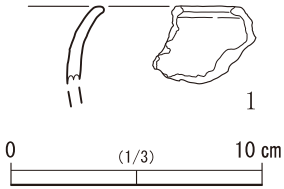
SP211・SP212 (第24図) L4グリッドにあり、標高87.5m付近に位置する。SP210～SP212が重複した状態で検出した。SP211とSP212は平面形がそれぞれ円形と楕円形を呈し、規模はSP211の長径が35cm、短径が29cm、深さが42cmで、SP212の直径が41cm、深さが33cmを測る。埋土はいずれも2層からなり、いずれも褐色のシルトまたは粘質土を主体とする。SP211の1層は柱痕跡で、炭を多量に含む。SP211の底面より17cm上で2個の角礫が重なった状態で出土した。上の礫は長さが15cm、幅が14cm、厚さが9cmで、下の礫は長さが13cm、幅が12cm、厚さが10cmを測り、根石として使用されたと考える。遺物はSP211から土器片が出土したが、小片のため図化せず、遺構の時期も不明である。重複関係から推定する各柱穴の築造順序はSP211→SP212→SP210である。掘立柱建物SB02の構成柱穴SP217に接するが関連は不明である。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

SP213・SP214・SP215・SP216 (第24図) L4グリッドにあり、標高87.5m付近に位置する。SP213～SP216が重複した状態で検出した。埋土観察から柱痕跡を確認できたSP213とSP216について述べる。SP213とSP216は平面形がそれぞれ不整楕円形と円形を呈し、規模はSP213の長径が33cm、短径が27cm、深さが34cmで、SP216の直径が37cm、深さが21cmを測る。埋土はいずれも2層からなり、それぞれ黒褐色または暗褐色粘質土と褐色粘質土を主体とし、いずれも1層は柱痕跡である。SP213の底面よりやや浮いた状態で直径が21cm、厚さが12cmの礫が出土しており、礎石として使用されたと考える。いずれの柱穴からも遺物は出土せず、時期不明である。重複関係から推定する各柱穴の築造順序はSP216→SP214→SP215→SP213である。周辺でともに建物等を構成する柱穴は確認できなかった。

IV 遺物

調査の結果、弥生～古墳・古代・中世の各時期の遺構と、遺物包含層から遺物が出土した。以下、遺物の主な特徴を述べる。なお、各遺物の法量等は遺物観察表に掲載した。

SP231



第25図 弥生～古墳
遺物実測図

1はSP231の段下げ埋土より出土した土師器の甕の口縁部である。形態・胎土から弥生時代末～古墳時代初頭と考える。

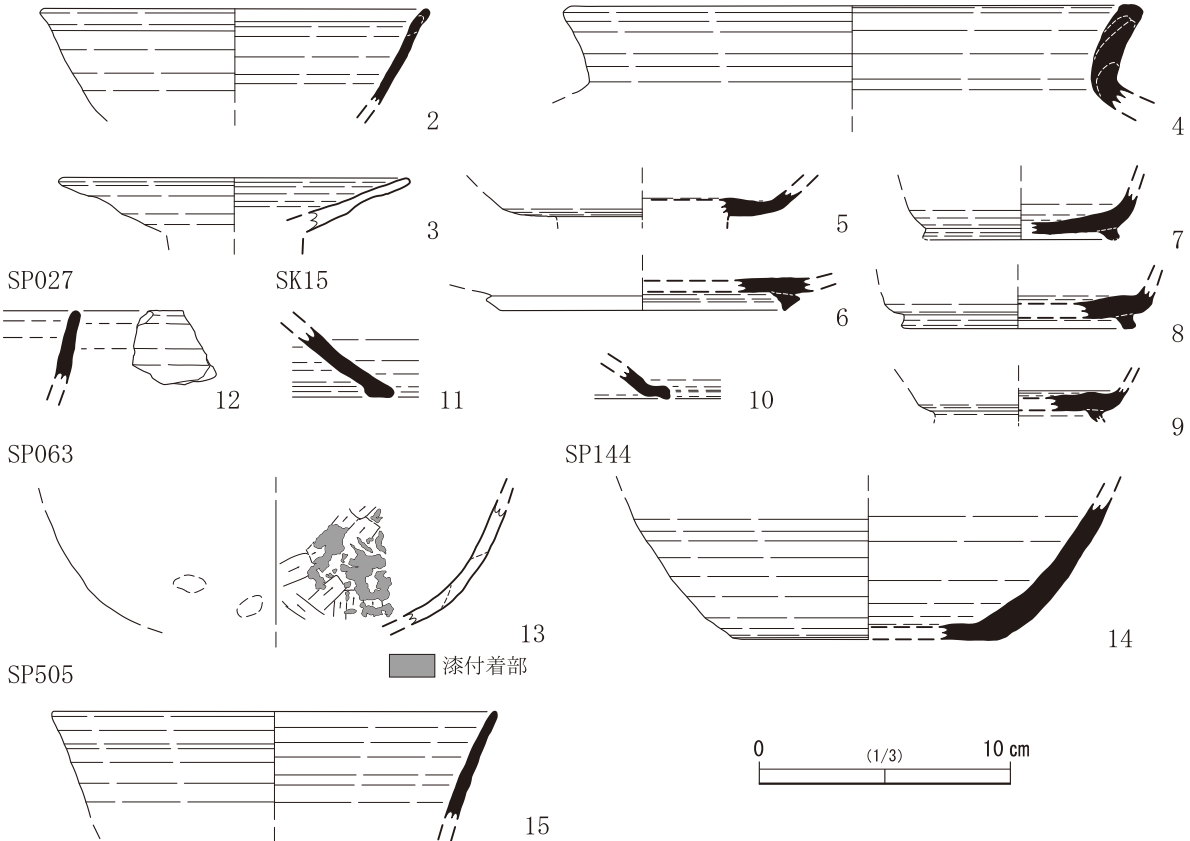
2～15は古代の遺構より出土した遺物で、須恵器が主体である。

2・3は掘立柱建物SB01の構成柱穴から出土した。2は須恵器の杯である。口縁部内面を面取りする。池田善文氏による編年(以下、池田編年)のⅦC～ⅧA期に比定できることから、8世紀末～9世紀前半に位置づける。3はSP080から出土した土師器の皿である。周防国府跡SK6420から類例が出土していることから、10世紀後半と考える。埋土上層で出土したため、流れ込みの可能性がある。

4～11は土坑から出土した須恵器である。4～10はSK23より出土した。4は甕で、内面肩部に当て具の痕跡がある。5・7～9は杯身である。6は杯身か台付皿で、断面三角形の高台を貼り付ける。7～9は高台が「ハ」の字状に開く。10は杯蓋である。11はSK15から出土した台付壺と考える。脚台径が15cm程度に復元できる。6～9は池田編年のⅦB～ⅦC期で8世紀中頃～9世紀初頭、10は

SB01

SK23



第26図 古代遺物実測図

ⅦC期で8世紀末～9世紀初頭である。11は周防国府跡SD1900から出土した類例から8世紀代に位置づける。

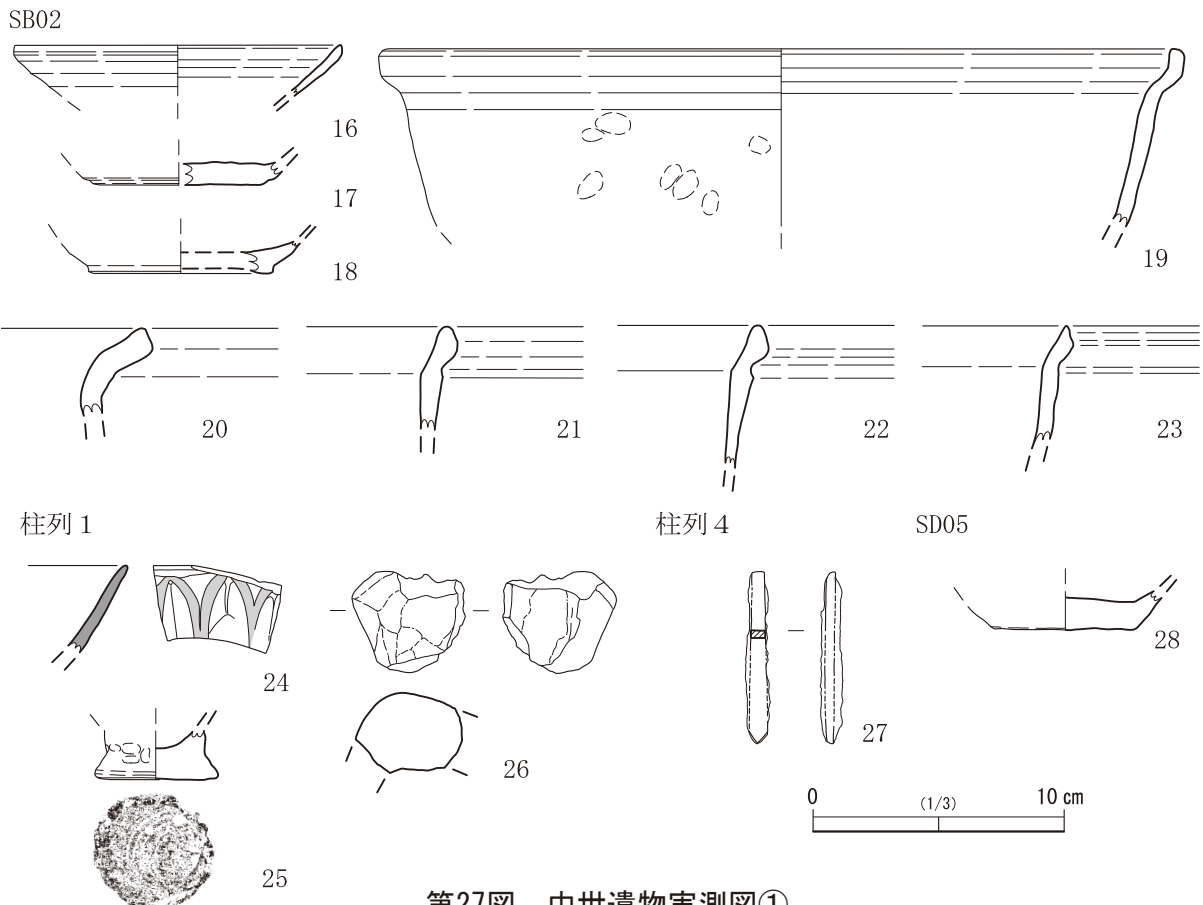
12～15は柱穴から出土した遺物である。12は須恵器の杯身である。13は土師器の甕で、内面に漆が附着する。14は須恵器の壺で、SP144の底面付近から出土した。15は須恵器の杯身である。復元口径は17cmを超え、大ぶりである。池田編年のⅦA～ⅦC期に比定されるから8世紀代～9世紀初頭と考える。

16～82は中世の遺構から出土した。遺物構成は、土師器の皿・杯、土師質焼成の鍋・羽釜が主体で、中国産輸入磁器（青磁・白磁）や滑石製石鍋といった当時的高级品が含まれる。

16～23は掘立柱建物SB02の構成柱穴から出土した。16～18は土師器の杯である。いずれも橙色系の色調で、胎土に砂粒を多く含む。19は瓦質焼成、20～23は土師質焼成の鍋で、すべてSP138から出土した。いずれもハケ目を確認できず、ナデ消された可能性がある。胎土に石英・長石を含み、雲母は確認できない。岩崎仁志氏による分類（以下、岩崎分類）のⅡ～Ⅲ新形式にあたり、15世紀代と考える。

24～26は柱列1の構成柱穴から出土した。24は青磁の椀である。釉薬が厚めにかけて、外面に蓮弁文様を片切り彫りで表す。龍泉窯系で13世紀中頃にあたる。25は柱状高台杯または皿である。26は不明土製品とした。

27は柱列4の構成柱穴SP221から出土した鉄製品である。長さが6.85cm、幅が0.8cmで、断面長方形を呈する。鑿と考える。



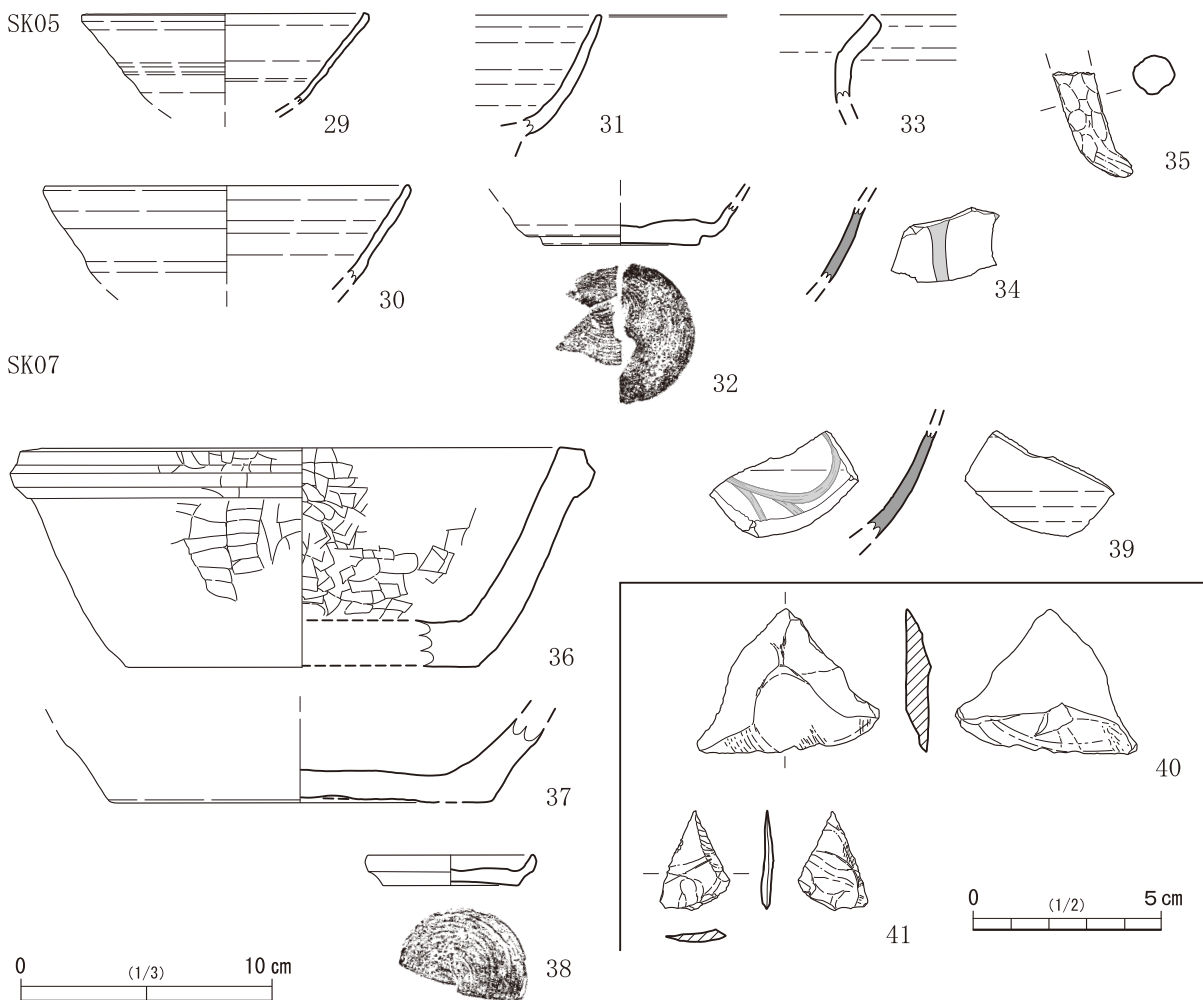
第27図 中世遺物実測図①

28はSD05埋土上面から出土した土師器の杯である。最大厚が1.3cmと分厚い。胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。

29～59はいずれも集石土坑から出土した。

29～35は集石土坑SK05より出土した遺物である。29～32は土師器の杯である。いずれも橙色系の色調を呈する。29は復元口径が11cm程度、器壁が3mm程度と薄く、小南裕一氏による編年（以下、小南編年）のⅣ期に相当することから14世紀後半～15世紀前半に位置づける。30は29より器壁が厚く大型で、胎土に砂粒を多く含むなど、より古い様相を示す。33は土師質焼成の鍋である。内外面でハケ目が確認できない。岩崎分類のⅡ型式にあたり、15世紀前半と考える。34は外面に蓮弁文をもつ青磁の椀である。龍泉窯系で13世紀中頃にあたる。35は瓦質焼成の鍋の脚部で、胎土に石英・長石を多量に含む。

36～41は集石土坑SK07から出土した遺物である。36は滑石製の石鍋である。口縁部直下に削り出された鏝がめぐるもので、木戸雅寿氏による分類（以下、木戸分類）のⅢ類にあたり、14世紀代と考える。石材の化学組成分析を実施した結果、山口県宇部市下請川南遺跡で製作された可能性がある。37は瓦質焼成の鉢である。38は土師器の皿である。橙色系の色調で、器壁が6～7mmと厚い。胎土に淡黄色や赤褐色の粘土が混じる。小南編年Ⅲ期で、14世紀前半～中頃に比定される。39は青磁の椀で



第28図 集石土坑出土遺物実測図①

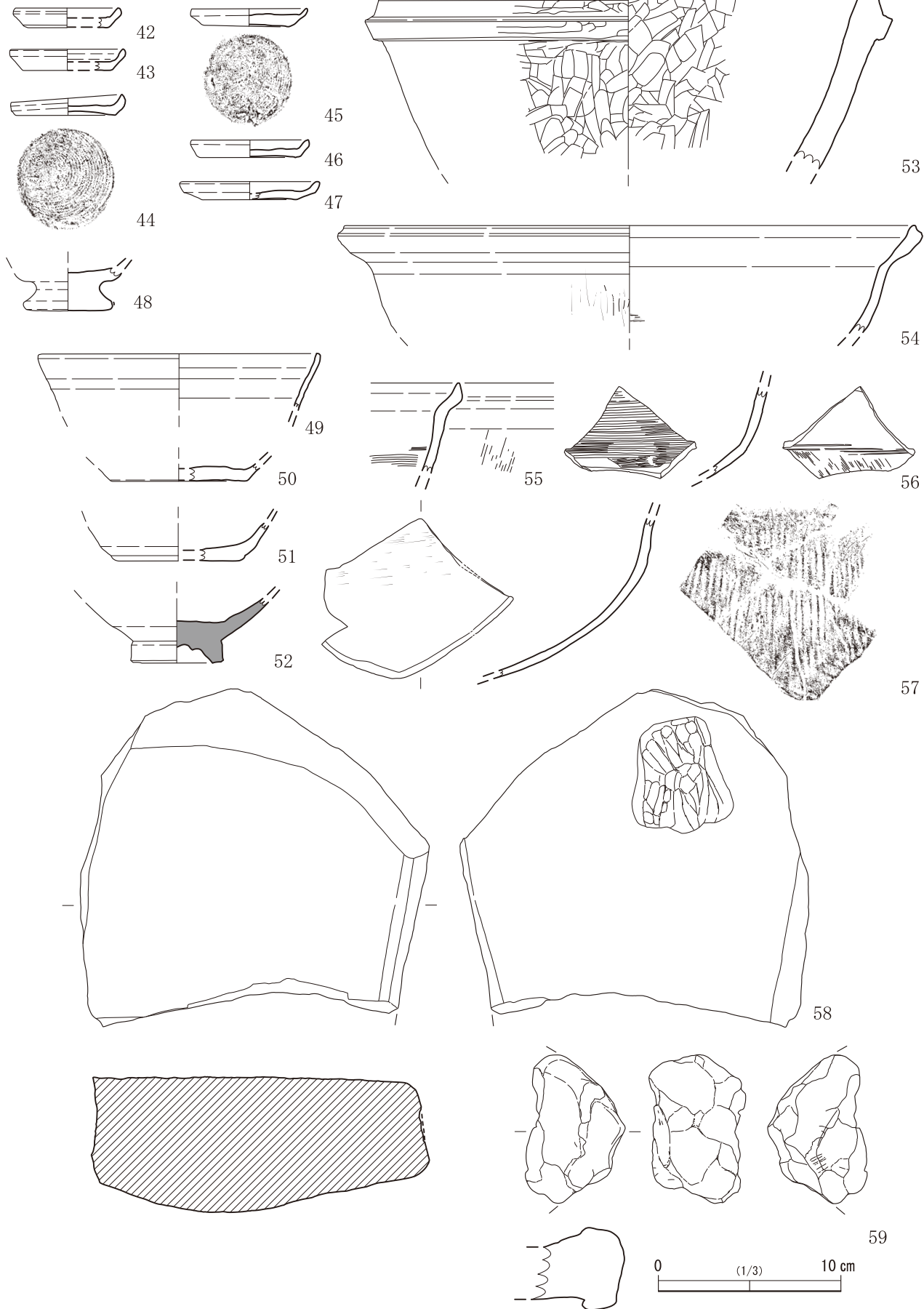
ある。内面に刻花文を施す。龍泉窯系で12世紀末～13世紀初頭にあたる。40・41は玄武岩製の石器である。40は腹面側を下、左、右の順で剥離、背面側は下側を剥離し刃部とした可能性がある。剥片石器または削器と考える。41は平基式の剥片鏃である。腹面側から剥離するが、右側縁は斜めに剥離したのみで、背面側に加工痕が認められない。左側縁はやや細かく調整するが、剥離時の面を活かす。基部は一部のみ調整する。

42～59は集石土坑SK06から出土した遺物である。42～47は土師器の皿である。いずれも色調は橙色系だが、44～46は白色系の粘土が混じる。43～46は口径6 cm、器高1 cm前後で、42はそれらより小型で、47は大型である。いずれも小南編年Ⅲ期で、14世紀前半～中頃と考える。48は柱状高台杯または皿である。白色系の粘土が混じる。49～51は土師器の杯である。いずれも橙色系の色調を呈する。49は器壁が3 mm程度と薄く、粘土柱水挽技法によって成形されたと考えられるため、15世紀代に位置づける。52は青磁の椀である。残存部の外面はすべて露胎である。腰が張らない器形で、高台外端を斜めに面取りする。高台内の粗い処理から福建省産の13世紀代の製品である。53は滑石製の石鍋である。36と同様に木戸分類のⅢ類にあたる。ノミ痕跡が明瞭に残る。石材の化学組成分析を実施した結果、長崎県西海市ホゲツ遺跡の製品とわかった。54～57は土師質焼成の鍋である。54はSK07出土資料と接合した。55は同型式の資料が美祢市美東町岡の台遺跡からも出土しているため、同遺跡で生産された可能性も考えられる。57の外面底部の平行タタキは、13世紀代に多くみられる技法である。58はSK06に詰められた礫の一つで、右側縁に人為的な加工痕がある。墓石や石塔等と考える。59は不明土製品で、26と同様の胎土である。

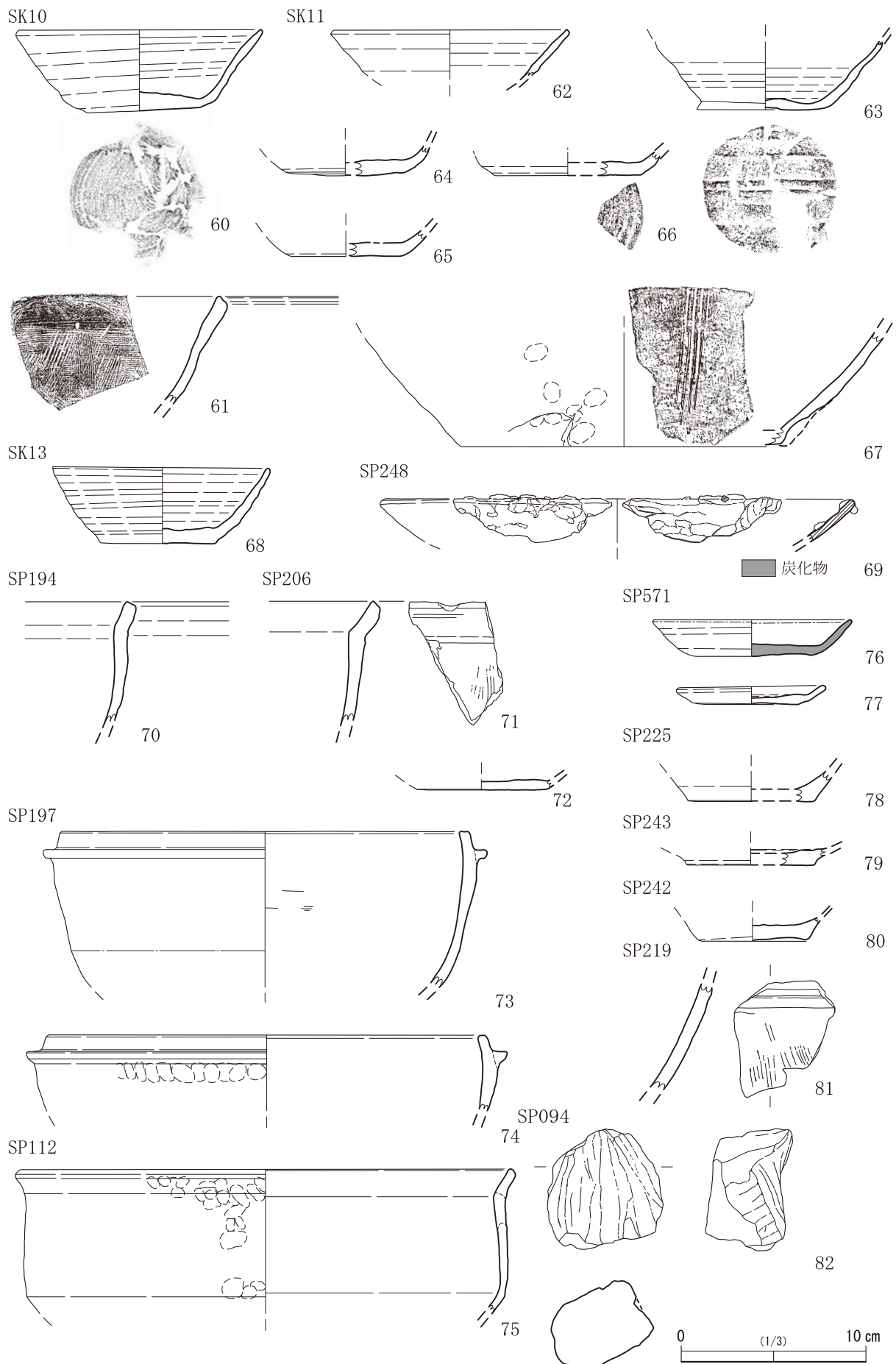
60～68は集石土坑を除く土坑から出土した遺物である。60・61はSK10から出土した。60は土師器の杯である。小南編年Ⅳ期で、14世紀後半～15世紀前半にあたる。61は瓦質焼成の鍋である。内面はヨコハケ後タテハケ調整、外面は粗いヨコナデを施す。口縁部の形態から、14世紀後半～15世紀前半と考える。62～67はSK11から出土した。62～66は土師器の杯である。いずれも色調は橙色系だが、64のみ白色系粘土が混じる。62は小南編年のⅣ期にあたり14世紀後半～15世紀前半、63は同編年のⅢ期で14世紀前半～中頃に比定する。65はSK25焼土内から出土した破片と接合した。調整はロクロ目を残さず丁寧である。67は土師質焼成の播鉢である。内面に4条の卸目、外面に多くの指頭圧痕が確認できる。土師質焼成および形態から14世紀後半～15世紀前半と考える。68はSK13出土の土師器の杯である。器壁は厚く、ロクロ目が明瞭に残る。底部は回転糸切りで、切り離した痕をナデ消している。小南編年のⅢ期で、14世紀前半～中頃にあたる。

69～82は柱穴から出土した遺物である。69はSP248から出土した鉄製品で、鉄鍋と考える。70・71はそれぞれSP194とSP206から出土した土師質焼成の鍋である。70は岩崎分類Ⅰ型式で14世紀後半～15世紀前半、71は同じくⅡ型式で15世紀前半に位置づける。72は土師器の杯または皿の底部である。73・74はいずれもSP197から出土した土師質焼成の西長門型の羽釜である。14世紀中頃と考える。75はSP112から出土した土師質焼成の鍋である。岩崎分類Ⅰ型式にあたり、14世紀末～15世紀前半と考える。76・77は、SP571から重なって出土した白磁皿と土師器皿である。76は口縁端部が口弁げになったもので、大宰府分類の皿Ⅸ類にあたる。胎土は灰白色で硬質、釉薬は厚めにかかり空色を帯びる。底部外面は釉薬を板状工具でのばす。広東系で13世紀後半～14世紀前半である。77は橙色系の色調を

SK06



第29图 集石土坑出土遺物実測図②



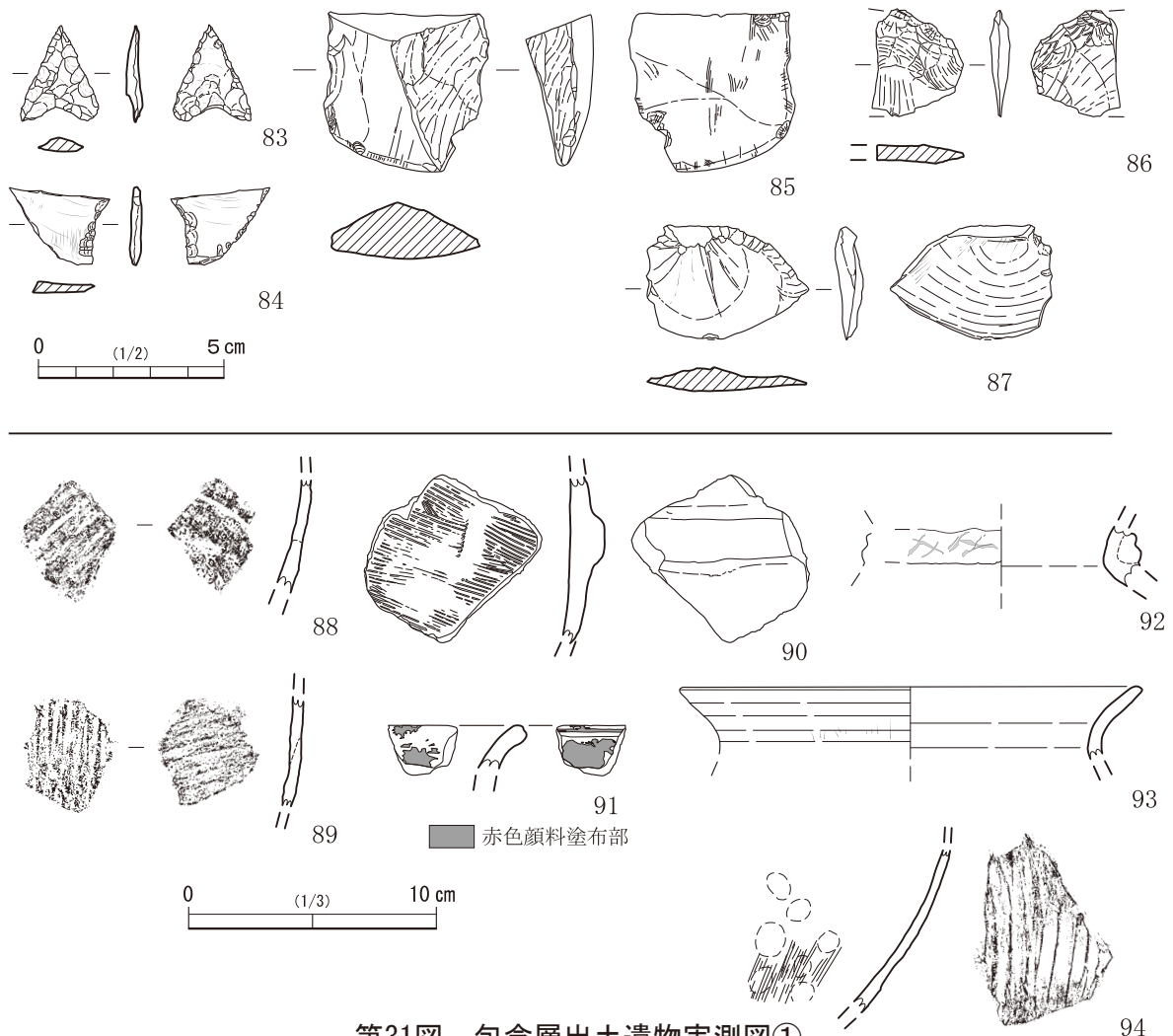
第30図 中世遺物実測図②

呈し、胎土に長石を多量に含む。小南編年Ⅲ期で、14世紀前半～中頃と考える。78・79は、それぞれSP225とSP243から出土した土師器の杯である。いずれも橙色系の色調で、底部の器壁が8mm程度と分厚い。胎土に長石・金雲母を多量に含む。80はSP242から出土した土師器の皿である。小南編年Ⅲ期で、14世紀前半～中頃にあたる。81はSP219から出土した土師質焼成の羽釜で、外面にススが付着する。82はSP094から出土した不明土製品で、表面に簾状の凹凸をもつ。5mm程度の赤褐色の礫をわずかに含むのみで、スサなどは確認できない。同様の土製品がもう一個体出土しており、同一個体の可能性がある。

83～157は遺物包含層から出土した遺物である。

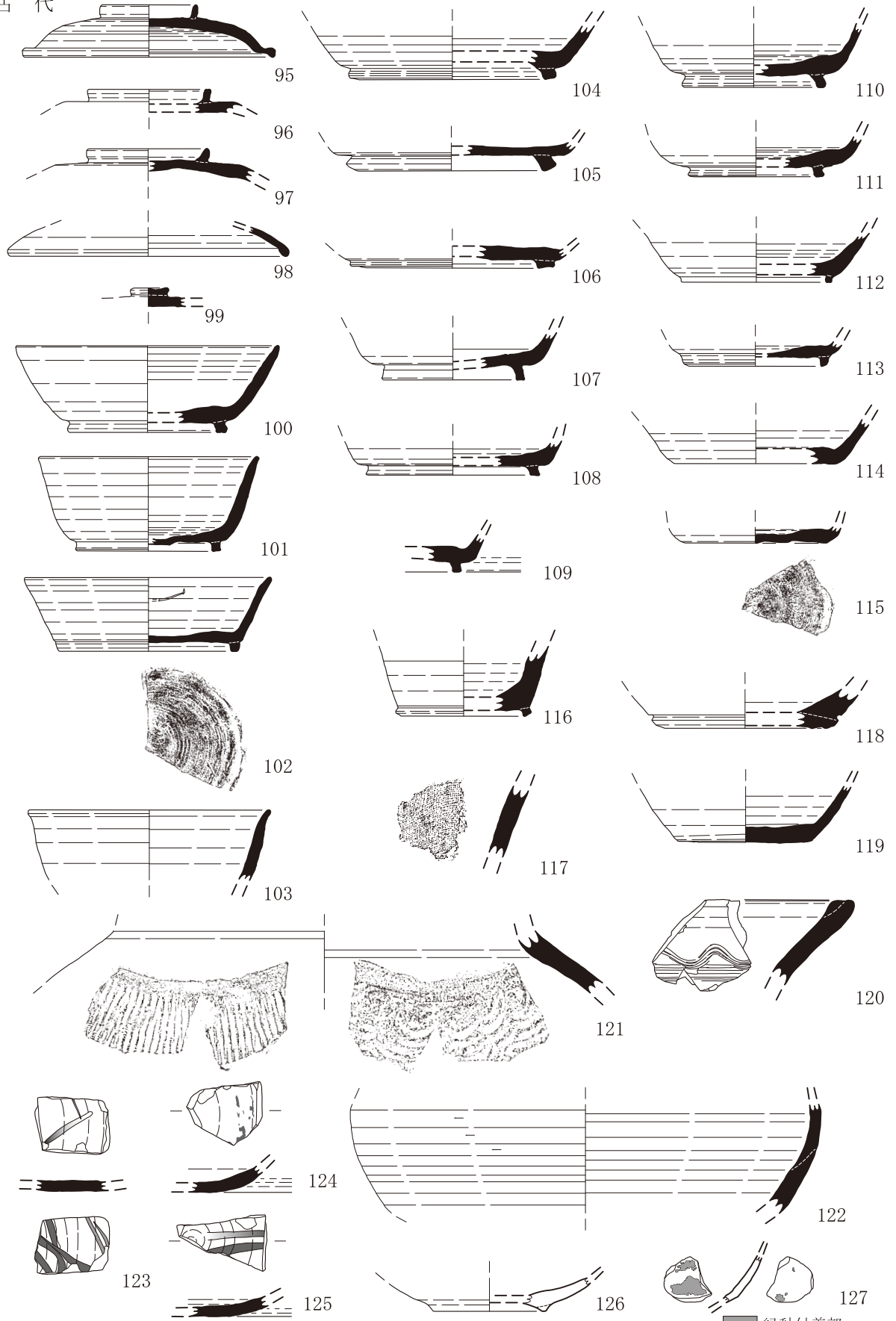
83～87は石器で、84を除いてすべて玄武岩製である。いずれも遺跡の周辺で採れる石材ではないため、外部から素材を搬入したと思われる。83は無茎凹基式の打製石鏃である。表面は基部、右側縁、左側縁の順で剥離により大きく3面をつくり出し、各面を細かく調整加工する。裏面は全体を剥離後、両側縁と基部および脚部のみ調整し、刃部と基部をつくる。84は剥片石器で佐賀県腰岳産の黒曜石製である。素材剥離後、腹面の右側および背面の左側を調整し、刃部をつくり出す。削器などの未成品の可能性がある。85は磨製石斧の再加工品である。腹面側の右半分は石斧破損後に打ち割ったと考

縄文・弥生・古墳



第31図 包含層出土遺物実測図①

古代



■ 緑釉附着部

0 (1/3) 10 cm

第32図 包含層出土遺物実測図②

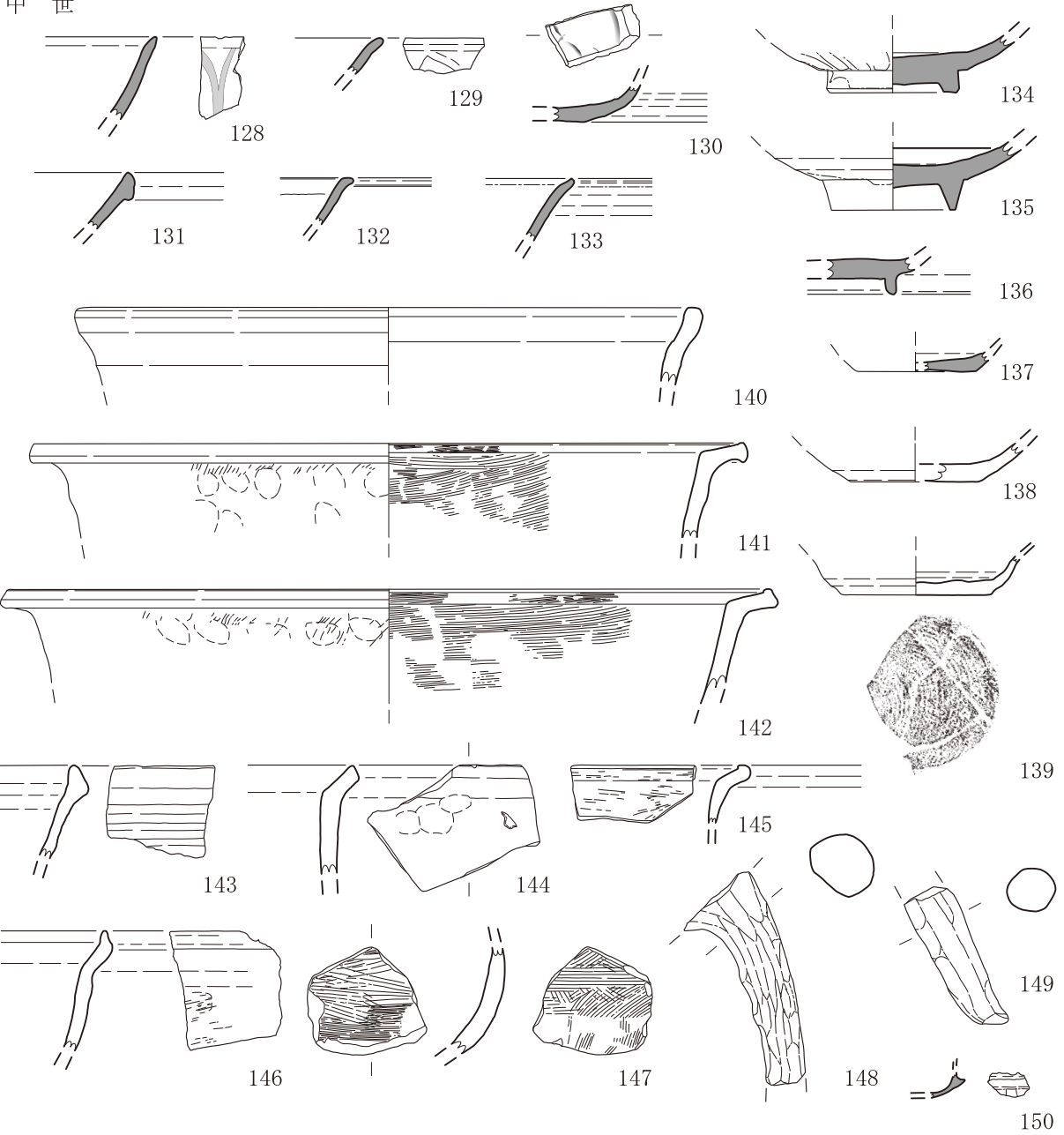
える。上側は使用時または意図的に破損し、両側縁の対称する各2か所を打ち欠きし、再利用したと考える。下側は刃部で使用痕がある。86は剥片石器または削器である。下側は刃部状に薄く作りだすが、加工痕は少ない。一方、上側には細かい敲打痕がある。87は剥片石器である。リングとフィッシャーが凹凸になるため強い打撃が加えられたと考える。一次的な剥離のみで、二次加工痕はない。

88～94は縄文・弥生・古墳時代の遺物である。88・89は縄文土器の粗製深鉢である。いずれも内外面に二枚貝による貝殻条痕がある。90は弥生土器の壺胴部である。下村遺跡A地区で同様の壺が出土している。弥生時代中期初頭と考える。91は土師器甕の口縁部である。内外面に赤色顔料が残る。92は複合口縁壺の頸部である。ヘラ状工具による斜格子文の突帯を貼り付ける。93は土師器甕の口縁部である。外面にタテハケ調整が確認できる。94は土師器甕の胴部である。外面は平行タタキ、内面はタテハケ後ナデと指オサエをする。

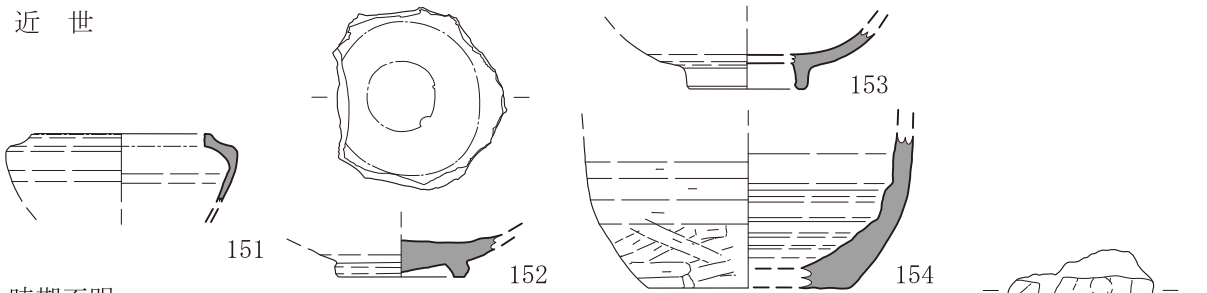
95～127は古代の遺物である。95～99は須恵器の杯蓋である。95～97は環状つまみ、99は偏平な擬宝珠状つまみをもつ。95～97はいずれも池田編年のⅦC期に比定でき、8世紀末～9世紀初頭に位置づける。100～113は須恵器の杯身である。100・104・109・111は高台が「ハ」の字状に開き、101・108・110は垂直ぎみに接合される。いずれも池田編年のⅦA～ⅦC期、すなわち8世紀前半～9世紀初頭と考える。高台が底部端に寄り、体部が直線的に立ち上がる102・112・113はⅦC～ⅦA期で、8世紀末～9世紀前半にあたる。102・108は底部回転糸切りで、102の体部内面にはヘラ記号がみられる。114・115は無高台の須恵器杯である。116・119・122は須恵器の壺である。117は製塩（焼塩）土器の可能性もある。須恵質で、内面に布目痕がある。118は須恵質のこね鉢である。120・121は須恵器の甕である。120は外面に波状文とカキメがあり、121は外面に擬格子タタキ、内面に同心円文の当て具痕がある。123～125は須恵器の杯または皿で墨書をもつ。125は火襷状の痕跡の可能性もある。いずれも判読できない。126は土師器の椀である。断面三角形の高台を貼り付ける。一部黒褐色化する。127は緑釉陶器で、小片だが椀の可能性が高い。段をもち、胎土が赤みを帯び、釉薬が透明感のない緑色を呈するなどの特徴から、長門産と考える。

128～149は中世の遺物である。128～137は中国産輸入磁器で、128・129・134・136が青磁、130～133・135・137が白磁である。128・129は椀で、いずれも外面に蓮弁文様をもつ。129は粗質で釉薬が黄色味を帯び、貫入が激しい。いずれも龍泉窯系で、13世紀中頃にあたる。130は皿で、内面に刻花文をもつ。全面施釉の後、外底部のみ釉薬を削り取る。福建省産で、13世紀代の所産である。131は玉縁口縁をもつ椀である。胎土に少量の黒斑を含む。132は椀で、貫入が多い。131・132はいずれも福建省産で、12世紀代の製品である。133は口縁端部が口禿げになった鉢で、大宰府分類のⅨ類にあたる。14世紀代の所産である。134は椀で、外面に蓮弁文がある。角高台の外端を斜めに面取りし、底部は肉厚である。腰は張らず、直線的に立ち上がる。釉薬は黄色味を帯びる。龍泉窯系で、12世紀前半にあたる。135は椀で、残存部の外面はケズリ調整する。高台は細く高く直立する。福建省産で、12世紀中頃に位置づける。136は椀で、精製された胎土に、青みを帯びた緑色の釉薬がかかる。畳付まで施釉され、露胎は高台裏のみである。龍泉窯系で12世紀代の所産である。137は皿で、底部の釉薬は施釉した後に削り取る。福建省産で12世紀代の所産である。138・139は土師器の杯である。いずれも橙色系の色調である。140～147は鍋で、143のみ瓦質焼成で、他はいずれも土師質焼成である。

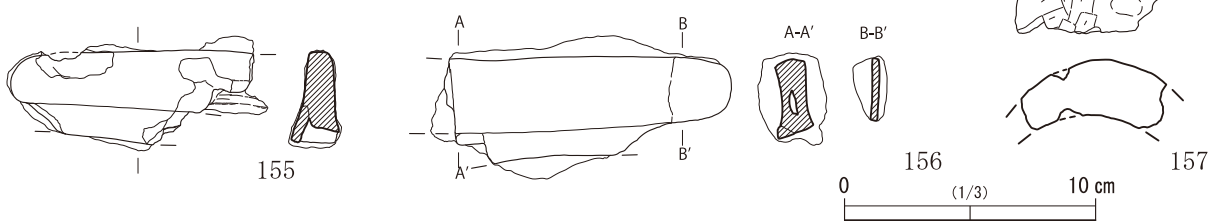
中世



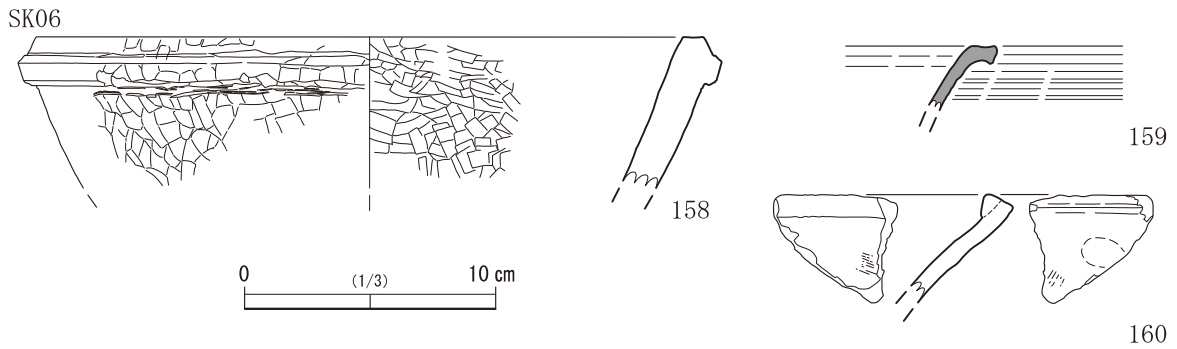
近世



時期不明



第33图 包含層出土遺物実測图③



第34図 遺構外出土遺物実測図

141・142はいずれも内面はヨコハケ、外面はタテハケの後ナデ消しや指オサエをする。胎土に石英・長石と雲母を含む。これらは調整技法や外反する口縁端部から、岩崎分類の西長門型鍋 a にあたる。13世紀後半にあたる。144は外面に粘土粒が付着する。岩崎分類Ⅱ型式で、15世紀前半と考える。145も西長門型鍋 a で、13世紀後半の所産である。胎土に石英・長石を含み、雲母は確認できない。146はⅢ新型式で、15世紀後半にあたる。148・149は足鍋または足釜の脚部である。いずれも土師質焼成で、前者が白色系、後者が橙色系の色調を呈する。150は青磁の合子で、蓋受部の口縁端部は施釉した後、釉薬を削り取っている。底部は菊花文状に成形する。南方系で、12～14世紀代の製品である。

151～154は近世の遺物である。151は磁器の蓋付の小壺である。口縁部のみ露胎で、内面はロクロケズリのためか器壁が薄い。瀬戸・美濃焼の可能性がある。152は陶器の皿で、残存部の外面は露胎、底部は削り出し高台である。見込みは銅緑釉を蛇の目状に釉剥ぎする。肥前系で17世紀後半以降の所産である。153は陶器の椀で、畳付以外施釉する。胎土・釉薬ともに淡黄色の色調を呈する。154は陶器の瓶で、内面はロクロ目が明瞭に残る。外面には黒斑がある。備前焼の可能性がある。

155～157は時期不明の遺物である。155・156は同一個体の可能性もある。鉄鋌と考えるが、X線処理およびCTスキャンの結果、二個体が銹着したと判断する。157は羽口で、胎土に粗砂やスサを多く含む。外面に二次被熱痕がある。

158～160は遺構外から出土した遺物である。158は滑石製石鍋で、SK07から出土した36、SK06から出土した53と同一型式と考える。全体的に丁寧に調整する。石材の化学組成分析を実施した結果、長崎県西海市ホゲット遺跡の製品とわかった。159は陶器の鉢である。外面にロクロ目が明瞭に残る。灰色の胎土に藁灰釉をかける。全面に施釉するが、釉薬がかかっていない部分は赤褐色を呈する。口径が大きいので、荒物だろう。160は土師質焼成の播鉢である。内外面ともにハケ調整の後にナデ消す。口縁端部内面に断面三角形の肥厚帯の貼り付けがある。岩崎編年のⅡ期後半で、15世紀後半～16世紀にあたる。

第5表 遺物観察一覧表

土器・陶磁器観察一覧表

※「()」は復元値、「残」は残存値

No.	挿図	図版	出土場所	種類	器種	法量(cm)				胎土(砂粒)	焼成	色調	調整・備考
						口径(復元値)	器高	底径(復元値)	最大径(復元値)				
1	25	13	SP231段下げ埋土	土師器	甕	—	残 3.1	—	—	多	良	内面: にぶい黄橙色 外面: 明褐色	外面ヨコナデ。摩滅・剥離著しい。
2	26	13	SB01 (SP061・SP089)	須恵器	杯	(15.2)	残 3.8	—	—	少	良	内外面: 灰色	内外面ヨコナデ。口縁部内面を面取り。
3	26	13	SB01 (SP080)	土師器	皿	(13.6)	残 2.1	—	—	多	良	内外面: 橙色	内外面ヨコナデか。内外面に赤彩あり。摩滅著しい。
4	26	13	SK23南西埋土	須恵器	甕	(22.3)	残 4.1	—	(23.0)	多	良	内外面: 灰色	内外面ヨコナデ。内面肩部に当て具痕か。
5	26	13	SK23埋土	須恵器	杯身か	—	残 1.1	(7.0)	—	少	良	内外面: 灰色	内面ヨコナデ。外面回転ヘラケズリ、ヨコナデ。
6	26	13	SK23埋土	須恵器	杯身か 台付皿	—	残 1.2	(11.3)	—	多	良	内外面: 灰色	内面不定方向のナデ。外面ヨコナデ。
7	26	13	SK23北西部埋土	須恵器	杯身	—	残 2.0	(7.8)	—	多	良	内外面: 灰白色	内面ヨコナデ後、中心付近不定方向のナデ。外面回転ヘラケズリ後ヨコナデ。底部ヘラ切り。
8	26	13	SK23埋土	須恵器	杯身	—	残 1.6	(9.2)	—	多	良	内面: 灰白色 外面: 灰白色~オリーブ黒色~灰色	内外面ヨコナデ。中心付近不定方向のナデ。底部ヘラ切り後ナデ。
9	26	13	SK23南西埋土	須恵器	杯身	—	残 1.3	(6.8)	—	少	良	内外面: 灰白色	内面ヨコナデ。中心付近不定方向のナデ。外面回転ヘラケズリ後ヨコナデ。底部ヘラ切り。
10	26	13	SK23埋土	須恵器	杯蓋	—	残 1.2	—	—	少	良	内外面: 灰色	内外面ヨコナデ。
11	26	13	SK15	須恵器	台付壺か	—	残 2.7	—	—	少	良	内面: 灰白色 外面: 灰色	内外面ヨコナデ。
12	26	13	SP027	須恵器	杯身か	—	残 2.9	—	—	多	良	内外面: 灰白色	内外面ヨコナデ。
13	26	13	SP063	土師器	甕	—	残 4.9	—	—	多	やや良	内面: にぶい黄橙色 外面: 黒褐色	内面ヘラケズリ、漆付着。外面指オサエ、摩滅。
14	26	13	SP144	須恵器	壺	—	残 5.6	(10.8)	—	多	良	内外面: 灰白色	内面ヨコナデ。外面回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ後ナデ。
15	26	13	SP505段下げ埋土	須恵器	杯身	(17.6)	残 4.2	—	—	少	良	内外面: 灰色	内外面ヨコナデ。
16	27	13	SB02(SP140・SP141) 南側埋土	土師器	杯	(13.0)	残 2.0	—	—	多	やや良	内外面: にぶい黄橙色	摩滅のため不明。
17	27	13	SB02(SP138) 南側埋土	土師器	杯	—	残 0.9	(6.5)	—	多	良	内面: にぶい橙色 外面: にぶい橙色~にぶい黄橙色	外面体部ヨコナデ。摩滅のため他不明。
18	27	13	SB02(SP233)	土師器	杯	—	残 1.2	(7.0)	—	多	やや良	内外面: 橙色	摩滅のため不明。灰白色粘土がマーブル状に混じる。
19	27	13	SB02(SP138)	瓦質土器	鍋	(31.0)	残 7.0	—	—	多	やや良	内面: 灰白色~黄灰色 外面: 浅黄褐色~灰黄褐色	内面ヨコナデか。外面指オサエ、スス付着。摩滅著しい。
20	27	13	SB02(SP138) 柱痕	土師質土器	鍋	—	残 3.5	—	—	多	やや良	内面: 浅黄褐色 外面: にぶい橙色	内面ヨコナデ。外面ヨコナデ、指オサエ。
21	27	13	SB02(SP138) 柱痕	土師土器	鍋	—	残 4.1	—	—	多	良	内面: 橙色 外面: 橙色~にぶい黄褐色	内外面ヨコナデか。浅黄色の粘土が混じる。
22	27	13	SB02(SP138) 柱痕	土師質土器	鍋	—	残 5.7	—	—	多	やや良	内面: 橙色 外面: 明黄褐色	内外面ヨコハケ後ナデか。
23	27	13	SB02(SP138) 柱痕	土師質土器	鍋	—	残 4.9	—	—	多	良	内面: 黒色 外面: 黒色~灰褐色	内面ヨコナデか。外面ヨコナデ、指オサエか。
24	27	14	柱列 1(SP127)	青磁	椀	—	残 3.4	—	—	—	良	胎土: 灰白色 釉薬: 灰オリーブ	内外面ロクロナデ後施釉。外面鎊蓮弁文様(片切り彫り)。龍泉窯系。
25	27	14	柱列 1 (SP544埋土)	土師器	柱状高台 杯か皿	—	残 1.9	4.8	—	多	良	内外面: 橙色	内面ヨコナデ。外面ヨコナデ、指オサエ。底部回転糸切り。摩滅著しい。
26	27	14	柱列 1 (SP544埋土)	土製品	不明	最大長 3.9	最大幅 4.5	最大厚 3.0	—	少	良	橙色	摩滅のため不明。
28	27	14	SD05埋土土上面	土師器	杯	—	残 1.5	5.5	—	多	やや良	内面: 浅黄褐色 外面: にぶい橙色	内外面ナデか。底部ヘラ切り後ナデか。摩滅著しい。
29	28	14	SK05集石下 東側埋土	土師器	杯	(11.0)	残 3.6	—	—	多	やや良	内面: にぶい黄褐色 外面: 灰黄褐色	内外面ロクロナデ。ロクロ目が明瞭に残る。赤色粘土がマーブル状に混じる。
30	28	14	SK05西側埋土	土師器	杯	(14.4)	残 3.9	—	(14.6)	多	良	内面: 明黄褐色 外面: にぶい黄褐色	内外面回転ナデ。一部赤色化。
31	28	14	SK05集石下	土師器	杯	—	残 4.8	—	—	多	良	内外面: 橙色	内外面回転ナデ。
32	28	14	SK05南東区埋土 集石上	土師器	杯	—	残 1.7	6.0	—	多	やや良	内面: 橙色 外面: にぶい橙色	内外面回転ナデ。底部回転糸切り。灰白色・明赤褐色粘土がマーブル状に混じる。
33	28	14	SK05	土師質土器	鍋	—	残 3.5	—	—	多	やや良	内面: 橙色 外面: 明黄褐色	内面ナデか。外面ヨコナデ。粘土がマーブル状に混じる。
34	28	14	SK05集石下	青磁	椀	—	残 3.0	—	—	少	良	胎土: 黄灰色 釉薬: 暗オリーブ	内外面ロクロナデ後施釉。外面蓮弁文様(片切り彫り)。龍泉窯系。
35	28	14	SK05	瓦質土器	足鍋脚部	—	残 4.2	—	—	多	良	灰黄色	指オサエ、手づくね。
37	28	14	SK07埋土・集石中	瓦質土器	鉢	—	残 3.3	(14.9)	—	多	やや良	内面: 灰白色 外面: 灰色	内外面ヨコナデか。中心付近・底部ナデか。摩滅・剥離著しい。
38	28	14	SK07	土師器	皿	(6.6)	1.2	5.4	(6.8)	多	良	内外面: 橙色	内外面回転ナデ。底部回転糸切り。淡黄色・赤褐色粘土がマーブル状に混じる。
39	28	14	SK07	青磁	椀	—	残 4.2	—	—	—	良	胎土: 灰黄色 釉薬: にぶい黄色	内外面ロクロナデ後施釉。内面刻花文(片切り彫り)。龍泉窯系。
42	29	15	SK06	土師器	皿	(5.6)	1.1	(4.3)	(5.9)	多	良	内外面: 灰黄褐色	内外面回転ナデ。底部回転糸切りか。
43	29	15	SK06	土師器	皿	(6.1)	1.2	(4.9)	—	少	良	内面: 橙色 外面: 明黄褐色	摩滅のため不明。
44	29	15	SK06集石下 底面付近	土師器	皿	6.05	1.15	5.45	6.3	多	良	内外面: 橙色	内外面回転ナデ。底部回転糸切り後一部ナデ。内面赤彩あり。灰白色粘土がマーブル状に混じる。
45	29	15	SK06集石下 底面付近	土師器	皿	6.3	1.0	4.9	6.4	多	良	内面: 橙色 外面: 明黄褐色	内外面回転ナデ。底部回転糸切り。灰白色粘土がマーブル状に混じる。
46	29	15	SK06北東区埋土・ 集石下	土師器	皿	6.3	0.95	5.5	6.5	多	良	内外面: 橙色	内外面回転ナデ。底部回転糸切り。灰白色粘土がマーブル状に混じる。
47	29	15	SK06南西区埋土 集石上	土師器	皿	(7.4)	1.0	(5.2)	(7.65)	多	良	内外面: 橙色	内外面回転ナデ。底部回転糸切り。

No.	挿 図 版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			胎土 (砂粒)	焼成	色調	調整・備考		
					口径 (復元値)	器高	底径 (復元値)					最大径 (復元値)	
48	29	15	SK06	土師器	柱状高台 杯か皿	—	残 2.3	4.6	—	多	やや良	内外面：にぶい橙色	内外面回転ナデ。底部回転糸切り。灰 白色粘土がマーブル状に混じる。
49	29	15	SK06	土師器	杯	(15.4)	残 3.1	—	—	少	やや良	内外面：明黄褐色	内外面口クロナデ。
50	29	15	SK06北東区埋土	土師器	杯	—	残 0.9	(7.4)	—	少	良	内面：明黄褐色 外面：灰黄色	摩滅のため不明。
51	29	15	SK06北東区埋土	土師器	杯	—	残 2.05	(6.9)	—	多	やや良	内外面：橙色	内外面回転ナデか。底部回転糸切りか。 摩滅・剥離著しい。
52	29	15	SK06	青磁	椀	—	残 2.5	4.8	—	—	良	胎土：灰白色 釉薬：灰オリーブ	内面口クロナデ後施釉。外面口クロナ デ露胎。削り出し高台。高台外端を斜 めに面取り。福建産。
54	29	15	SK06南西区埋土集 石上・SK07	土師質 土器	鍋	31.2	残 5.9	—	32.0	多	良	内外面：にぶい黄褐色	内面ヨコハケ。外面タテハケ。
55	29	15	SK06南東区埋土集 石間・北東区	土師質 土器	鍋	—	残 4.9	—	—	少	やや良	内外面：淡黄色	内面ヨコハケ。外面タテハケ。
56	29	15	SK06	土師質 土器	鍋	—	残 5.0	—	—	多	良	内面：浅黄色 外面：明黄褐色	内面ヨコハケ。外面胴部タテハケ後ナ デか。底部タテハケ。
57	29	16	SK06	土師質 土器	鍋	—	残 8.8	—	—	多	やや良	内外面：灰白色	内面胴部ヨコハケ後ナデ、底部ナデか。 外面胴部指オサエ、底部平行タタキ。
59	29	16	SK06	土製品	不明	最大長 8.1	最大幅 5.1	最大厚 4.9	—	少	良	にぶい黄褐色～橙色	ナデ、一部工具状痕跡。
60	30	16	SK10	土師器	杯	13.1	4.5	6.2	13.3	多	やや良	内面：橙色～にぶい黄褐色 外面：橙色～にぶい黄色	内外面口クロナデ。底部回転糸切り。
61	30	17	SK10	瓦質土器	鍋	—	残 5.8	—	—	少	良	内面：灰白色 外面：黄灰色	内面ヨコハケ後タテハケ。外面粗いヨ コナデ。
62	30	16	SK11北面 埋土上層	土師器	杯	(12.5)	残 2.7	—	(12.9)	多	やや良	内外面：明黄褐色	内外面回転ナデ。一部褐色化。
63	30	16	SK11南西区 埋土上層	土師器	杯	—	残 3.7	7.1	—	多	良	内外面：橙色	内外面回転ナデ。底部板目瓦痕。
64	30	16	SK11北東埋土	土師器	杯	—	残 1.6	6.5	—	多	やや良	内面：灰黄褐色 外面：にぶい橙色	内外面回転ナデ。底部回転糸切り後ナ デ。灰白色・橙色粘土がマーブル状に 混じる。
65	30	16	SK11床面検出・SK 25焼土内	土師器	杯	—	残 1.4	(5.9)	—	多	良	内面：灰黄褐色 外面：橙色	内外面回転ナデ。底部回転糸切り後ナ デか。中心付近褐色化(二次被熱か)。
66	30	16	SK11埋土1層	土師器	杯	—	残 1.3	(7.9)	—	少	良	内外面：橙色	底部回転糸切り。摩滅・剥離のため他 不明。
67	30	17	SK11	土師質 土器	搦鉢	—	残 6.2	(17.6)	—	多	良	内面：浅黄褐色～橙色 外面：浅黄褐色～淡褐色	内面ハケ目後ナデか、4条の卸目。外面 ナデ、指オサエか。摩滅著しい。
68	30	17	SK13	土師器	杯	11.7	4.1	6.2	—	多	良	内面：橙色 外面：にぶい橙色	内外面回転ナデ。底部回転糸切り後ナ デ。
70	30	17	SP194埋土上層	土師質 土器	鍋	—	残 6.8	—	—	多	やや良	内面：橙色 外面：にぶい橙色	外面スス付着。剥離のため不明。
71	30	17	SP206	土師質 土器	鍋	—	残 6.7	—	—	多	やや良	内面：橙色 外面：にぶい黄褐色	内面ヨコハケ後ナデか。外面タテハケ 後ナデ。明赤褐色・淡黄色粘土が混じる。
72	30	17	SP206	土師器	杯か皿	—	残 0.6	(7.0)	—	多	良	内面：橙色 外面：明黄褐色	底部回転糸切り。摩滅のため他不明。
73	30	17	SP197	土師質 土器	羽釜	(21.9)	残 8.4	—	(24.0)	多	やや良	内面：浅黄褐色 外面：灰黄褐色	内面ヨコハケ後ナデ。外面ナデか、鈔 貼り付け、スス付着。摩滅・剥離著しい。
74	30	17	SP197西側埋土	土師質 土器	羽釜	(23.6)	残 4.1	—	(26.0)	多	良	内外面：にぶい黄褐色 外面口縁部：灰黄褐色	外面指オサエ、鈔貼り付け、スス付着。 摩滅のため内面不明。
75	30	17	SP112	土師質 土器	鍋	(26.4)	残 7.8	—	—	多	良	内面：浅黄褐色～にぶい黄 褐色 外面：にぶい黄褐色	外面指オサエ、スス付着。摩滅のため 他不明。
76	30	18	SP571	白磁	皿	10.6	2.0	6.2	—	—	良	胎土：灰白色 釉薬：明緑灰色	内外面口クロナデ後全面施釉。口縁部 口禿げ。底部回転糸切りか、板状工具 で釉薬を塗りのぼす。広東系。
77	30	18	SP571	土師器	皿	7.7	1.0	5.6	—	多	良	内外面：橙色	内外面回転ナデか。底部回転糸切り。 摩滅著しい。
78	30	18	SP225埋土中	土師器	杯	—	残 1.6	(6.8)	—	多	良	内外面：にぶい黄褐色	摩滅のため不明。
79	30	18	SP243南側埋土	土師器	杯	—	残 0.9	(7.0)	—	多	良	内面：灰黄褐色 外面：にぶい橙色	摩滅のため不明。
80	30	18	SP242段下げ埋土	土師器	皿	—	残 1.3	5.7	—	多	やや良	内外面：浅黄褐色	内外面回転ナデ。底部回転糸切りか。 摩滅著しい。
81	30	18	SP219埋土中	土師質 土器	羽釜	—	残 5.6	—	—	多	良	内面：淡黄色 外面：淡黄色～灰黄色	内面ヨコハケか。外面鈔部ヨコナデか、 胴部タテハケ、スス付着。摩滅著しい。
82	30	18	SP094埋土	土製品	不明	最大長 6.1	最大幅 6.2	最大厚 4.2	—	少	良	内外面：橙色～黄褐色	内面ナデか、外面籐状の凹凸
88	31	18	N4グリッド ベルト1西トレンチ	縄文土器	深鉢	—	残 4.5	—	—	多	良	内面：浅黄褐色 外面：橙色	内外面二枚貝による貝殻条痕。摩滅著 しい。
89	31	18	N4グリッド 包含層上層	縄文土器	深鉢	—	残 4.4	—	—	多	良	内面：灰黄色 外面：灰黄褐色	内外面二枚貝による貝殻条痕。摩滅著 しい。
90	31	19	N4グリッド 包含層上層	弥生土器	壺	—	残 6.7	—	—	多	やや良	内面：黄灰色 外面：にぶい黄褐色	内面ヨコハケ。外面ヨコハケか、突帯 ヨコナデ。摩滅著しい。
91	31	19	N3・N4グリッド ベルト1 1層	土師器	甕	—	残 1.7	—	—	多	良	胎土：浅黄褐色～灰白色 顔料：橙色～明赤褐色	内外面ヨコナデ後赤色顔料塗布。
92	31	19	N3グリッド包含層	土師器	複合口縁 壺	頸部径 (11.2)	残 2.4	—	—	多	やや良	内面：灰黄色 外面：にぶい橙色	内面摩滅により不明。外面ヘラ状工具 による斜格子文のある突帯貼り付け。
93	31	19	O3・O4グリッド 包含層	土師器	甕	(18.3)	残 2.9	—	—	多	良	内外面：にぶい黄褐色	内面ヨコナデ。外面タテハケ後ナデ消 し。
94	31	19	L4グリッド SPI88付近検出	土師器	甕	—	残 6.5	—	—	多	良	内外面：浅黄褐色～灰黄色	内面タテハケ後ナデ、一部指オサエ。 外面平行タタキ。
95	32	19	N4グリッド ベルト2 6層	須恵器	杯蓋	(13.2)	2.8	つまみ径 (5.0)	(13.4)	少	良	内面：灰色 外面：オリーブ灰色	内面ヨコナデ、中心付近不定方向のナ デ。外面天井部回転ヘラ切り、他回転 ヘラケスリ後ヨコナデ。
96	32	19	N4グリッド ベルト2 1層	須恵器	杯蓋	—	残 1.2	つまみ径 (6.4)	—	多	良	内外面：灰色	内面ヨコナデ。外面回転ヘラ切り後ナ デ。
97	32	19	N3・N4グリッド ベルト1 3a・3b層	須恵器	杯蓋	(6.3)	残 1.7	—	—	少	良	内外面：灰色	内面ヨコナデ後不定方向のナデ。外面 天井部回転ヘラ切り後ナデ、体部回転 ヘラケスリ後一部ナデ。中心付近やや 歪む。
98	32	19	N2グリッド 包含層	須恵器	杯蓋	(14.7)	残 1.5	—	—	多	良	内外面：灰色	内面ヨコナデ。外面ヨコナデ後一部ナ デ、不定方向のナデ。

No.	挿図	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			胎土 (砂粒)	焼成	色調	調整・備考	
						口径 (復元値)	器高	底径 (復元値) つまみ径 2.0					
99	32	19	G4グリッド 包含層	須恵器	杯蓋	—	残10	—	少	良	内外面: 灰色	内面ヨコナデ後一部ナデ。外面回転ヘラケズリか。	
100	32	19	N4グリッド ベルト2東側包含 層	須恵器	杯身	(13.9)	4.6	(8.4)	—	多	良	内外面: 灰白色	内面ヨコナデ後ナデ、中心付近ヨコナ デ後不定方向のナデ、焼成時の灰付着。 外面ヨコナデ、自然釉がかかる。底部 回転ヘラ切り。
101	32	19	N3グリッド 包含層下層	須恵器	杯身	(11.5)	5.0	(7.6)	—	少	良	内面: 灰白色 外面: 灰白色~オリーブ黒 色	内外面ヨコナデ。底部回転ヘラ切り後 ナデ。畳付に線状圧痕。
102	32	19	N3・N4グリッド ベルト1 3a・3b層	須恵器	杯身	(13.1)	3.9	(9.5)	—	多	良	内面: 灰色 外面: にぶい褐色~灰色	中心付近不定方向のナデ。内外面ヨコ ナデ。底部回転糸切り後一部ナデ。内 面体部にヘラ記号。
103	32	19	N3グリッド 包含層下層	須恵器	杯身	(12.6)	残3.7	—	—	少	良	内面: 灰色 外面: 暗灰色	内外面ヨコナデ
104	32	19	O4グリッド 包含層	須恵器	杯身	—	残2.8	(10.8)	—	少	良	内外面: 灰白色	中心付近不定方向のナデ。内外面ヨコ ナデ。
105	32	19	N3・O3グリッド 包含層	須恵器	杯身	—	残1.5	(9.8)	—	少	良	内外面: 灰白色	内面不定方向のナデ。外面ヨコナデ。 底部回転ヘラ切り。内外面に一部炭付 着。
106	32	19	G4グリッド 包含層	須恵器	杯身	—	残1.2	(10.7)	—	少	良	内外面: 灰色	中心付近不定方向のナデ。内外面ヨコ ナデ。底部回転ヘラ切り後不定方向の ナデ。
107	32	19	N3・N4グリッド 包含層下層	須恵器	杯身	—	残2.5	(7.5)	—	多	良	内面: 灰色 外面: 灰色~灰白色	内外面ヨコナデ。底部回転ヘラ切り後 ヨコナデ。
108	32	19	N3グリッド 包含層	須恵器	杯身	—	残1.8	(9.2)	—	多	良	内面: 灰白色 外面: 灰色	中心付近不定方向のナデ、内面ヨコナ デ。外面回転ヘラケズリ後ヨコナデ。 底部回転糸切り後ナデ。
109	32	19	N4グリッド ベルト2 6層	須恵器	杯身	—	残2.0	—	—	多	良	内外面: 褐灰色	内外面ヨコナデ。
110	32	19	N3グリッド 包含層下層	須恵器	杯身	—	残3.4	(7.4)	—	多	良	内面: 灰色 外面: 灰白色~暗灰色~に ぶい橙色	中心付近ヨコナデ後直線ナデ、内面ヨ コナデ。外面ヨコナデ後一部ナデ。底 部回転ヘラ切り、高台付近回転ヘラ切 り後ヨコナデ。
111	32	19	O4グリッド 包含層	須恵器	杯身	—	残2.1	(7.0)	—	多	良	内外面: 灰色	中心付近不定方向のナデ、内面ヨコナ デ。外面体部下位回転ヘラケズリ後ヨ コナデ、他ヨコナデ。底部回転ヘラ切 り後ナデ。
112	32	20	N4グリッド ベルト2東側包含層	須恵器	杯身	—	残2.6	(7.9)	—	多	良	内外面: 灰色	内外面ヨコナデ。底部ナデ。
113	32	19	N3・N4グリッド ベルト1 2a・2b層	須恵器	杯身	—	残1.3	(7.0)	—	少	良	内外面: 灰色	内面ヨコナデ一部ナデ。外面ヨコナデ。 底部回転ヘラ切り後ナデ。
114	32	20	N3グリッド 包含層下層	須恵器	杯	—	残2.3	(4.3)	—	少	良	内外面: 灰白色	内面ヨコナデ。外面体部下位ヨコナデ 後ナデ、他ヨコナデ。底部回転ヘラ切 り。外面体部~底部に火だすき状の線 が2本
115	32	20	N4グリッド ベルト2東側包含層	須恵器	杯	—	残0.8	(7.6)	—	多	良	内外面: オリーブ灰色	内外面ヨコナデ。底部回転ヘラ切り。
116	32	20	N3・N4グリッド ベルト1 1層	須恵器	壺	—	残3.7	(6.6)	—	多	良	内面: 灰白色 外面: 灰白色~灰色	内面ヨコナデ。外面体部下位回転ヘラ ケズリ、他ヨコナデ。底部ナデ。中心 付近に焼き膨れ。全体に発泡あり。
117	32	20	N3グリッド 包含層	須恵器	製塩(焼 塩)土器 か	—	残3.7	—	—	少	良	内面: にぶい黄橙色 外面: 青灰色	内面布目痕。外面ナデ、指オサエ。
118	32	20	N2グリッド 包含層	須恵器	こね鉢か	—	残2.1	(8.6)	—	多	良	内面: 暗灰色 外面: 灰色~暗灰色	内面不定方向のナデ。外面回転ヘラケ ズリ後一部ナデ。底部回転ヘラ切り後 一部不定方向のナデ。
119	32	20	N4グリッド 包含層下層	須恵器	壺	—	残3.0	7.1	—	多	良	内外面: 灰白色	中心付近ヨコナデ後直線ナデ。内外面 ヨコナデ。底部回転糸切り後ナデ。
120	32	20	N2グリッド 包含層	須恵器	甕	—	残4.5	—	—	多	良	内面: オリーブ灰色 外面: 灰色	内面ヨコナデ。外面ヨコナデ後波状文、 カキメ。
121	32	20	N3・N4グリッド ベルト1 3a・3b層	須恵器	甕	頸部径 (23.0)	残2.7	—	—	多	良	内外面: 灰色	内外面頸部ヨコナデ。内面肩部同心円 文当て具痕。外面肩部擬椀字タタキ。
122	32	20	N3グリッド 包含層下層	須恵器	壺	—	残5.8	—	(25.0)	多	良	内面: にぶい黄色 外面: 灰色	内面ヨコナデ。外面回転ヘラケズリ後 ヨコナデ。
123	32	20	N4グリッド ベルト2西側包含層	須恵器	杯か皿	—	残0.6	—	—	少	良	内外面: 灰白色	内面直線ナデ~ヨコナデ。外面回転ヘ ラ切り後ヨコナデ~ナデ。内外面に墨 書。
124	32	20	N3・N4グリッド ベルト1 1層	須恵器	杯か	—	残1.4	—	—	少	良	内面: 灰白色 外面: 灰色	内面不定方向のナデ。外面回転ヘラ切 り後ナデ、ヨコナデ。内面に墨書。
125	32	20	N4グリッド ベルト2東側包含層	須恵器	杯か	—	残1.1	—	—	少	良	内面: 灰白色 外面: 灰色	内面ヨコナデ。外面回転ヘラケズリ後 不定方向のナデ。底部不定方向のナデ。 内面に墨書。
126	32	20	N4グリッド ベルト2東側包含層	土師器	碗	—	残1.7	(6.0)	—	多	やや良	内面: にぶい黄橙色 外面: 明黄褐色	中心付近不定方向のナデ。内外面回転 ナデ。貼付高台。一部黒褐色化。
127	32	20	O4グリッド 包含層	緑釉陶器	碗か皿	—	残2.4	—	—	少	良	胎土: 浅黄褐色 釉薬: 明黄緑色	内外面回転ナデ後施釉。ミガキ・ケズ リなし。剥離著しい。長門産。
128	33	20	N4グリッド 包含層上層	青磁	碗	—	残3.7	—	—	—	良	胎土: 灰白色 釉薬: オリーブ灰色	内外面ロクロナデ後施釉。外面連弁文 様。龍泉窯系。
129	33	20	N4グリッド ベルト1東側包含層	青磁	碗	—	残1.6	—	—	—	やや良	胎土: 灰白色 釉薬: オリーブ黄色	内外面ロクロナデ後施釉。外面連弁文 様。貫入多い。龍泉窯系。
130	33	20	N4グリッド 包含層	白磁	皿	—	残1.7	—	—	—	良	胎土: 灰白色 釉薬: 灰白色	内面ロクロナデ後施釉、刻花文。外面 体部上位ロクロナデ、他回転ヘラケズ リ。外面は全面施釉の後底部のみ釉薬 削り取り。福建省産。
131	33	20	東端遺構検出	白磁	碗	—	残2.5	—	—	—	良	胎土: 灰白色 釉薬: 灰白色	内面ロクロナデ後施釉。外面回転ヘラ ケズリ後施釉。胎土に少量の黒斑。福 建省産。
132	33	20	N4グリッド ベルト1包含層中 層~下層	白磁	碗	—	残2.1	—	—	—	良	胎土: 灰白色 釉薬: 灰白色	内外面ロクロナデ後施釉。貫入多い。 福建省産。
133	33	20	L4グリッド 包含層	白磁	鉢	—	残2.8	—	—	—	良	胎土: 淡黄色 釉薬: 灰白色	内外面ロクロナデ後全面施釉。口縁部 口剥げ。

No.	挿図	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				胎土 (砂粒)	焼成	色調	調整・備考
						口径 (復元値)	器高	底径 (復元値)	最大径 (復元値)				
134	33	20	O3グリッド 包含層	青磁	椀	—	残 2.6	5.7	—	少	良	胎土: 灰白色 釉薬: オリーブ黄色	内外面ロクロナデ後施釉。削り出し高台。高台登付～高台内露胎。高台外端を斜めに面取り。外面蓮弁文様。龍泉窯系。
135	33	20	O3グリッド 包含層	白磁	椀	—	残 3.0	(5.6)	—	—	良	胎土: 灰白色 釉薬: 灰白色	内面ロクロナデ後施釉。外面ロクロケズリ後施釉。削り出し高台。高台～高台内露胎。福建省産。
136	33	21	N4グリッド 包含層上層	青磁	椀	—	残 1.6	—	—	—	良	胎土: 灰白色 釉薬: 明オリーブ灰	内外面ロクロナデ後施釉。削り出し高台。高台裏のみ露胎。龍泉窯系。
137	33	21	J5グリッド 包含層	白磁	皿	—	残 0.9	(5.4)	—	—	良	胎土: 灰白色 釉薬: 灰白色	内外面ロクロナデ後施釉。底部回転ヘラケズリ。福建省産。
138	33	21	M4・N4グリッド 検出	土師器	杯	—	残 1.7	(5.8)	—	少	やや良	内外面: 橙色	内外面回転ナデ。底部剥離のため不明。
139	33	21	L4グリッド検出	土師器	杯	—	残 1.7	6.8	—	多	やや良	内外面: 明黄褐色	内外面回転ナデ。底部回転糸切り。淡黄色粘土が混じる。
140	33	21	N4グリッド 包含層上層	土師質 土器	鍋	(28.0)	残 3.5	—	—	多	良	内面: にぶい黄褐色 外面: 灰黄褐色	内外面ヨコナデ。外面スス付着。摩擦のため不明。
141	33	21	N4グリッド 包含層上層	土師質 土器	鍋	(32.0)	残 4.3	—	(32.4)	多	良	内面: 橙色 外面: 灰褐色	内面ヨコハケ、コゲ付着。外面タテハケ後ナデ、指オサエ、スス付着。
142	33	21	N4グリッド 包含層中層	土師質 土器	鍋	(34.3)	残 5.2	—	(35.0)	多	良	内面: にぶい褐色～褐灰色 外面: にぶい橙色～褐灰色	内面ヨコハケ、コゲ付着。外面タテハケ後ナデ、指オサエ、スス付着。
143	33	21	N4グリッド 包含層中層	瓦質土器	鍋	—	残 4.2	—	—	少	良	内面: 灰白色 外面: 灰白色～黄灰色	内面ヨコナデ後ナデ。外面ヨコナデ。
144	33	21	N4グリッド 包含層中層	土師質 土器	鍋	—	残 4.9	—	—	多	良	内外面: 浅黄褐色～橙色	外面指オサエ、粘土粒が付着。摩擦のため不明。
145	33	21	N4グリッド 包含層	土師質 土器	鍋	—	残 2.6	—	—	多	やや良	内面: 淡黄色 外面: にぶい黄褐色	内面ヨコハケ。外面剥離のため不明
146	33	21	N4グリッド 包含層上層	土師質 土器	鍋	—	残 5.4	—	—	多	良	内外面: 灰黄褐色	内面摩擦のため不明。外面ヨコハケ後ナデ、指オサエ、スス付着。
147	33	21	N3グリッド 包含層	土師質 土器	鍋	—	残 4.8	—	—	少	良	内外面: 淡黄色	内面ヨコハケ。外面斜め方向のハケ後ヨコハケ、一部ナデ。
148	33	21	N4グリッド 包含層上層	土師質 土器	足鍋脚部	—	残 9.7	—	—	多	良	灰白色	縦方向にヘラケズリ。摩擦著しい。
149	33	21	N4グリッド 包含層中層	土師質 土器	足鍋脚部	—	残 6.2	—	—	多	良	橙色～浅黄褐色	ヘラケズリ後一部ナデか。摩擦著しい。
150	33	22	N4グリッド 包含層上層	青磁	合子	—	残 1.1	—	—	—	良	胎土: 灰白色 釉薬: 明オリーブ灰	内面ロクロナデ後施釉。外面体部上位回転ヘラケズリ後施釉後削り取り、体部下位菊花に成型後上半施釉。南方系。
151	33	22	N4グリッド ベルト 2 層	陶器	小壺	(7.0)	残 2.7	—	(9.2)	—	良	胎土: 灰白色 釉薬: 浅黄色	内面ロクロケズリ後施釉か。外面上端ロクロナデ露胎、体部ロクロナデ後施釉。
152	33	22	L3グリッド検出	陶器	皿	—	残 1.7	5.0	—	—	良	胎土: 浅黄色 釉薬: 暗青灰色	内面ロクロナデ後施釉、蛇の目軸剥ぎ、外面回転ヘラケズリ露胎。削り出し高台。肥前。
153	33	22	N4グリッド 包含層上層	陶器	椀	—	残 2.4	(4.6)	—	—	良	胎土: 淡黄色 釉薬: 淡黄色	内面ロクロナデ後施釉、外面体部ロクロナデ後施釉、底部付近回転ヘラケズリ後施釉。削り出し高台。登付以外施釉。肥前か。
154	33	22	N4グリッド 包含層中層	陶器	瓶	—	残 6.2	(8.0)	(13.0)	多	良	内外面: 橙色	内面ロクロナデ。外面胴上部回転ヘラケズリ、胴下部静止ヘラケズリ。底部ナデ。外面に黒斑。
157	33	22	N3グリッド 包含層下層	土製品	羽口	最大長 3.3	最大幅 5.7	最大厚 2.2	—	多	良	内面: 浅黄褐色 外面: 浅黄色	内面ナデか。外面ヘラケズリ後一部指オサエ。胎土にスサを含む。外面に黒斑。
159	34	22	排土中	陶器	鉢か	—	残 2.6	—	—	—	良	胎土: 灰色 釉薬: にぶい黄色	内外面ロクロナデ後施釉。肥前か。
160	34	22	排土中	土師質 土器	播鉢	—	残 4.3	—	—	多	良	内外面: 灰白色～淡赤褐色	内面ヨコハケ後ナデか。外面タテハケ後ナデ、指オサエ。

鉄製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				重さ (g)	備考
						長さ	幅	厚さ	器高		
27	27	14	柱列 4 (SP221埋土)	鉄製品	鑿か	6.85	0.8	0.3	—	10.1	
69	30	17	SP248埋土	鉄製品	鍋か	口径 (25.2)	底径 —	最大径 —	残 2.4	28.3	
155	33	22	N3グリッド 包含層下層	鉄製品	鉄鋌か	残 9.6	3.2	1.2	—	111.2	No.156と同一個体、2個体分が錆着か
156	33	22	N3グリッド 包含層下層	鉄製品	鉄鋌か	残 11.1	3.0	1.3	—	220	No.155と同一個体、2個体分が錆着か

石器・石製品観察一覧表

※「()」は復元値、「残」は残存値

No.	挿 図	図 版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				重さ (g)	色調	調整・備考
						長さ	幅	厚さ	器高			
36	28	14	SK07	石製品	鍋	口径 (22.4)	底径 (13.8)	最大径 (23.2)	8.7	280	内外面: 黄灰色	山口県宇部市下請川南遺跡産滑石製。内面細かい横方向のノミ後丁寧なミガキ。外面粗い横方向のノミ後ミガキ。外面底部は雑な調整。外面胴部～底部にかけてスス付着。
40	28	14	SK07埋土・集石中	石器	剥片石器 か削器	3.8	4.8	0.6	—	8.7	内外面: 灰色	玄武岩製。腹面は3回剥離する。背面の一側面を剥離し、刃部として作り出した可能性がある。
41	28	14	SK07(集石除去後)東側埋土	石器	剥片鏃	2.6	1.75	0.25	—	1.1	内外面: 暗灰色	玄武岩製。平基式。腹面側から剥離するが、右側側縁は斜めに剥離したのみで、背面側に加工痕が認められない。左側側縁はやや細かく調整するが、剥離時の面を活かす。基部は一部のみ調整する。
53	29	15	SK06	石製品	鍋	口径 (25.5)	底径 —	最大径 (28.8)	残 9.6	220	内面: 灰色 外面: 灰黄褐色	長崎県西海市ホゲット遺跡産滑石製。内面斜め方向のノミ。外面縦・横方向のノミ。今回出土の石鍋のなかでは一番調整が粗くノミ痕が明瞭に残る。
58	29	16	SK06	石製品	石碑・墓標か	17.1	18.9	7.4	—	3980	内面: 褐色 外面: にぶい橙色	閃緑岩製。表面は平坦に加工し、右側面は面取りする。裏面は面を整える。裏面に台形状の影り込み。
83	31	18	G5グリッド 包含層	石器	打製石鏃	2.6	2.1	0.4	—	1.5	内外面: 黒色	玄武岩製。無茎凹基式。表面は基部、右側縁、左側縁の順で剥離により大きく3面をつくり出し、各面を細かく調整加工する。裏面は全体を剥離後、両側縁と基部および脚部のみ調整し、刃部と基部をつくる。
84	31	18	G5グリッド 包含層	石器	剥片石器	2.1	2.6	0.3	—	1.5	内外面: 黒色	佐賀県腰岳産黒曜石製。素材剥離後、腹面の右側および背面の左側を調整し、刃部をつくり出す。削器などの未完成品の可能性がある。
85	31	18	J5グリッド 包含層	石器	磨製石斧	4.2	4.3	1.5	—	36.5	内外面: 灰色	玄武岩製。磨製石斧の再加工品。腹面側の右半分は石斧破損後に打ち割ったと考える。上側は使用時または意図的に破損し、両側縁の対称する各2か所の打ち欠きし、再利用したと考える。下側は刃部で使用痕あり。
86	31	18	L4グリッド 遺構検出	石器	剥片石器 か削器	2.9	2.3	0.5	—	3.5	内外面: 灰色	玄武岩製。下側は刃部状に薄く作りだすが細かく敲打していない。上側は細かく打ち砕いている。
87	31	18	N2・N3グリッド 造成土	石器	剥片石器	3.0	4.3	0.65	—	8.2	内外面: 灰色	玄武岩製。リングとフィッシャーが凹凸になるため強い打撃が加えられたと考えられる。一次的な剥離のみで、二次加工痕なし。
158	34	22	表探	石製品	鍋	口径 (26.6)	底径 —	最大径 (28.0)	残 6.0	240	内面: 黄灰色 外面: 黄褐色	長崎県西海市ホゲット遺跡産滑石製。内面縦・横方向にノミ後丁寧なミガキ。外面縦・斜め方向にノミ後ミガキ。全体的に丁寧な調整。

参考文献

(土師器)

古賀信幸2004「土師器」『山口県史 資料編 考古2』山口県

小南裕一2004「長門地域の中世土師器編年試案」『上太田遺跡・市の瀬遺跡・南ヶ畑遺跡』山口県埋蔵文化財センター
調査報告書第45集・山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第31集 山口県埋蔵文化財センター・豊北町教育委員会

(須恵器)

池田善文2004「須恵器」『山口県史 資料編 考古2』山口県

(土師質土器・瓦質土器)

池田義文2004「岡の台遺跡」『美東町史 資料編』美東町

岩崎仁志1990「防長型播鉢について」『山口考古』第19号 山口考古学会

岩崎仁志1999「足鍋再考」『陶垣』第12号 山口県埋蔵文化財センター

岩崎仁志2007「山陽西部における中世の土製煮炊具一周防・長門を中心に」『中近世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会

白石純・東山信治2008「沖手遺跡出土瓦質土器の胎土分析」『沖手遺跡・専光寺脇遺跡—中世の大規模集落遺跡と弥生時代の墳丘墓— 一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター

(滑石製石鍋)

木戸雅寿1995「13. 石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

(陶磁器)

九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』

太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集

V 自然科学分析

(株) 加速器分析研究所

はじめに

下村遺跡B地区は、山口県美祢市伊佐町字伊佐に所在し、厚狭川左岸の河岸段丘上に立地する。この遺跡から採取された試料の自然科学分析として、炭化材等のAMS法による放射性炭素年代測定(1)、炭化材の樹種同定(2)、土壌サンプルのリン酸分析と全炭素・全カルシウム分析(3)、土壌サンプルの花粉分析および微細遺物の洗い出し・分類・同定(4)、滑石製品の化学組成分析(5)を実施した。以下、分析方法や結果について分析項目別に報告する。

1 炭化材等のAMS法による放射性炭素年代測定

(1) 試料

測定対象試料は、柱穴や土坑から出土した炭化材、炭化物の合計10点である(第6表)。なお、同じSK26から出土した炭化材3点の樹種同定が実施されており、それらのうち樹種同定試料1(炭1)は年代測定試料8(炭1)と同一個体である(「樹種同定結果については「2」参照)。

SP138、SP140、SP237、SP238は柱穴で、SP138とSP140は掘立柱建物跡SB02を構成する。SK25、SK05、SK06、SK26は土坑で、SK05、SK06は集石土坑、SK26は製炭土坑とされる。これらの遺構の時期については、SP138、SP140、SP237、SP238、SK05、SK06が出土土器から大内0式併行(14世紀前半～後半、北島2010)、SK25が周辺遺構との関係から14世紀頃、SK26が出土土器から奈良時代末～平安時代初頭(9世紀頃)と考えられている。

(2) 化学処理工程

- ① メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- ② 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/ℓ(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第6表に記載する。
- ③ 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- ④ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤ 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- ⑥ グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(3) 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(4) 算出方法

- ① $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第6表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ② ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第6表に、補正していない値を参考値として第7表に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- ③ pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい（¹⁴Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第6表に、補正していない値を参考値として第7表に示した。
- ④ 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第6表に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

(5) 測定結果

測定結果を第6表、第7表に示す。

推定される年代が14世紀頃の試料1～7と、9世紀頃の試料8～10に分けて検討する。

試料1～7の¹⁴C年代は、 $920 \pm 30\text{yrBP}$ （試料5）から $560 \pm 20\text{yrBP}$ （試料2）の間にある。暦年較正年代（ 1σ ）は、最も古い試料5が1045～1156cal ADの間に3つの範囲、最も新しい試料2が

1325~1413cal ADの間に2つの範囲で示される。試料1と2が出土した2基の柱穴は、同じ掘立柱建物跡を構成するとされ、試料の年代値も重なる範囲がある。推定される年代に対して、試料1、2は一致するが、試料3、4、7は若干古く、試料5、6はかなり古い値を示した。

試料8~10の¹⁴C年代は、1000±20yrBP（試料9）から910±20yrBP（試料10）の間にある。暦年較正年代（1σ）は、最も古い試料9が997~1116calADの間に3つの範囲、最も新しい試料10が1046~1164calADの間に3つの範囲で示される。1σ暦年代範囲では試料8、10の2点と試料9の間で年代値が重ならないが、2σで見ると11世紀半ばから12世紀半ば頃に3点とも重なる範囲がある、ただし、いずれも推定される年代に対して新しい。

炭化材試料には、すべて樹皮が認められないことから、試料となった木が実際に伐採された、もしくは枯死した年代は、ここで示された年代値よりも新しいと考えられる。今回測定された試料の中で、試料3~7が推定より古い年代を示したことについては、この「古木効果」が一つの要因である可能性がある。他方、出土土器に基づく推定より新しい年代を示した試料8~10の測定結果については、土坑の構築、埋没過程や遺物の出土状況等と合わせて検討する必要がある。

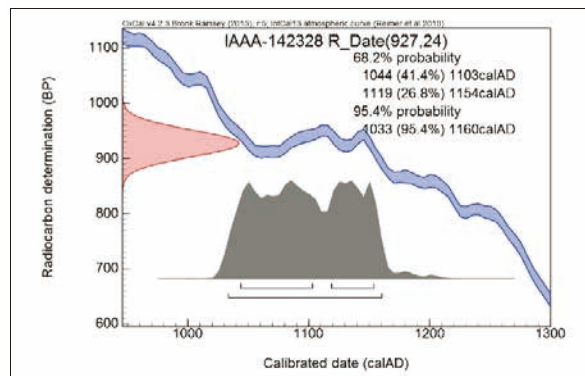
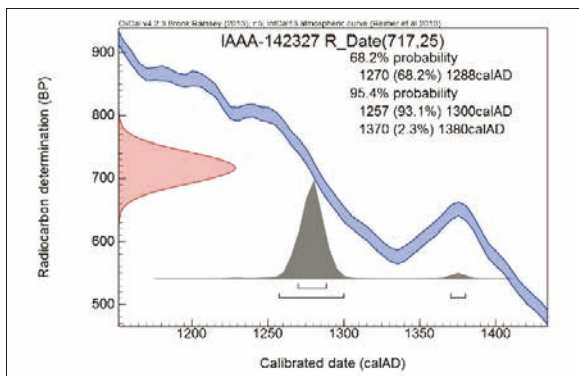
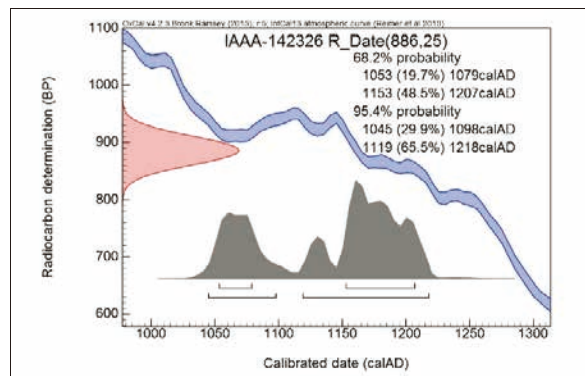
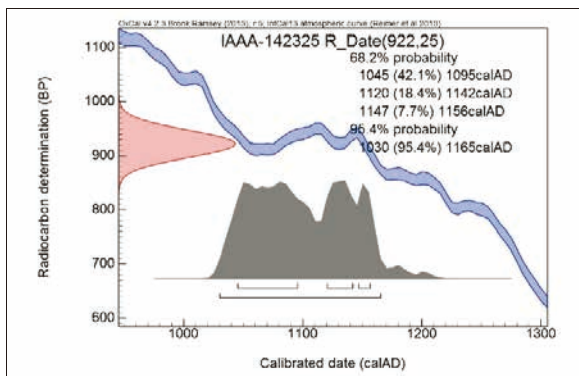
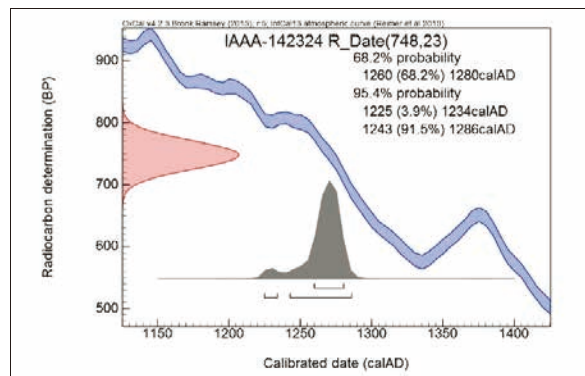
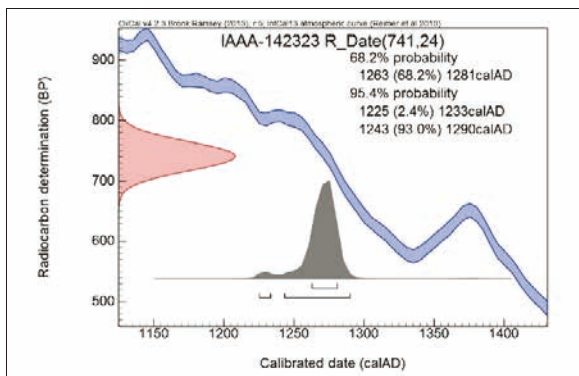
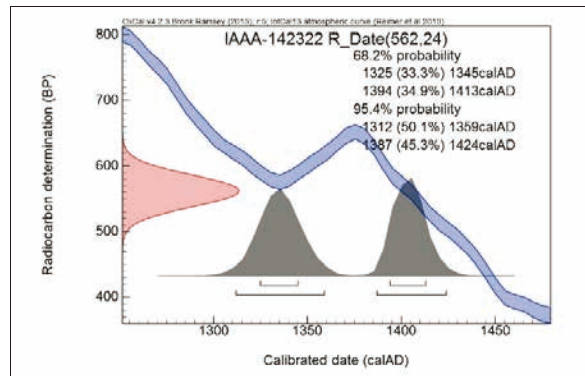
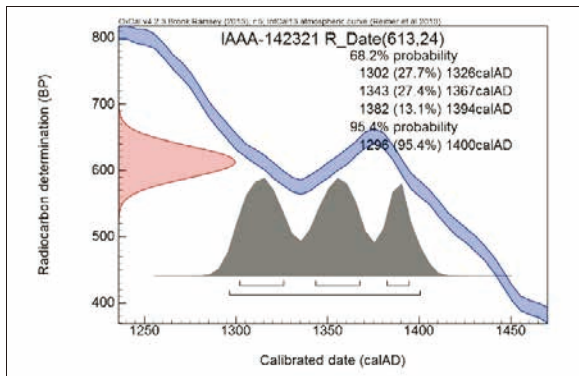
試料5を除く炭化材9点の炭素含有率は、すべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。試料5については、土に含まれる炭化物と見られる微細な黒色物を集めて試料としたが、土を完全に除去できなかったことが観察されている。炭素含有率は16%という炭化物としては低い値で、測定された炭素の由来に若干注意を要する。

第6表 放射性炭素年代測定結果(δ¹³C補正值)

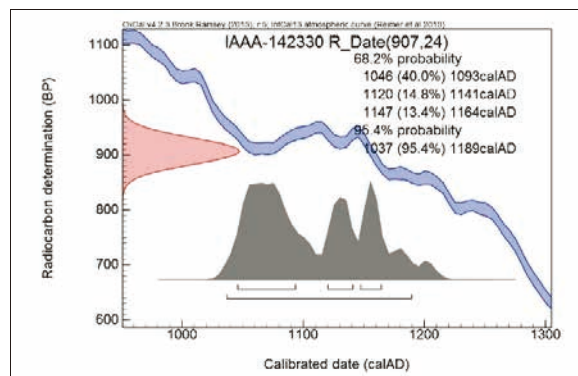
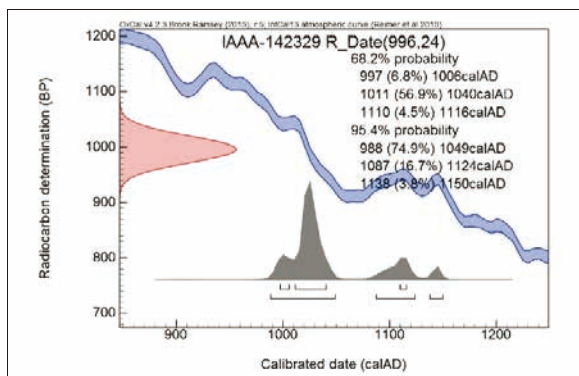
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹³ C(‰) (AMS)	δ ¹³ C補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC(%)
IAAA-142321	試料1	SP138 柱痕埋土	炭化材	AAA	- 26.91 ± 0.48	610 ± 20	92.65 ± 0.28
IAAA-142322	試料2	SP140 埋土	炭化材	AAA	- 22.79 ± 0.48	560 ± 20	93.24 ± 0.28
IAAA-142323	試料3	SP237 柱痕埋土	炭化材	AaA	- 24.95 ± 0.32	740 ± 20	91.18 ± 0.28
IAAA-142324	試料4	SP238 埋土	炭化材	AAA	- 26.44 ± 0.6	750 ± 20	91.1 ± 0.27
IAAA-142325	試料5	SK25 埋土	炭化物	AaA	- 23.71 ± 0.49	920 ± 30	89.15 ± 0.28
IAAA-142326	試料6	SK05 西側埋土	炭化材	AAA	- 29.6 ± 0.47	890 ± 30	89.56 ± 0.28
IAAA-142327	試料7	SK06 埋土	炭化材	AAA	- 24.7 ± 0.45	720 ± 30	91.45 ± 0.29
IAAA-142328	試料8	SK26 床面(炭1)	炭化材	AAA	- 23.75 ± 0.34	930 ± 20	89.09 ± 0.27
IAAA-142329	試料9	SK26 床面(炭3)	炭化材	AAA	- 26.16 ± 0.35	1,000 ± 20	88.34 ± 0.27
IAAA-142330	試料10	SK26 床面(炭5)	炭化材	AAA	- 27.17 ± 0.31	910 ± 20	89.31 ± 0.27

第7表 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-142321	650 ± 20	92.28 ± 0.26	613 ± 24	1302calAD-1326calAD (27.7%) 1343calAD-1367calAD (27.4%) 1382calAD-1394calAD (13.1%)	1296calAD-1400calAD (95.4%)
IAAA-142322	530 ± 20	93.67 ± 0.26	562 ± 24	1325calAD-1345calAD (33.3%) 1394calAD-1413calAD (34.9%)	1312calAD-1359calAD (50.1%) 1387calAD-1424calAD (45.3%)
IAAA-142323	740 ± 20	91.19 ± 0.27	741 ± 24	1263calAD-1281calAD (68.2%)	1225calAD-1233calAD (2.4%) 1243calAD-1290calAD (93.0%)
IAAA-142324	770 ± 20	90.83 ± 0.25	748 ± 23	1260calAD-1280calAD (68.2%)	1225calAD-1234calAD (3.9%) 1243calAD-1286calAD (91.5%)
IAAA-142325	900 ± 20	89.39 ± 0.27	922 ± 25	1045calAD-1095calAD (42.1%) 1120calAD-1142calAD (18.4%) 1147calAD-1156calAD (7.7%)	1030calAD-1165calAD (95.4%)
IAAA-142326	960 ± 20	88.71 ± 0.26	886 ± 25	1053calAD-1079calAD (19.7%) 1153calAD-1207calAD (48.5%)	1045calAD-1098calAD (29.9%) 1119calAD-1218calAD (65.5%)
IAAA-142327	710 ± 20	91.51 ± 0.28	717 ± 25	1270calAD-1288calAD (68.2%)	1257calAD-1300calAD (93.1%) 1370calAD-1380calAD (2.3%)
IAAA-142328	910 ± 20	89.32 ± 0.27	927 ± 24	1044calAD-1103calAD (41.4%) 1119calAD-1154calAD (26.8%)	1033calAD-1160calAD (95.4%)
IAAA-142329	1,020 ± 20	88.13 ± 0.27	996 ± 24	997calAD-1006calAD (6.8%) 1011calAD-1040calAD (56.9%) 1110calAD-1116calAD (4.5%)	988calAD-1049calAD (74.9%) 1087calAD-1124calAD (16.7%) 1138calAD-1150calAD (3.8%)
IAAA-142330	940 ± 20	88.92 ± 0.26	907 ± 24	1046calAD-1093calAD (40.0%) 1120calAD-1141calAD (14.8%) 1147calAD-1164calAD (13.4%)	1037calAD-1189calAD (95.4%)



第35図ー1 暦年較正年代グラフ①



第35図－2 暦年較正年代グラフ②

2 炭化材の樹種同定

(1) 試料

樹種同定の試料は、N4グリッドSK26の床面直上から出土した炭化材試料1～試料3（炭1、炭2、炭4）の計3点である。なお、同じ土坑から出土した炭化材3点の放射性炭素年代測定が実施されており、それらのうち年代測定試料8（炭1）は樹種同定試料1（炭1）と同一個体である（年代測定結果については「1」参照）。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

(3) 結果

結果を第8表に示す。炭化材は、全て広葉樹で、2分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節・カキノキ属）に同定された。なお、試料2は、土塊の表面に炭化材が薄く付着している状態であり、保存状態が悪い。僅かに観察できる組織からコナラ節やクリの可能性はあるが、確定には至らず、広葉樹とした。以下、同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*）ブナ科

環孔材で、孔圏部は1－2列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1－20細胞高のものと同定複合放射組織とがある。

・カキノキ属 (Diospyros) カキノキ科

散孔材で、管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または2 - 4個が時に年輪界をはさんで複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性、1 - 3細胞幅、10 - 20細胞高で階層状に配列する。

第8表 樹種同定結果

試料	グリッド	遺構	層位	取上番号	状態	種類
試料1	N4	SK26	床面直上	炭1	分割状	カキノキ属
試料2	N4	SK26	床面直上	炭2	土塊に薄く付着	広葉樹
試料3	N4	SK26	床面直上	炭4	板目状	コナラ属コナラ亜属コナラ節

(4) 考察

SK26は製炭土坑として捉えられ、時期は出土土器より奈良時代末～平安時代初頭（9世紀頃）と考えられている。ただし、この土坑から出土した炭化材3点の年代測定では、11世紀から12世紀半ば頃の年代値が示されていることから、時期については検討を要する。

この土坑では、床面上から棒状の炭化材が出土しているが、炭化材の方向に統一性は認められない。同定試料とした炭化材は、土坑内で製炭された木炭と考えられており、樹種同定の結果、コナラ節とカキノキ属の2種類が認められた。この結果から、少なくとも2種類の広葉樹材が土坑内で製炭された可能性がある。

コナラ節は二次林等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度・耐朽性が高く、薪炭材としてはクヌギ節に次ぐ良材とされる。カキノキ属は、本州では山地に生育する常緑小高木のトキワガキと落葉高木のリュウキュウマメガキがあるほか、栽培される落葉高木のカキノキとマメガキがある。いずれも木材は重硬で強度が高い。

製炭方法にもよるが、重硬な木材は一般的に製炭すると、硬く火持ちのする木炭になる。これより、SK26では、火力よりも持続性を目的とした硬い木炭を製炭していた可能性がある。

コナラ節とカキノキ属は、共に本地域に分布することから、周囲の山地・丘陵地等に生育していた可能性がある。なお、カキノキ属については、栽培種も含まれることから、周辺で栽培されていた可能性も想定される。

伊東・山田（2012）のデータベースによれば、山口県内では古代の炭窯出土炭化材や燃料材の木材利用に関する資料が少なく、木材利用状況は不明である。一方、広島県内では、平家ヶ城跡の古代～中世とされる炭窯では、クヌギ節、コナラ節、クマシデ属、クリをそれぞれ単独で製炭した状況が見られる。これらの木炭は、製鉄燃料を製炭するための炭窯と考えられている。

今後、製炭した木炭を用いた生産遺構から出土する炭化材について樹種同定が実施され、資料が蓄積されることで、コナラ節やカキノキ属の木炭がどのような用途に使われたのか、解明が進むことが望まれる。

3 土壌サンプルのリン酸分析と全炭素・全カルシウム分析

(1) 試料

試料は、L4グリッドのSK05西側埋土（試料1）、同じくL4グリッドのSK06埋土（試料2）の計2点である。

(2) 分析方法

全炭素は乾式燃焼法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、全カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法（土壌標準分析・測定法委員会, 1986）に従う。以下に各項目の操作工程を示す。

分析試料の調製は、試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

全炭素含量は、粉碎土試料を0.1000g～1.5000gを石英ボートに秤量し、乾式燃焼法により全炭素含量を測定する。使用装置は、ヤナコ分析工業製CNコーダーである。分析値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量（T-C乾土%）を求める。

全リン酸、全カルシウム含量は、粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO₃）約10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計により、リン酸（P₂O₅）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

(3) 結果

結果を第9表に示す。野外土性（日本ペドロロジー学会編, 1997）は、試料1がLiC（軽埴土）、試料2がHC（重埴土）である。土色は試料1が10YR3/2黒褐、試料2が10YR4/3にぶい黄褐とやや暗色である。

全炭素は試料1で0.78%、試料2で0.88%と低い。全リン酸は試料1で1.97mg/g、試料2で1.38mg/gである。全カルシウムは試料1で3.12mg/g、試料2で2.89mg/gである。各含量ともに低い値である。

第9表 土壌理化学分析結果

試料	グリッド	遺構	層位	土色	土性	全炭素 (%)	全リン酸 P ₂ O ₅ (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)	備考
試料1	L4	SK05	西側埋土	10YR3/2 黒褐	LiC	0.78	1.97	3.12	集石土坑
試料2	L4	SK06	埋土	10YR4/3 にぶい黄褐	HC	0.88	1.38	2.89	集石土坑

1) 土性：土壌調査ハンドブック改訂版(日本ペドロロジー学会編, 1997)の野外土性による。

LiC…軽埴土(粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%)

HC…重埴土(粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%)

2) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。

(4) 考察

集石土坑SK05、SK06は、墓である可能性が指摘されている。そのことから、全炭素、全リン酸、全カルシウムについて分析を実施した。このうちリンは、生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壤中に還元され、土壤有機物や土壤中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成する。特に活性アルミニウムの多い火山灰土壌ではリン酸の固定力が高いため、遺跡での生物起源残留物の痕跡確認などに有効である。ところで、土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があり (Bowen, 1983; Bolt and Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 程度である。また、人為的な影響 (化学肥料の施用など) を受けた黒ボク土の既耕地では $5.5\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ (川崎ほか, 1991) という報告例がある。一方、カルシウムの天然賦存量は普通 $1\sim 50\text{mg/g}$ (藤貫, 1979) といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壤中に固定され難い性質による。これら天然賦存量は、遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが、天然賦存量以下だから遺体埋納が完全に否定されるものでもない。遺体が土壤中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるからである。

今回の調査では、両試料においてリン酸の天然賦存量である 3.0mg/g 、カルシウムの天然賦存量である 50mg/g を超える値ではない。この結果から、各土坑が墓として利用されたことを積極的に肯定することはできない。ただし、試料間の比較をすると、SK05 (試料1) ではSK06 (試料2) より、炭素量に比べリン酸が多いことがわかる。これより、SK05では植物遺体以外の影響によるリン酸の富化が示唆されるとも考えられるが、カルシウムの値に変化がないことから、今回の分析結果のみからはリン酸の由来について判断できない。

以上から、今回の分析結果は集石土坑であるSK05、SK06が墓であった可能性を肯定するには至らない。今後、地山などの比較試料を交えて再分析することや、周辺で分析事例を蓄積することにより再検証することが望まれる。

4 土壤サンプルの花粉分析および微細遺物の洗い出し・分類・同定 (微細物分析)

(1) 試料

試料は、H6グリッドのSK20埋土12層 (試料1) の1点である。

(2) 分析方法

① 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛, 比重2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鈳物質の除去、アセトリシス (無水酢酸9 : 濃硫酸1の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグ

リセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

② 微細物分析

試料200ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別に常温乾燥後、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実や炭化材（主に径4mm以上）などの遺物をピンセットで抽出する。

分析後は、抽出物と分析残渣の重量を量り、容器に入れて保管する。

(3) 結果

① 花粉分析

SK20の埋土12層（試料1）からは、花粉化石・シダ類胞子は1個体も検出されなかった。なお、分析残渣も痕跡程度しか残らず、プレパラート中にわずかに微細な炭化植物片（いわゆる微粒炭）が確認されたにとどまる（第37図-3）。

② 微細物分析

SK20の埋土12層（試料1）について、試料200cc（330g）を洗い出したが、炭化材が微量検出されるのみであった。そこで、残りの試料ほぼ全量300cc（489g）を追加し、可能な限りの種実の検出を試みた。

結果、試料合計500cc（819g）からは、種実はまったく検出されなかった。炭化材は0.01g検出され、最大2.5mmを測る。分析残渣は土粒を主体とし、20.3gを量る。

(4) 考察

発掘調査時の所見から貯蔵穴と推測されたSK20の埋土12層（試料1）からは、花粉化石、種実遺体などの植物化石は、全く検出されなかった。花粉化石やシダ類胞子などは、堆積した場所が常に酸化状態にあるような場合、酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など）。調査断面をみると、埋土12層は土坑底面～下部のいわゆる床面直上の位置に堆積しており、貯蔵穴が使われていた時期に最も近い埋積物の可能性がある。河岸段丘上という立地を考慮すると、土坑内の滞水は考えにくく、また、土坑内に地下水の影響があったことも考えにくい。よって、貯蔵穴として利用されていた当時のSK20内は、極めて好気的環境であったと推測され、花粉やシダ類胞子が分解・消失したと考えられる。一方種実遺体も、炭化していない状態では土壤中に残りにくいことから、好気的環境下で分解・消失した可能性がある。

5 滑石製品の化学組成分析（蛍光X線分析）

(1) 試料

試料は滑石製石鍋で、試料1～試料3の計3点である。試料1は表土除去時に採集されたもの、試料2はL4グリッドのSK06より、試料3はL4グリッドのSK07より、それぞれ出土したものである。

(2) 分析方法

主要化学組成は、ガラスビードを作製し、蛍光X線装置により測定した。測定用のプログラムは、定量アプリケーションプログラムのFP定量法を使用し、SiO₂、TiO₂、Al₂O₃、T-Fe₂O₃、MnO、MgO、CaO、Na₂O、K₂OおよびP₂O₅の主要10元素について定量分析を実施する。なお、標準試料には独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学標準試料（JA-1、JA-2、JA-3、JB-1a、JB-2、JB-3、JCh-1、JF-1、JF-2、JG-1a、JG-2、JG-3、JGb-1、JGb-2、JH-1、JLk-1、JR-1、JR-2、JR-3、JSd-1、JSd-2、JSd-3、JSl-1、JSl-2、JSy-1）を用いる。

装置は、(株)リガク製 走査型蛍光X線分析装置 ZSX Primus III + (FP定量法アプリケーション)を用いる。

試料作製は、空気乾燥した試料を、振動ミル（CMT製TI-100;10ml容タングステンカーバイト容器）で粉碎・混合し、ガラスビードを以下の条件で作製する。

溶融装置；リガク製卓上型高周波ビードサンプラ（3091A001）

融剤及び希釈率；融剤（Li₂B₄O₇）5.000 g：試料0.500 g

剥離剤；LiI

溶融温度；1200℃, 600sec

上記作成したガラスビードを専用ホルダーにセットし、走査型蛍光X線分析装置を用い、以下の条件で測定を実施する。

X線管；Rh（50kV-50mA）

スペクトル；全元素K α

分光結晶；LiF, PET, RX25, Ge

検出器；F-PC, SC

(3) 結果

結果を第10表、第36図に示す。なお、比較のため、滑石製石鍋の主要な産地とされる長崎県西海市のホゲット遺跡、および山口県宇部市下請川南遺跡の化学組成データ（今岡ほか, 2006）も併せて表示する。

全鉄は3価として計算し、表中にT-Fe₂O₃として掲載した。化学組成は、いずれの試料もSiO₂が60%前後であり、28%前後のMgOを含む。SiO₂およびMgOが主要成分となっており、主要構成鉱物である滑石の化学組成に類似していると言える。

(4) 考察

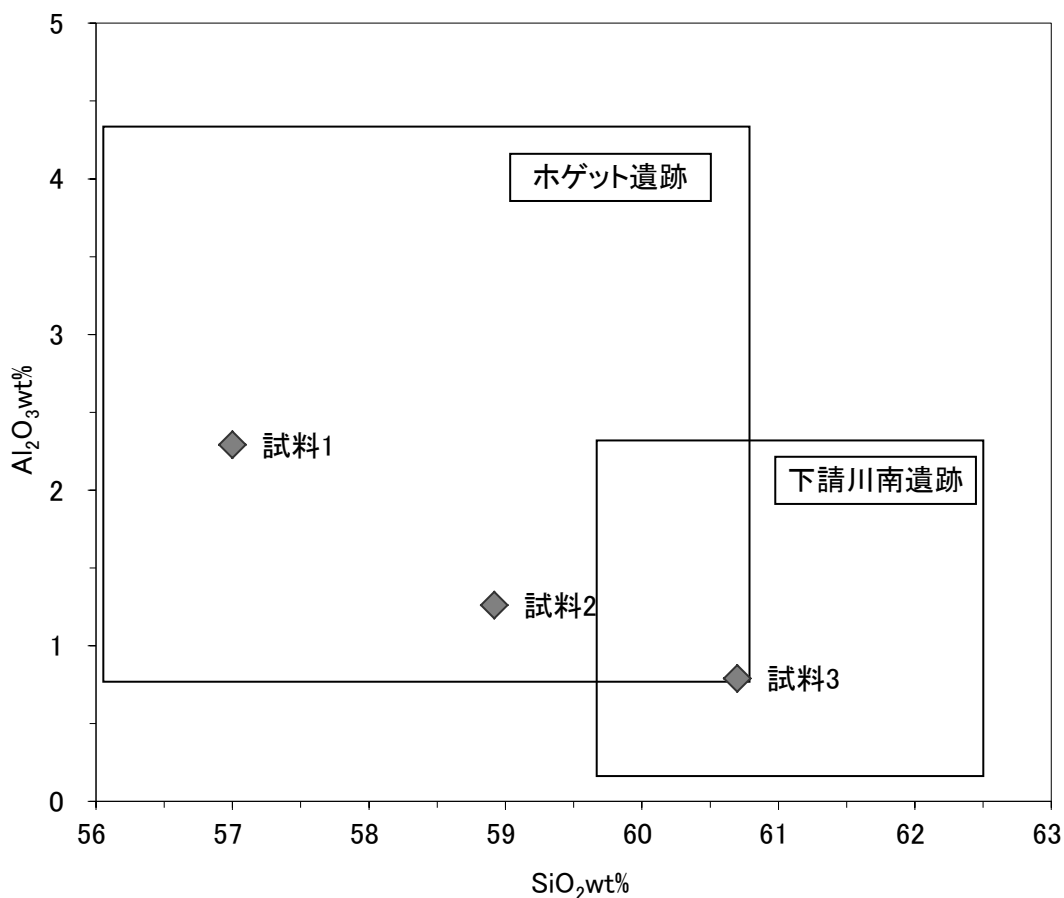
西日本地域の古代末から中世にかけての遺跡で出土する滑石製石鍋は、その石材産地として長崎県西彼杵半島の一帯や山口県宇部市下請川南遺跡などが知られている。ホゲット遺跡が立地する長崎県西彼杵半島には、長崎変成岩類が広く分布しており、蛇紋岩類に伴って滑石片岩が産出することが知られている。また、下請川南遺跡周辺は周防変成岩が主要な地質となっており、同じく蛇紋岩に伴っ

第10表 主要化学組成

(単位: mass%)

試料	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	T-Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Total	備考
試料1 表土除去時採集	57.00	0.08	2.29	6.64	0.06	27.85	0.31	0.04	0.02	0.02	94.31	
試料2 SK06	58.92	0.01	1.26	5.86	0.03	27.46	0.07	0.00	0.01	0.01	93.63	
試料3 SK07	60.70	0.01	0.79	6.38	0.03	28.30	0.03	0.06	0.02	0.01	96.33	
ホゲツ遺跡 平均値	58.81	0.03	2.30	5.79	0.04	27.69	0.02	0.00	0.00	0.00	94.68	比較データ
下請川南遺跡 平均値	60.80	0.01	0.78	5.58	0.05	28.07	0.07	0.03	0.00	0.00	95.39	比較データ

1) 比較データは、今岡ほか(2006)による。



四角の枠は、今岡(2006)によるホゲツ遺跡・下請川南遺跡出土の滑石製石鍋未成品の組成範囲を示す。

第36図 滑石製石鍋のSiO₂とAl₂O₃の関係

て滑石片岩が産出する。

今岡ほか(2006)は、ホゲツ遺跡と下請川南遺跡から出土した滑石製石鍋未成品について化学分析を行い、両遺跡の比較を行っている。今岡ほか(2006)に示される両遺跡における全岩化学組成の平均値を第10表に示した。今岡ほか(2006)によると、ホゲツ遺跡の試料は、第10表に示されるように下請川南遺跡の試料に比べ、Al₂O₃が高く、SiO₂が低くなるとしており、第36図に示されるSiO₂-Al₂O₃図において各遺跡の組成範囲は一部重複するものの、有意な差異があるとしている。

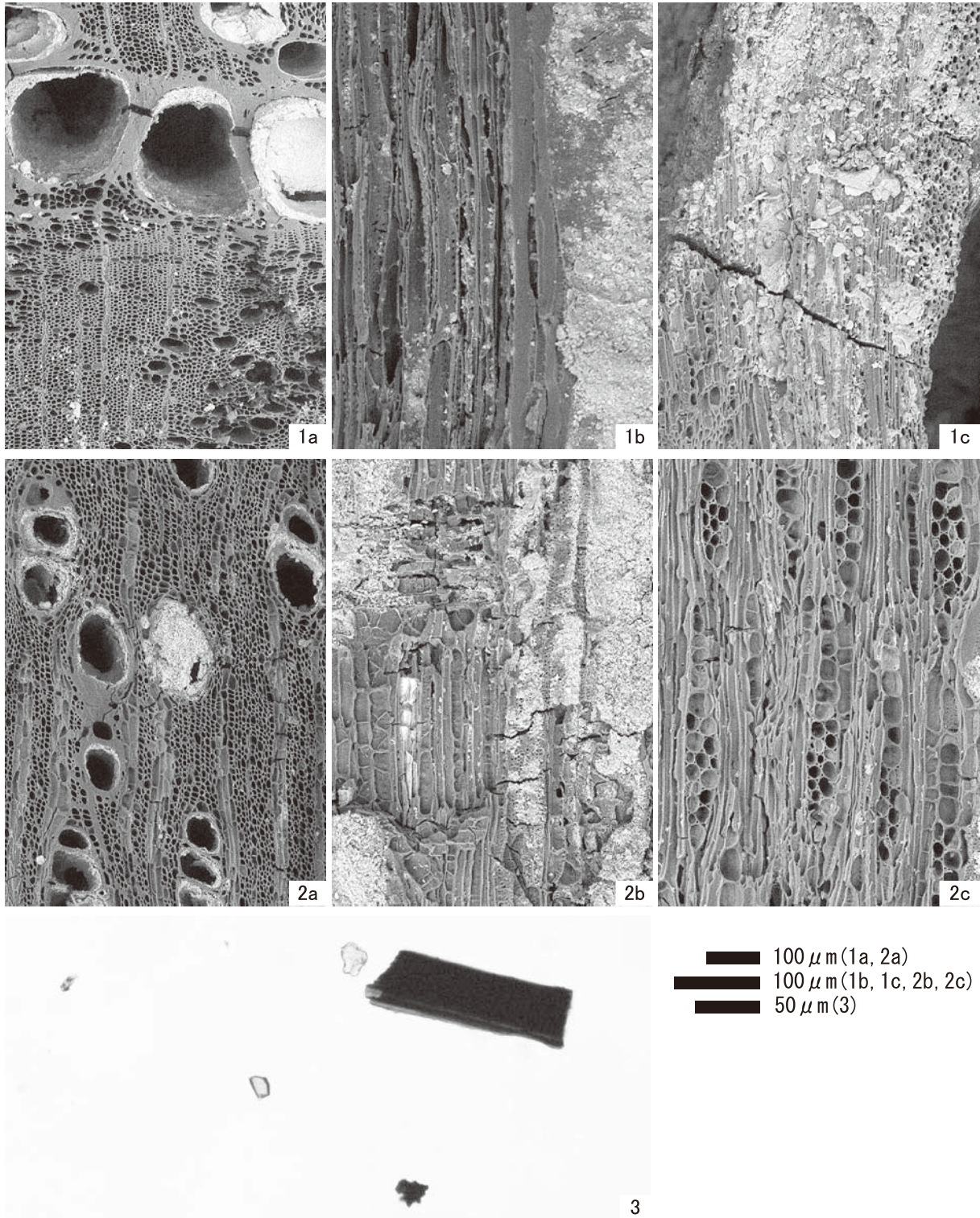
第36図に今回の3試料の分析結果をプロットした。この図に基づいて産地を判断する場合、試料1および試料2は、ホゲツ遺跡の範囲に入ることから、長崎県西彼杵半島の長崎変成岩類由来と推定することが可能である。一方、試料3は、下請川南遺跡の領域にプロットされ、山口県の周防変成岩由来と推測されるが、ホゲツ遺跡の領域にも入っており、やや不確実性が残る結果となる。今岡ほか(2006)によると、顕微鏡下において、ホゲツ遺跡の滑石は径0.1mm以上であるのに対し、下請川南遺跡のものは径0.1mm以下という違いがあるとしている。これに基づくと、試料3については、鏡下観察が判定材料の一つになり得るとみられ、追加の検証に有用と考えられる。

参考文献

- 天野洋司・太田健・草場敬・中井信 1991 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量, 農林水産省
- Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. 1980 土壤の化学. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 学会出版センター, 309p
- Bowen, H. J. M. 1983 環境無機化学-元素の循環と生化学-, 浅見輝男・茅野充男訳, 博友社, 297p
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360
- 土壤標準分析・測定法委員会編 1986 土壤標準分析・測定法, 博友社, 354p
- 藤貫正 1979 カルシウム, 地質調査所化学分析法, 52, 57-61
- 林昭三 1991 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所
- 今岡照喜・中村徹也・早坂康隆・鈴木康之 2006 滑石製石鍋原材料の比較研究-長崎県ホゲツ遺跡と山口県下請川南遺跡-, 考古学と自然科学, 52, 1-17
- 伊東隆夫 1995 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181
- 伊東隆夫 1996 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176
- 伊東隆夫 1997 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201
- 伊東隆夫 1998 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166
- 伊東隆夫 1999 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216
- 伊東隆夫・山田昌久(編) 2012 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p
- 川崎弘・吉田滯・井上恒久 1991 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量, 農林水産省農林水産技術会議事務局編, 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 23-27
- 北島大輔 2010 大内式の設定-中世山口における遺物編年の細分と再編-, 大内氏館跡XI, 山口市教育委員会
- 三宅尚・中越信和 1998 森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態, 植生史研究, 6, 15-30
- 中村純 1967 花粉分析. 古今書院, 232p
- 日本ペドロロジー学会編 1997 土壤調査ハンドブック改訂版. 博友社, 169p
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 新版標準土色帖
- Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51 (4), 1111-1150
- 島地謙・伊東隆夫 1982 図説木材組織. 地球社, 176p
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363
- 徳永重元・山内輝子 1971 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編) 1998 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修), 海青社, 122p [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. 1989 IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]

※) 下記分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

- ・樹種同定
- ・土壌サンプルのリン酸分析と全炭素・全カルシウム分析
- ・土壌サンプルの花粉分析および微細遺物の洗い出し・分類・同定
- ・滑石製品の化学組成分析



1.コナラ属コナラ亜属コナラ節(SK26床面直上;樹種同定試料3)
 2.カキノキ属(SK26床面直上;樹種同定試料1)
 a:木口,b:柁目,c:板目
 3.花粉分析プレパラート内の状況(SK20埋土12層;花粉分析試料1)

第37図 炭化材・花粉分析プレパラート内の状況

Ⅵ 総括

1 縄文時代の落とし穴と袋状土坑

山口県内の落とし穴（第11表）これまで山口県内では、本遺跡を含む10遺跡33基の落とし穴が確認されている。今年度実施された防府市下津令遺跡F地区の調査でも落とし穴とみられる土坑を3基確認しており、さらに増える可能性がある。

県内の落とし穴の分布をみると、平野が少なく内陸部に盆地が多いという本県の地形の特質を反映して、多くは盆地周辺に分布する。丘陵や段丘上に立地する事例が多いが、山口市吉田遺跡や岩国市郷遺跡のように、河川や谷に面した湿地およびその付近に立地する事例もある。これは、狩猟対象とする獲物の習性に応じて、罠を仕掛ける場所を変更するなどの工夫をしたためといえる。

一般に、落とし穴は複数基が一定の配置をなして築かれることが多いが、これまで県内で確認された落とし穴は、調査範囲との関係から単独で検出される例がほとんどで、落とし穴猟における罠の配置とその戦略を考えるうえで良好な事例が少ない。その中で、岩国市郷遺跡は県内最多の17基の落とし穴が検出される良好な事例であった^(注1)。本遺跡の5基はそれに次ぐ検出数であり、落とし穴の配置をわずかながら窺い知ることができる事例となった。

落とし穴の形態と規模（第12表、第38図）普遍的に存在する土坑の中で、「落とし穴」と認識できるのは、一般に幅が狭く、深さが1～2m程度あり、底面に木杭や逆茂木の痕跡とされる1個または数

第11表 山口県内の落とし穴検出遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	遺構	基数	立地	標高(m)	時期	文献
1	下村遺跡 B地区	美祢市 伊佐町	SK08・SK09・SK14・ SK16・SK24	5	河岸段丘上	87.7～88.3		本報告書
2	下村遺跡 A地区	美祢市 伊佐町	SK16	1	丘陵上	101.0		(財)山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センター 2007『下村遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第60集
3	小路遺跡	山口市 黒川	Ⅱ地区第71号土壙	1	沖積段丘上 (削平)	17.1	晩期	山口市教育委員会 1988『小路遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第27集
4	西遺跡	山口市 黒川	H地区第1号土壙	1	尾根上	20.9	晩期	山口市教育委員会 1990『西遺跡Ⅱ』山口市埋蔵文化財調査報告第32集
5	寺内遺跡	山口市 下小鱈	1号・2号落とし穴	2	丘陵中腹～ 裾部	74.2～74.6		山口市教育委員会 1995『寺内遺跡Ⅱ・七尾山古墳』山口市埋蔵文化財調査報告第54・55集
6	入野遺跡	山口市	No.18	1	丘陵斜面	50～60		同上
7	吉田遺跡	山口市 吉田	M-14区SK2・SK3、 K17区Hトレ落とし穴	3	旧河川付近 微高地(削平)	18.3～22.8	晩期 中頃	山口大学埋蔵文化財資料館 1985『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、山口大学埋蔵文化財資料館 1988『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』
8	岡山遺跡	周南市 安田	第20号土壙	1	丘陵斜面	57.1		山口県教育委員会 1987『岡山遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第99集
9	上久宗遺跡	岩国市 周東町	SK-2	1	尾根上	78.3		山口県埋蔵文化財センター 1995『上久宗遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第174集
10	郷遺跡	岩国市 本郷町	SK104・SK108・SK201・ SK203・SK206～ SK208・SK211・SK305・ SK309～SK311・ SK313・SK321・SK322・ SK328・SK334	17	扇状地	192.5～194.0	後期	(財)山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 2004『郷遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第44集

第12表 下村遺跡B地区の落とし穴一覧

No.	グリッド 番号	遺構番号	標高 [m]	平面形	平面規模		底面形	底面規模		残存深 [m]	主軸方向	分類
					長軸(径) [m]	短軸(径) [m]		長軸(径) [m]	短軸(径) [m]			
1	L5	SK08	87.7	長方形	0.76	0.68	長方形	0.66	0.56	0.22	N-70° -W	Cb有
2	K5	SK09	87.8	長方形	0.79	0.66	長方形	0.68	0.61	0.32	N-15° -W	Cb有
3	K5~ K6	SK14	88.3	不整形	1.14	1.05	楕円形	0.84	0.77	0.62	N-61° -E	Ab有
4	J6	SK16	88.3	長方形	0.91	0.68	長方形	0.84	0.61	0.07	N-21° -W	Cb有
5	D7	SK24	88.0	隅丸長方形	1.39	0.84	隅丸長方形	1.27	0.74	0.54	N-82° -E	Ca有
6	-	H18 - SK16	101.0	長方形	0.95	0.65	楕円形	0.82	0.56	0.45	N-87° -W	Ba有

※ No.6は平成 18年度調査の下村遺跡 A地区の落とし穴である。

個の小穴が掘られるものである。底面小穴については、山口市吉田遺跡で検出された落とし穴のように、小穴内に木杭を固定するためと推定される複数個の礫が詰められていた事例もある^(注2)。一方で、底面に小穴を残さない落とし穴もあることから、遺構全体の形状や埋土の状況、遺構の配列の状況、遺跡の立地、周辺環境などを考慮して判断する必要がある。

そういう意味で、本遺跡で確認した落とし穴のうち、SK08・SK09・SK16はいずれも後世の削平により底面付近を残すのみで大部分を失っており、土坑の深さや埋土の状況からは落とし穴とする根拠となりうる情報が得られなかった。しかし、底面に小穴をもつことに加え、付近に同様の遺構が複数基あり、かつそれらが標高約88.0mの等高線に沿ってほぼ配列すること、遺跡が段丘上で河川に面して立地しており、捕獲対象となる動物の生息に適した条件であることから落とし穴と判断した。

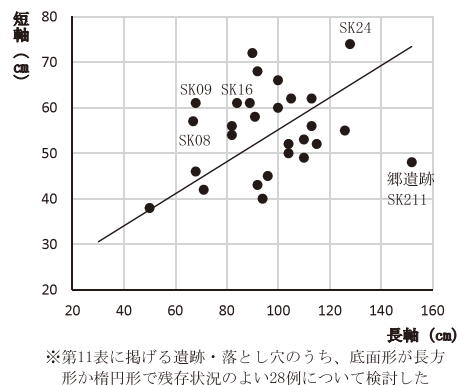
さて、本遺跡で確認した落とし穴は、形状や規模から3種類に分類できる。ここでは、縄文時代の落とし穴の検出数が3,000基を大きく超える鳥取県の大山北麓の研究事例に従い分類を考える。鳥取県大山町西坪中中畝遺跡では42基の落とし穴が検出されたが、従来の分類を踏まえ新たに形態分類案が提示されている^(注3)。すなわち、平面形は底面形を重視して円形(A)・楕円形(B)・長方形(C)・隅丸方形(D)の4つに、断面形は垂直形(a)・外傾形(b)・外反形(c)・くびれ形(d)・徳利形(e)・袋形(f)の6つに分け、さらに底面小穴の有無で分けた上で、各属性の組み合わせによって分類を行っている。

この分類にもとづく落とし穴の変遷をみると、円形系譜と長方形系譜は併行し、ともに次第に底径および容積が縮小していく。楕円形系譜は円形・長方形系譜の後に現れる。平面円形・断面徳利形・底面小穴なしのA e 無類が最古形式で、縄文時代前期末～中期初頭に比定される。その後、円形・長方形系譜ともに縄文時代中期以降、晩期までみられ、底面小穴を有するものが一般的となる。

もちろん、鳥取県の分類基準をそのまま山口県の事例に適用するには注意が必要だが、今後の県内資料の増加による再検討を念頭において、ひとまず上の分類に従えば、SK08・SK09・SK16はいずれも平面長方形・断面外傾形・底面小穴有でありCb有類となる。ただし、断面形は底部付近からの推定形である。SK14は平面が円形に近い不整形・断面外傾形・底面小穴有でAb有類となる。SK24は平面長方形・断面垂直形・底面小穴有のCa有類である。また、下村遺跡A地区でも落とし穴とみられる土坑SK16が検出されているが、平面楕円形・断面垂直形・底面小穴有のBa有類となる。

SK14のようなAb有類、すなわち平面円形の落とし穴は、管見のかぎり、県内で唯一の例である。ただし、円形の土坑として把握されるのみで、落とし穴と認識されない場合もあるので、吟味が必要である。このような形態的な違いは、時期差か集団差、対象とする動物の差によると考える。

また、第38図に示すとおり、県内の落とし穴のうち、平面形が長方形または楕円形のものの底面規模をみると、多くの場合、長軸が60～120cmでまとも、短軸が40～55cmの幅の狭いものと、55～70cmのやや幅の



第38図 県内の落とし穴の底面積

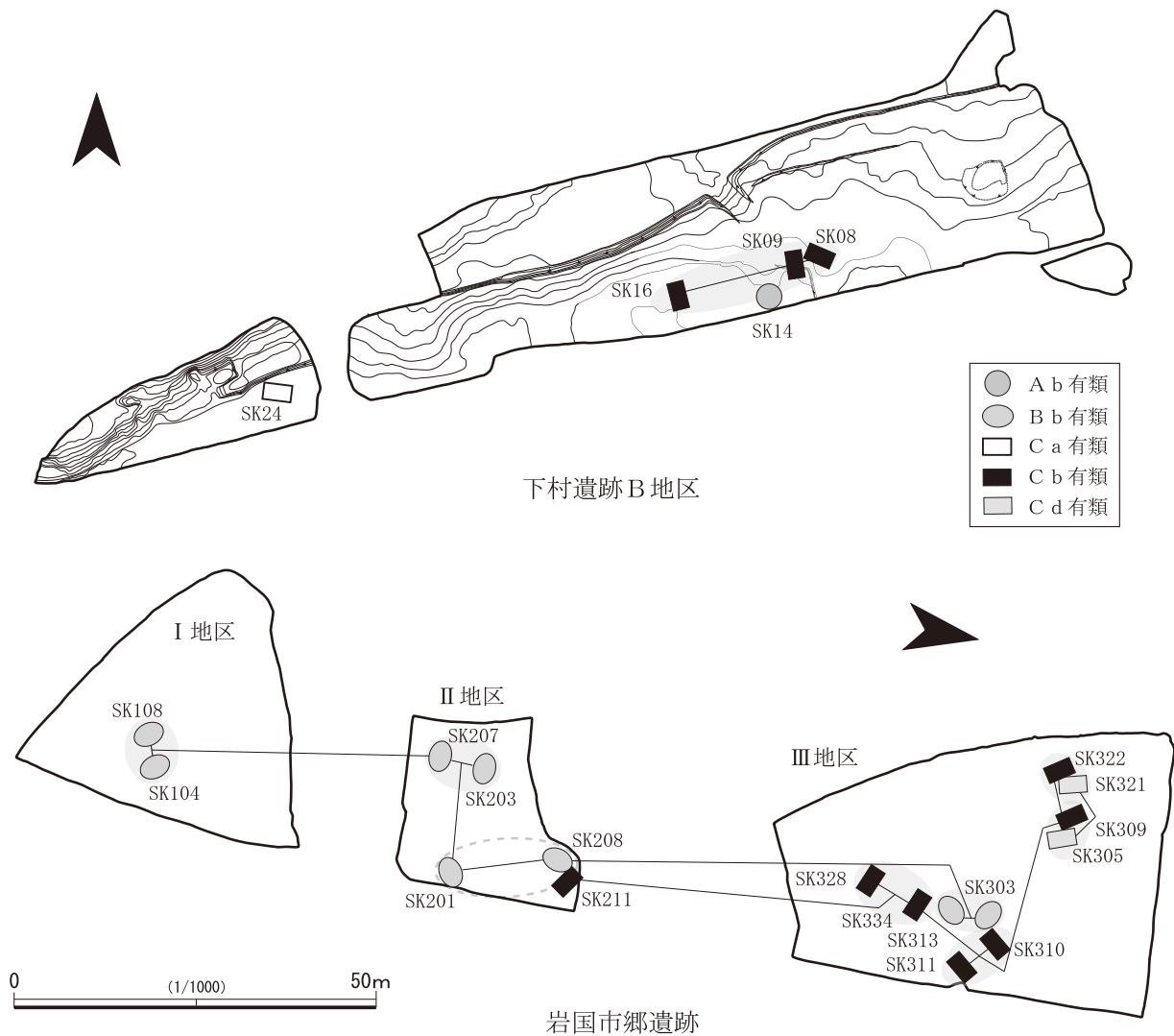
広いものの大きく2群がみられる。SK24は、幅の広い群と近いが、それらと比べても底面規模が大きく、容積も0.58m³と大きいものである。そして、底面小穴は建物の柱穴並みに径が大きく深い。このことから、SK24は、対象とする獲物が、他の落とし穴に比べて大型の動物であった可能性がある。

年代については、土器などの出土遺物が少なく、木杭など炭化物も残りにくい落とし穴で決定することは容易ではない。近年、鳥取県で行われている、底面小穴の埋土および埋土最下層から抽出した炭化物の放射性炭素年代測定の結果によれば、Ab有類とCb有類はともに縄文時代後期～晩期に比定されている。この年代と、本遺跡の平成18(2006)年度の調査で、晩期中葉の土器片が出土したことを踏まえれば、縄文時代後期～晩期のある期間に、この近辺で人々が生活していたとみて無理がない。よって、本遺跡の落とし穴は縄文時代後期～晩期と考える。

落とし穴の配置(第39図) 上の分類をもとに、本遺跡の落とし穴の配置をみると、SK08・SK09・SK16(Cb有類)からなる一群と、SK14(Ab有類)、SK24(Ca有類)の3ヶ所に分けられる。とりわけ、Cb有類の一群はSK08からSK16にかけて、N-73°-Eの方向で直線的に配列されており、各落とし穴の間隔は、SK08から順に3.0mと16.4mである。そして、SK08とSK09は2基一組で配置された可能性もある。これらは同形態であることから同時期に比定できるとすれば、獣道を意識して直線的に並べることで、動物を罠にかける効率を高めようとしたと考える。一般に落とし穴猟の対象となる動物は、イノシシまたはシカとされるが、Cb有類のような直線的な罠の配列は、イノシシの通走路を正確に把握した配列の可能性が高いであろう。

次に、先に述べた岩国市郷遺跡の落とし穴の配置について、上の分類に従い再考してみたい(注4)。郷遺跡は後期初頭～中葉の遺跡で、落とし穴かどうか明らかでない土坑を除けば、Bb有類、Cb有類、Cd有類の3種類に分けられる。各種類の配置をみると、Bb有類とCb有類はそれぞれ同一類の2基を一組とし、各組ではほぼ主軸をそろえる。ただし、II地区のSK201とSK208はそれぞれ調査区外にセットとなる落とし穴が存在する可能性もある。また、III地区のSK309とSK305、SK322とSK321は、それぞれCb有類とCd有類のセットからなる群であり、異なる落とし穴形態が一つの群を形成する。

これらの形態上の差は、時期差や集団差、捕獲対象となる動物の差などと想定されるが、少なくともBb有類の群と、Cb有類・Cd有類の群の2群があり、この2つの群が同時併存したかどうかは不明であるが、それぞれの群に属する落とし穴はいずれも同時併存するまとまりであったと考える。そし



第39図 下村遺跡B地区と岩国市郷遺跡の落とし穴配置

て、2基一組で適度な間隔をあけて、Bb有類の群では直線的に、Cb有類・Cd有類の群では集中的に環状に配列することで、罠の効率を高めようとしたと考える。報告によれば、捕獲の対象とした動物として湿地（「ヌタ場」）を訪れる習性をもつイノシシを想定しており、対象動物が共通するとすれば、Bb有類とCb有類・Cd有類の両形態の差は時期差または集団差となろう。また捕獲されるイノシシは年齢階層の幅が広いことが指摘されており^(注5)、同じグループに属するCb有類とCd有類の差は、後者の断面形態がくびれ形で、より脱出しにくい構造であることから、たとえば前者がイノシシの子、後者が親というように、イノシシの親子を捕獲対象とした可能性もあろう。

このように、下村遺跡B地区と郷遺跡では、落とし穴の数のほか、郷遺跡が2基一組を徹底する点で違いがあるが、近い時期の遺跡であり、直線的に落とし穴を配置するという方法をとる点では、同様な原理で落とし穴罠を行った可能性があろう。

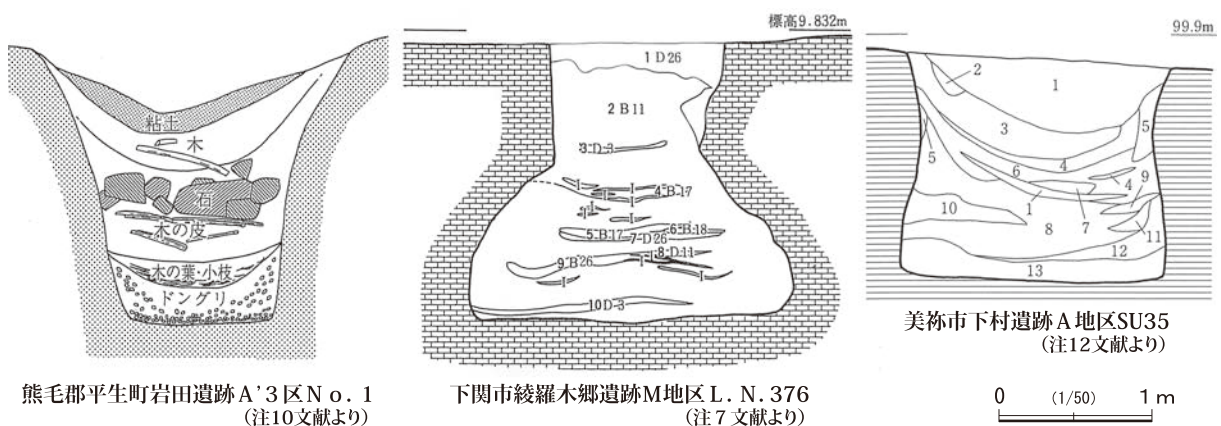
袋状土坑について（第40図）県内では、多くの袋状土坑を確認しており、平成12（2000）年時点で34遺跡が報告されている^(注6)。下関市綾羅木郷遺跡では、1,000基近くの袋状土坑（袋状堅穴）を確認している^(注7)。袋状土坑の特徴として、①底面形は円形で、断面形は底部に比べて開口部の狭い「袋

状」を呈する、②規模は底面径が2 m、深さが2～3 mと大型である、③底面は平坦面をなす、④底面の中央に小穴、周囲に溝を設けるものがある、⑤埋土中からは多量の土器のほか、炭化物が出土するものがある、⑥複数の袋状土坑が群を形成する。これらの特徴をもつ袋状土坑は、いずれも弥生時代前期から中期を中心とし、北部九州から響灘沿岸にかけて分布する。その性格は貯蔵穴と考えるのが一般的である。

本遺跡の袋状土坑SK20は、底面形が不整円形を呈し、開口部の長径が0.54mで、最大径が1.40mであり、最大径に比べて開口部が著しく狭い。土坑の断面形は扁平な球形を呈するが、開口部から約0.20 m下位で急にすぼまり、開口部に向かってわずかに開きながら立ち上がる。深さは0.80mを測る。底面は平坦面をつくらず、袋状というよりフラスコ状を呈する。底面中央の小穴と、周囲の溝は設けられていない。ただし、図化していないが、中央より北側で小穴1ヶ所を検出している。埋土中から土器は一切出土していない。周囲に同様の土坑はみられず、単独で存在する。時期は不明であるが、埋土は褐色シルト主体で、周辺の落とし穴と類似する。このように、SK20は、先述した弥生時代の袋状土坑とは大きく異なる特徴をもつ。そして、その時期は縄文時代に属する可能性がある。

縄文時代の袋状土坑は、前期以降、東日本を中心とする高燥な台地上に分布するが、西日本では低湿地にカシヤトチの実を貯えるための皿状や円筒状の貯蔵穴をつくるのが主流である^(注8)。熊本郡上関町田ノ浦遺跡は海岸に近接した後背湿地に立地し、縄文時代後期の堅果類（ドングリ）貯蔵穴が14基確認されたが、いずれも断面形が皿状の土坑であった^(注9)。また、熊本郡平生町岩田遺跡は海岸に面した小扇状地の末端に立地し、縄文時代晩期の貯蔵穴33基以上を検出したが、深さが1 m前後の円筒状と皿状の2種類があった。貯蔵穴の内部は、底にドングリ類を入れ、その上を木の葉や小枝で覆っていた^(注10)。これらは、湿地を利用した堅果類の水さらしの機能を併せもつ貯蔵穴である。本遺跡の袋状土坑は、形状のみならず立地からみても、この2例とは異なる。

一方で、弥生時代の袋状土坑のうち、下関市綾羅木郷遺跡のM地区L.N.376は弥生時代前期後半（綾羅木Ⅰ式）に比定されるが^(注11)、開口部が頸状に直立または外傾する点は本遺跡のSK24に類似する。しかし、底面が平坦面をなすこと、規模は開口部の最大径が1.37m、底面の最大径が2.13mで、SK24と比べてかなり大きいこと、多くの土器と石器を出土することなどからみて、やはり本遺跡例とは異なる。綾羅木郷遺跡の袋状土坑は、弥生時代前期末（綾羅木Ⅲ式）に基数が増加するとともに、規模



第40図 貯蔵穴と袋状土坑の例（断面形態）

がさらに大型になる。この地域に一般的な袋状土坑は、この前期末以降の動きとともに拡散するとみられる。本遺跡の約400m東方にある下村遺跡A地区は弥生時代中期初頭の集落遺跡であり、袋状土坑が検出されるが^(注12)、特徴からみてこの一般的な袋状土坑に含まれる。弥生時代以来の袋状土坑の起源を韓半島に求める見解もあるが^(注13)、本遺跡の例は、弥生時代の一般的な袋状土坑とは系譜が異なると考える。

以上から、袋状土坑SK24は、弥生時代の北部九州から響灘沿岸に一般的な袋状土坑ではなく、築造時期については、積極的な根拠は乏しいが、周辺遺構との関係から縄文時代晩期頃と考える。その性格は、埋土中から採取した土壌サンプルの花粉分析、および微細生物の洗い出しと分類・同定を実施したが、花粉化石や種実遺体は一切確認できなかった。しかし、その形状や立地からみて、貯蔵穴の蓋然性が高いと考える。

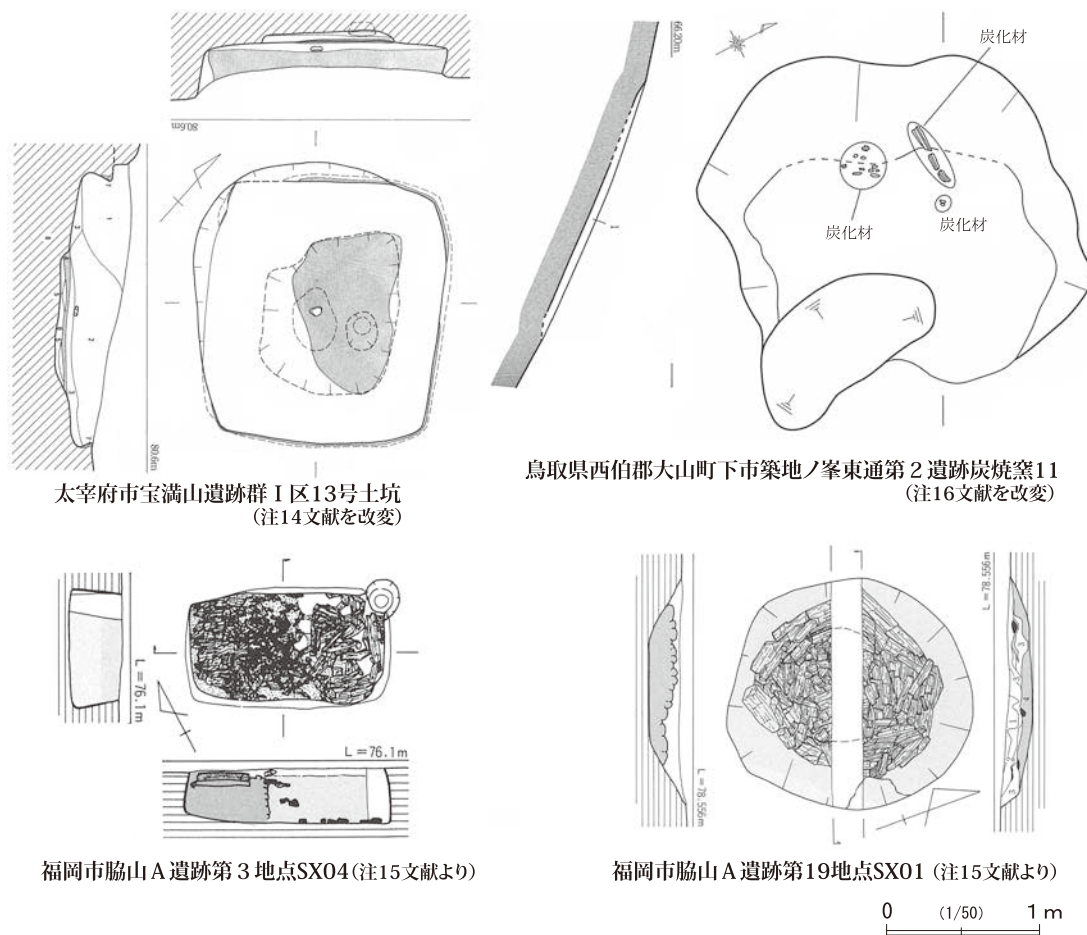
2 木炭焼成坑について（第41図）

本遺跡では、木炭焼成坑と考える土坑SK26を検出した。平面形は方形で、規模は長軸が2.10m、短軸が1.93mを測り、埋土中には炭と焼土を多く含んでいた。床面では木炭が塊状で出土したが、木炭の配置や積み上げ方法等は判然としない。時期は、放射性炭素年代測定の結果から11世紀前半～12世紀後半で、平安時代後期～末期と考える。木材の樹種同定の結果、カキノキ属やコナラ節等の広葉樹が使用されており、いずれも重硬で強度・耐朽性が高く、火力よりも持続性を目的とした硬い木炭を生産していたとされる。

このように、SK26は、積み上げた木材を燃やした後、土で覆って蒸し焼きにする、伏炭法（「伏せ焼き」）による製炭を行った土坑と考える。これまで県内では、同様な構造をもつ木炭焼成坑の例はみられない。一方、東北や北陸地方をはじめ、各地で類例がみられる。近隣地域の例として、福岡県太宰府市宝満山遺跡群のI区では、窖窯型木炭窯と鍛冶炉または製錬炉のほかに、木炭焼成坑を含む焼土坑12基が検出された。そのうち13号土坑は平面形が隅丸長方形で、規模は長軸が1.75m、短軸が1.60mであり、時期は8世紀初頭に比定される^(注14)。鍛冶炉や製錬炉に併設されることから、製鉄に伴い製炭が一体的に行われていたとみられる。形状・規模ともにSK26に類似しており、木炭の使用目的を考える手がかりとなる。

福岡市脇山A遺跡では木炭焼成坑を含む焼土坑が80基以上検出された。そのうち、第3地点SX04、第19地点SX01など、木炭が放置された状態で検出された遺構が多く、木材の組み上げ方法が窺える資料である^(注15)。第19地点SX01の平面形が直径約2.1mの円形を呈するほかは、隅丸長方形を呈しており、規模は長軸が1.0～2.0m程度、短軸が0.6～1.2m程度で、大小がある。時期は、周辺から13世紀代の土坑や墓が検出されているが、はっきりしない。第3地点SX04と第19地点SX01の木炭の樹種同定の結果、前者がすべてカシ類、後者がすべてクスノキ科と判明している。木材の性質は、カシ類が堅硬で、クスノキ科が中程度の強さであり、いずれも火力と持続性が強い。

鳥取県西伯郡大山町下市築地ノ峯東通第2遺跡では、須恵器窯や製鉄炉、窖窯型木炭窯に近接して木炭焼成坑22基が検出されている^(注16)。平面形は円形・楕円形・隅丸方形・不整形があり、時期は、本遺跡のSK26と重なる11～12世紀を中心とする。炭焼窯11は平面形が方形に近い不整形を呈し、規



第41図 木炭焼成坑の例

模は長軸が2.34m、短軸が2.22mを測る。炭化材の樹種同定を行った7点は、いずれもコナラ属クヌギ節であった。この遺跡の他の木炭焼成坑についても、ほとんどがコナラ節やクヌギ節の木材を使用することから、SK26が一般的な木材を選んで使用していたと考える。

本遺跡とその周辺では、製鉄に関わる遺跡や遺構は確認できない。美祢市内には長登銅山跡があり、同市内の中村遺跡や国秀遺跡では銅鉱石や銅塊、上ノ山遺跡では炉跡のほか、銅鉱石や木炭が出土しており、集落内で銅製錬が行われたことが窺える^(注16)。これらの遺跡は7世紀代に始まり8世紀代を中心とするため、本遺跡との関係は薄い。本遺跡の包含層中から羽口片が出土しており、調査区外に製鉄や製銅に関わる遺構が存在した可能性がある。また、8世紀末～9世紀初頭の掘立柱建物SB01は、長登銅山における古代の銅山経営の時期とほぼ併行すること、包含層中から緑釉片が出土したことから、公的な施設であった可能性も否定できず、羽口片はこの時期のもの可能性がある。

さらに、先の3遺跡の事例では、いずれも木炭焼成坑が複数基で群集していた。これらは同時併存するか、築造を繰り返したとみられ、一定期間の製炭の継続を見込んでおり、生産規模が大きいと考える。これに対して、SK26は単独で存在しており、短期的でかつ生産規模も小さいと推定する。

以上のように、木炭焼成坑SK26は、製鉄等に適した木炭を生産していたが、その供給先は明らかではない。11～12世紀のある時期に、短期的に家内経営的な製炭を行った可能性がある。

3 集石土坑について（第42図）

本遺跡では、平面形が方形または不整形の土坑内に、複数の礫を集めて詰めた遺構3基（SK05・SK06・SK07）を確認しており、その形態から集石土坑と呼ぶこととした。縄文時代にも同様の呼称の遺構があるが、本遺跡の例は中世に比定でき、その性格も異なると考える。

さて、本遺跡の集石土坑の特徴は、①土坑の平面規模は1.0m前後で、深さは0.6～0.7m程度を測る（SK07は底面より下位の基盤層を掘り込んだ可能性がある）、②礫は検出面からの深さが30～50cmの位置まで詰められており、底面から浮いた状態である、③礫は大小あり、円礫や角礫など多様な石材を含み、無秩序に詰められる、④埋土は褐色系の粘質土であり、炭や焼土を含む、⑤遺物は礫に混じるものと、SK05とSK06のように底面付近で出土するものがあり、前者はいずれも15世紀を下限とし複数時期にわたる遺物が混じるのに対して、後者はSK05が13世紀中頃、SK06は14世紀前半～中頃であり、時期的にずれがある。そして、放射性炭素年代測定の結果は、後者の遺物の時期と近い。

同様の特徴をもつ遺構として中世墓があるが、県内の中世墓のうち、集石を伴う例として、山口市瑠璃光寺跡遺跡^(注18)、下関市竜王南遺跡^(注19)、同坂の上遺跡^(注20)、柳井市向田遺跡^(注21)、同吉毛遺跡^(注22)などが挙げられる。

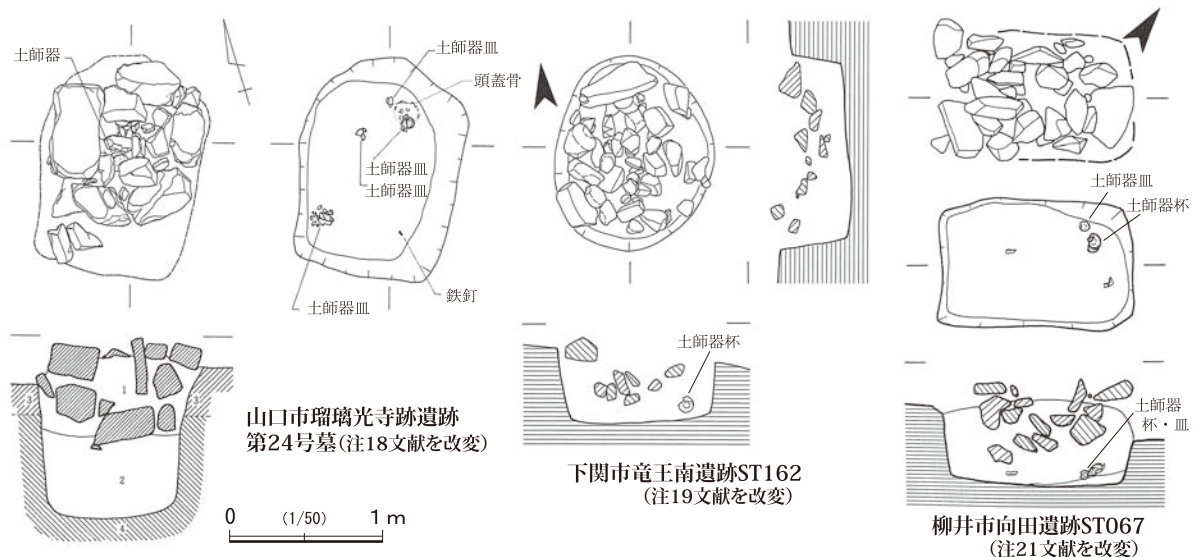
山口市瑠璃光寺跡遺跡では、五輪塔や宝篋印塔などの石塔群のほか、15世紀初頭から16世紀後葉にかけての地表施設を伴う墓178基が検出された。第24号墓は、平面形が不整形の墓坑内の上位に、複数の礫が埋められていた。報告書では詰石とするが、地表施設の石が沈下した可能性も指摘されている。底面付近から鉄釘1本と土師器皿4点が出土しており、15世紀中葉～後葉に位置づけられる。

下関市竜王南遺跡は、15世紀から16世紀を中心とする中世墓群で、五輪塔や宝篋印塔などの石塔群のほか、積石などを伴う182基の墓が確認された。ST162では、平面楕円形の墓坑内の上層に、積石と推定される礫群が落ち込んだ状態で検出され、底面付近からは土師器杯2点が出土した。

柳井市向田遺跡では、五輪塔や宝篋印塔を含む石塔群のほか、14世紀から19世紀にかけての地表施設をもつ墓を含む墓坑群が検出された。ST067では、平面長方形の墓坑内の中位に、地表施設の角礫が落ち込んだ状態で検出された。底面からは人骨のほか、土師器皿1点と杯2点が出土し、14世紀後半に位置づけられる。

以上の例から、木棺墓では、木棺や遺体が腐った後、墓標や地表施設として存在した礫群がそのまま土坑内に落ち込むことがあると推定できるが、その場合、棺材は残存しなくても、棺に伴う鉄釘が残ることが多い。土坑墓でも、遺体が腐った後、礫群が土坑内に落ち込んだとすれば、本遺跡の集石土坑のような状況が起こりうると考える。しかし、他の中世墓群で見られるような、周辺に地表施設となる多量の積石の痕跡がないこと、意図的に礫が詰められた可能性もあること、SK06を除き供献土器が出土しないこと、SK05とSK06の土壌サンプルの分析結果は、遺体の存在を示す有意なものではなかったことから、墓とする決め手となる積極的な根拠は認められなかった。

一方で、性格不明と報告した土坑SK10とSK13は、平面形が隅丸長方形で、規模は長軸が1.0m程度、短軸が0.7～1.0m程度であり、底面から土師器杯が置かれた状態で出土しており、土坑墓の可能性はある。時期はSK10が14世紀後半～15世紀前半で、SK13が14世紀前半～中頃であり、集石土坑の時期



第42図 県内の集石をもつ中世墓の例

とも一部重なっている。また、集石土坑とその周辺は、後述する掘立柱建物SB02の築造時に整地されたと推定でき、近世以降にかなりの削平を受けたことから、地表施設も失われた可能性がある。

このように、先に述べた集石土坑の特徴に加えて、集石土坑のほかにも中世墓の可能性のある土坑が存在し、これら複数の土坑が集まって墓域を形成したとすれば、この遺構が中世墓である蓋然性は高いと考える。

4 中世の掘立柱建物と周辺遺構（第13図）

本遺跡で検出した掘立柱建物SB02は、桁行3間（8.4m）×梁行2間（4.0m）で、床面積が33.6㎡を測る。その構成柱穴であるSP138・SP563・SP569では、複数の礫が出土しており、地下式礎石または根石の可能性はある。東側梁行に平行する柱列1は、廂あるいは塀や柵に相当し、SD04とSD05は雨落溝に相当する可能性がある。時期は、放射性炭素年代測定の結果は14世紀代、SP138・SP140・SP233から出土した遺物からは15世紀代に比定できる。

中世前期末から後期（鎌倉時代末～室町時代前半）にかけては、規模的に卓越した居館を中心として、周辺に屋敷地が配置される「居館化」の段階であり、集落は集村化し、一般集落は非常に少なくなる時期とされる。そして、山口県内では、鎌倉時代から室町時代前半期の集落が多く、室町時代後半の15世紀末頃には、大内氏館の改修などによる守護所再編に伴う在地支配の強化が在地領主の居館の求心力を向上させ、集村化を促したとされる^(注23)。

掘立柱建物SB02は、中規模以上で地下式礎石を伴う建物であること、周辺の遺構や包含層中から青磁や白磁等の奢侈品が出土することから、有力層の居宅かそれに伴う施設に相当する可能性がある。調査範囲からは当時の集落構成等は不明だが、掘立柱建物SB02は「居館化」に至る直前の時期の集落を構成する建物と考える。

ところで、出土遺物の年代や放射性炭素年代測定の結果、あるいは建物の構成柱穴が墓の一部を壊すことからみて、掘立柱建物の方が集石土坑よりも後に築造されると考える。このことから、集石土

坑の礫群は、建物の築造時にはすでに土坑内に落ち込んでおり、その上を整地して建物が築かれたと推定する。一方、構成柱穴の埋土は炭や焼土を多く含み、周辺遺構や集石土坑の上層にも同様な埋土が堆積する状況が窺える。このことは、掘立柱建物SB02が火災に遭ったこと、そして火災により廃絶される時期と、周辺遺構や集石土坑が埋没する時期が、ほぼ重なることを示す。

以上から、中世の本遺跡では、13世紀中頃から墓地が築かれ、14世紀中頃には掘立柱建物SB02を含む集落が形成されるが、15世紀のある時期に建物が焼失し、集落は放棄される。その後、近世以降に耕作地として利用され、造成等を経て現代に至ると考える。

参考文献

- 注1) 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター2004『郷遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第44集
- 注2) 山口大学埋蔵文化財資料館1988『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』
- 注3) 濱隆造2014「落とし穴について」『西坪中中畝遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書54
- 注4) 注1) 文献をもとに検討した。
- 注5) 金子浩昌1983「狩猟対象と技術」『縄文文化の研究』第2巻、雄山閣出版
- 注6) 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター2000『新張遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第20集
- 注7) 下関市教育委員会1981『綾羅木郷遺跡Ⅰ』
- 注8) 木下正史1988「籾の貯蔵と収穫」『弥生文化の研究』第2巻、雄山閣出版
- 注9) 財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター2011『田ノ浦遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財センター調査報告第74集
- 注10) 中越利夫2000「岩田遺跡」『山口県史』資料編 考古1
- 注11) 前掲注7) 文献
- 注12) 財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター2007『下村遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告書第60集
- 注13) 西谷正1986「朝鮮半島と弥生文化」『弥生文化の研究』第9巻
- 注14) 福岡県教育委員会2002『宝満山遺跡群・浦ノ田遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第169集
- 注15) 福岡市教育委員会1992『脇山Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第311集
- 注16) 鳥取県埋蔵文化財センター2013『下市築地ノ峯東通第2遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書49
- 注17) 岩崎仁志2001「山口県における古代銅生産関連遺跡の調査」『古代の銅生産—「古代の銅生産シンポジウムin長登」資料集—』美東町・美東町教育委員会
- 注18) 山口市教育委員会1988『瑠璃光寺跡遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告書第28集
- 注19) 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター2002『竜王南遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第31集
- 注20) 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会1987『坂ノ上遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第101集
- 注21) 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター2002『向田遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財センター調査報告第28集
- 注22) 財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター2008『吉毛遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第63集
- 注23) 前川要2004「集落遺跡・解説」『山口県史』資料編・考古2

圖 版



1 調査区遠景（南西から）



2 調査区全景



1 調査区東側完掘状況（東から）



2 調査区東側完掘状況（西から）



1 調査区西側完掘状況（東から）



2 調査区東側南壁土層断面（北から）

図版 4



1 調査区東側西壁土層断面（東から）



2 SK08完掘状況（西から）



3 SK09完掘状況（北から）



4 SK14完掘状況（西から）



5 SK24完掘状況（東から）



1 SK20検出及び半裁状況（東から）



2 SK20土層断面（南から）



3 掘立柱建物 SB01 完掘状況（南から）



4 SK26検出状況（北から）



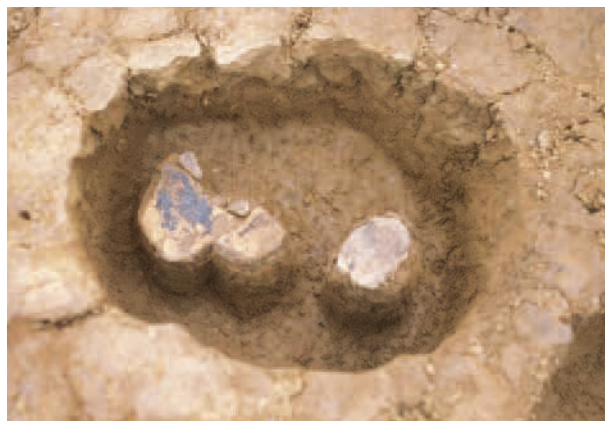
5 SK26掘り込み状況（北から）



1 SK26木炭検出状況（東から）



2 SK26完掘状況（東から）



3 SP063土器出土状況（北東から）



4 SP144土器出土状況（南から）



5 SP144土器出土状況（拡大 東から）



1 SP563 (SB02) 石出土状況 (西から)



2 SP563 (SB02) 石出土状況 (北から)



3 SP138 (SB02) 土器出土状況 (北から)



4 SP138 (SB02) 土器出土状況 (拡大 東から)



5 SP138 (SB02) 柱痕検出及び石出土状況 (南から)



1 SK05集石出土状況（東から）



2 SK07集石出土状況（北から）



1 SK06集石出土状況（北から）



2 SK06集石検出状況（北から）



3 SK06掘り込み状況（南から）

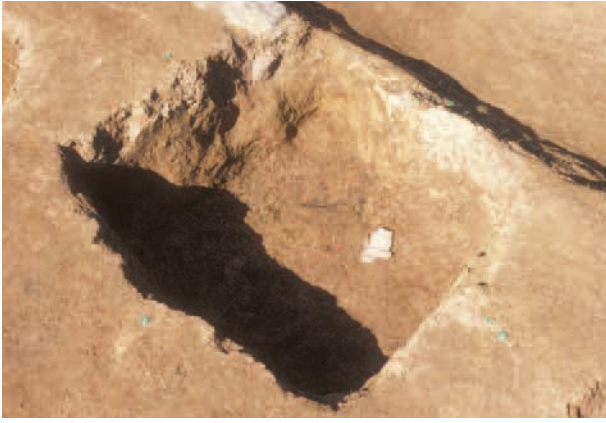


4 SK06土器出土状況（東から）



5 SK06青磁碗出土状況（南西から）

図版 10



1 SK06掘り込み状況（下層 南東から）



2 SK06石鍋出土状況（南西から）



3 SK06掘り込み状況（最下層 南から）



4 SK06土器出土状況（東から）



5 SK10掘り込み状況（西から）



6 SK10土器出土状況（南から）



7 SK10掘り込み状況（北から）



8 SK10土器出土状況（北から）



1 SK11掘り込み状況（東から）



2 SK11掘り込み及びSK25検出状況（北から）



3 SK12掘り込み状況（東から）



4 SK25完掘状況（南から）



5 SK13掘り込み状況（北から）



6 SK13土器出土状況（西から）



7 SP112土器出土状況（西から）



8 SP161土層断面（南から）

図版 12



1 SP197土器出土状況（南東から）



2 SP300石出土状況（南から）



3 SP571白磁皿出土状況（西から）



4 SP094土製品出土状況（北から）



5 SP169石出土状況（南東から）



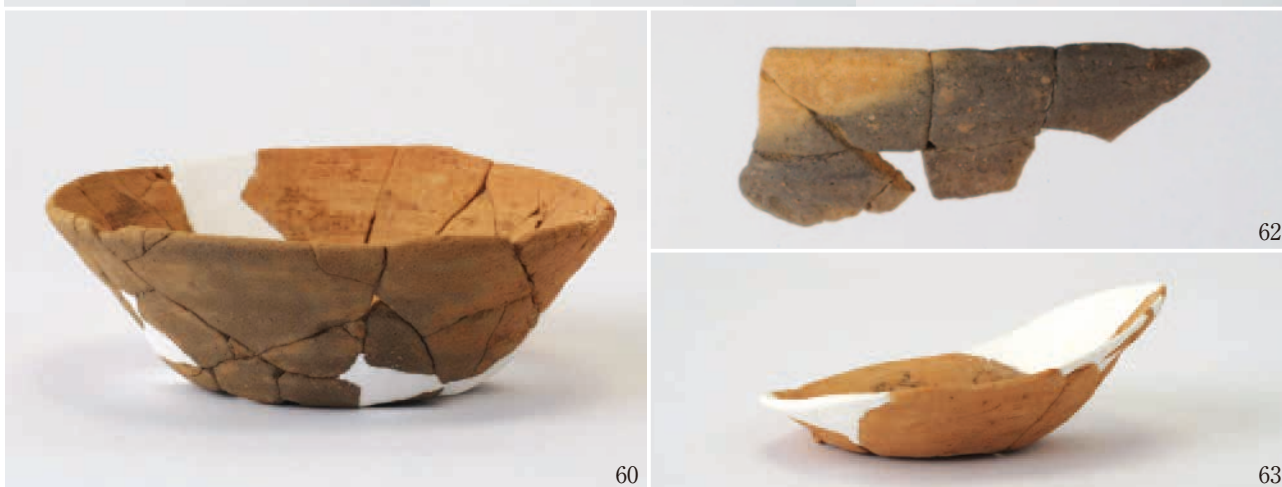
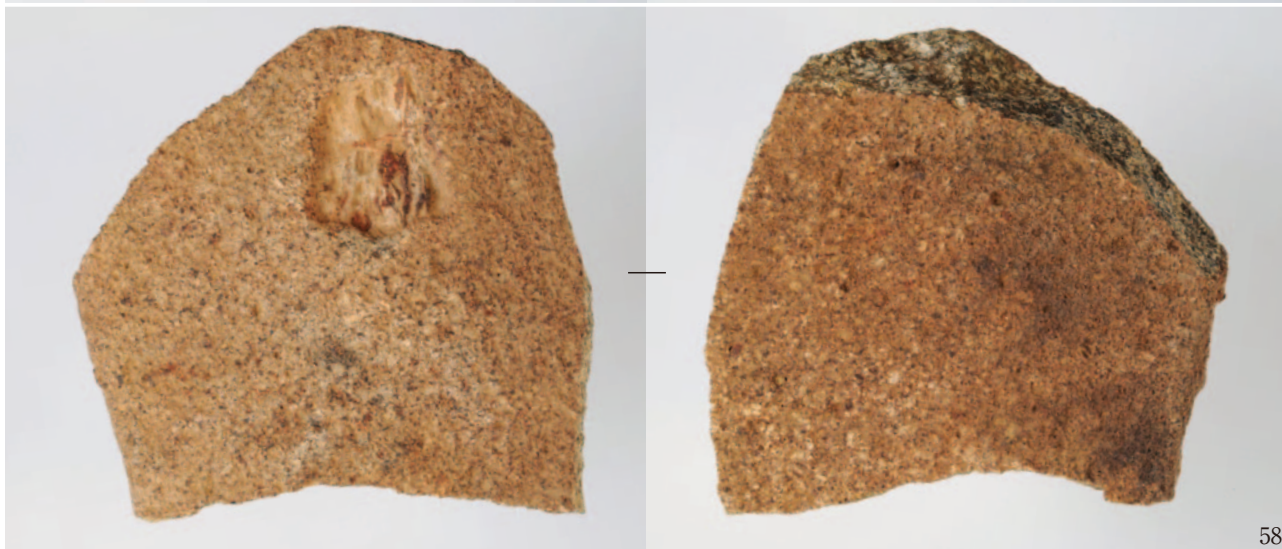
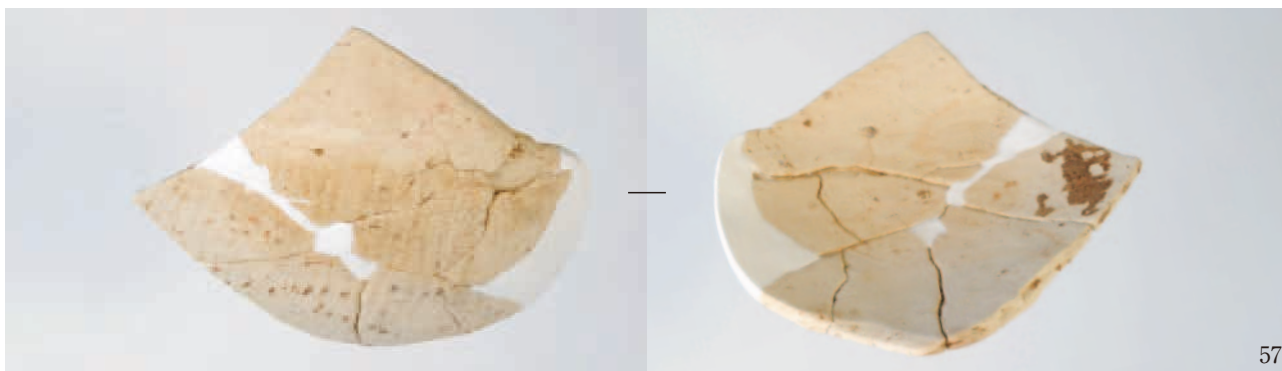
遺構出土遺物① (弥生~古墳・古代・中世)



遺構出土遺物② (中世 柱列・溝・集石土坑)



遺構出土遺物③ (中世 集石土坑)





遺構出土遺物⑤ (中世 土坑・柱穴)



遺構出土遺物⑥（中世 柱穴）、包含層出土遺物①（石器、繩文土器）



包含層出土遺物② (弥生・古墳・古代)



包含層出土遺物③ (古代・中世)



包含層出土遺物④ (中世)



包含層出土遺物⑤ (中世・近世・時期不明)、遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しもむらいせきBちく
書名	下村遺跡B地区
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第92集
編著者名	岡田裕之 米澤昭信 大重優花
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2015年3月25日（平成27年3月25日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもむらいせき 下村遺跡 B地区	やまぐちけん 山口県 美祢市 伊佐町 伊佐	352136		34° 09' 47"	131° 11' 54"	20140507) 20150109	3,210	市道整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下村遺跡 B地区	集落	縄文 古代 中世	掘立柱建物 2棟 柱列 4列 土坑 25基 溝 6条 柱穴 580基	縄文土器 須恵器 中世土器 瓦質土器 輸入陶磁器等	

要約	<p>下村遺跡B地区は、美祢市南西部の大嶺盆地にあり、厚狭川左岸地域に広がる、標高85m～90mの丘陵斜面上に位置する集落遺跡である。前回、平成18年度の下村遺跡A地区の調査では、絵画土器をはじめとする弥生土器や墓など、弥生時代の貴重な遺構・遺物が大量に発掘された。今回の調査では、前回のB地区と同様に、古代の須恵器や中世の土師器・瓦質土器・石鍋・輸入磁器（青磁・白磁）が発見され、古代の木炭焼成坑や掘立柱建物、中世の掘立柱建物や集石土坑なども発見された。その他、縄文土器のほか、狩猟に伴うものと考えられる、落とし穴や石鏃なども検出され、当時の人々の生活をうかがう貴重な資料を多数得ることができた。</p>
----	---

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第92集

下村遺跡B地区

2015年3月25日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 大村印刷株式会社

〒747-0849 山口県防府市西仁井令一丁目21番55号